
とある専業主婦の憂鬱

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある専業主婦の憂鬱

【Nコード】

N2898S

【作者名】

fumia

【あらすじ】

和樹と結婚して早1年が過ぎ、専業主婦としての生活も板に着いてきた薫は、経済的には困窮していないので不幸では無いが、決して手放して幸せだとも言えない微妙な夫婦生活を送っていた。そんな時、自身が妊娠した事を知り、待望の子供が産まれる事で生活に良い変化が起きるのではないかと一縷の希望を抱きつつ幸せな気分浸るが、腹の中の胎児の原因不明な突然死による流産と、その原因が自分の体質にあり、今後妊娠する事はあっても出産まで行く事は非常に難しいだろう、諦めた方がいいと医者から説き伏せられ、

絶望の淵に叩き落とされる。

第一話：懐妊く幸せなのか、不幸せなのか……

>>薫

3・5LのVQエンジンにスーパーチャージャーを装着した愛車のY50フーガGTの後期型を、我が家に宛がわれた、立体駐車場の支柱に挟まれた2台続きの横列駐車スペースの、此方から見て左側のスペースに、右の方にステアリングを切って後退しながら駐車をし、停車措置をしてフオグランプとエンジンを切ると、僕は助手席に置いたハンドバッグを手に取ってドアを開け、車から降りてドアを施錠した。

僕の車にはどの車にも車内に、ETC、ルームランプに白色LEDランプ、カーナビと一体型の社外品のオーディオと、ダッシュボードのセンターパネルの上に左から電動の油圧計・油温計・水温計が並んだ三連メーターと乗員変更なしのタイプの6点式のロールバーが取り付けられている。ロールバーを付けた所為で車両自体は事故車扱いとなつて価値が目減りしてしまったが、元々前世紀末頃に造られた、製造されてから優に30年から40年位たった廃車や事故車をレストアした、小さな傷と凹みだらけのボロボロの車ばかりで価値など元々無いに等しいから、僕自身は特に気にはしていない。さらにそのロールバーの助手席と運転席にサイドバーも増設し、ロールバーの運転席側のAピラーの所にシートベルトカッター付きの特殊ハンマー、助手席下のダッシュボードの所に、発炎筒と並べてスプレー缶タイプの消火器を常備している。

そして全ての窓ガラスに防犯性能も備えた透過率70%の黒いガラスフィルムを貼って車内の様子が見えにくくし、2枚ある字発光式のナンバープレートの内、前にあるプレートの電力を遮断し、赤外線カメラに反応するとストロボを焚いてナンバーが読み取られる事を防ぐ機械を取り着けている。

足回りとエンジン周りの改造に力を入れ、後ろのマフラーはステレンスの左右二本出しの直管低音マフラーに取り替え、ホイールを20インチのアルミに替え、ブレーキも4輪ディスク化して、大口径のディスクに4ピストンの対向ピストンキャリパーを組み込んでレーシングカーのその様に仕上げ、サスペンションをエアサスに替えて最低車高を10cmまで落として、サイドテールとフロント・リアエアロを取り付けてフルエアロ化している。

僕の車には全てフォグランプが付いている。ヘッドライトと一体型になっている古い型ならそのままにして、フロントバンパーのエアロ部分のフォグ部分にそのままハザードランプを持つてくる。ハザードとヘッドランプが同じレンズ内にあつて、フォグランプがバンパーに取り付けられた比較的新しい車ならそのままフォグランプをエアロに組み込む。そして、Y33や150クラウンの様にフロントバンパーにハザードとフォグが並んでいる車の場合はエアロにはフォグランプだけ取り付けて、ハザードランプはモールランプと共にLED化して一体化させ、白いLEDで車幅灯を点灯させ、黄色いLEDでウインカーを明滅させる。そもそもフォグランプが付いていない車は、GT-R34のようにエアロを取り付けるときハザードの下に増設するか、エアロにはフォグランプだけにしてモールランプにハザードも持つてくるような細工を施す。そしてGTウイングを着けたGT-R以外の車両にはトランクに赤いLEDの細長いハイマウントストップランプが付いた小型のリアウイングを取り付けている。そして汚れが目立ちにくいという理由で全部同じようなシルバーメタリックで車体が塗装されている。

エンジンはターボならツインターボにして、必要ならボアアップや載せ替えても3L6気筒、NAなら3.5L以上の6気筒エンジンにしてスーパーチャージャーを着けて500馬力程度は出せるようにし、勿論ミッションも強化ATに交換し、リミッターも外し、200km/h以上は余裕で出せる位にはチューンアップしている。要するに走り屋仕様の、ドリ車仕立のVIPカーが僕の愛車達…

という訳である。

ただ、その車達も、今現在ここに停まっているフーガ以外は少し離れた所にある、態々その為に購入した、屋根がついているだけましとしか言えない様な酷くボロボロに廃れた大きな倉庫の中に纏めて保管し、気が向いた時に出掛けただに他の車に乗り換える事にし、2つある駐車スペースの内の手前から見て左側の方を定位置にして、僕は手元に置く1台を駐車していた。

そして今、駐車したフーガから降りた僕の左側、愛車の向こう側にあるもう一つの我が家の駐車スペースには、普段滅多に動かす事はない和樹の黒いアルファードの大きな陰が、駐車場の殺風景な灰色のコンクリート壁に反射した蛍光灯の白い光に照らされて、あの特有の威圧感を更に増した感じで泰然と鎮座していた。

この車を旦那が購入したいと言いつ出した時、彼自身が休日ですら乗るかどうか怪しいサンデードライバーである事と、毎日ハンドルを握るものの、僕自身が既に車を持っている上に夫婦二人だけだと現状のセダンでも十分に事足りた事と僕自身ミニバンが大嫌いである事から、必要無いと反対したが、

「今は必要無くても、今後家族が増えたら、あつて良かったと思う日が来るかも知れないだろ！」

と言つて、彼は半ば強引にこの車を新車で買ってしまったのだ。

別に彼の車だから、何を買おうが基本的に口を出す気は無かったが、DQN御用達の悪名高きアルファードに決めると聞いて、

「どうしてアルファードなのですか？せめてエルグランドやエリシオンのプレステージにしてよ！アルファードなんて死んでも嫌ですわ！」

と、慌てて食い下がったが、

「車と云えばトヨタだろ！」

と云うよく解らない主張によって、結局押し切られてしまった。

しかもこの車、当初の予定では黒ではなくて、ホワイトパールク

リスタルシャインだかいう、白っぽい色がボディーに塗装された物を購入する心算だったらしいが、

「パールだろうとメタリックだろうと、ラメを付けてお洒落を気取ろうと、安っぽい上に平べったく見えて格好が悪いから、白いワゴンなんて絶対に嫌ですわ。他の色にして下さい。」

と、この点だけは僕が頑固に譲らず、擦った揉んだした拳句、結局この色にする事になったのだ。

ただ……バリバリの改造車に乗っている僕が言つのも変な話なのだが…今こうしてこの車を見るにしても、その持ち主が大企業の坊ちゃん、今は実家の伝でその企業の営業部の係長を務めている人物であるとは到底信じられず、車種的にも色的にも、どう見ても3流のチンピラ紛いだとは思えないし、しかも…まだ購入して1年位しか経っていないが、この車がともに動いている姿を一度も見た事が無かったので、要らなかつたんじゃないの？これ……と、ずっと思ってきたのだが、そう考えるのも今日が最後になるかもしれない。

いや、きっとこれから、あの人が言った通り、このミニバンを使う回数が凄く増えるかもしれない。そんな淡い希望を胸に抱きながら持っていた焦げ茶色のハンドバッグの口を開け、中に交付されたばかりの白い母子手帳がきちんと入っている事を確認してから閉じ、愛おしく感じつつ右手を下腹に優しく添わせて数回撫でると、僕はマンションの正面玄関に向かう為に歩き出した。

我が家が入っているマンションは、各戸が入っている集合住宅の建物と割と大きな立体駐車場の建物からなり、その2棟の建物の間や周りの敷地内に遊歩道や小さな公園が整備された、中々大きな建物だった。

4層からなる駐車場からマンションへの正面口まで続く遊歩道を抜けると、目の前に、エレベータータワーを真ん中にして綺麗に左右に分かれた、赤茶けたクリーム色に塗装された鉄筋コンクリート

製の7階建ての建物が見えてくる。

エレベーターホールに直結していて建物の正面のど真ん中にある、この手のマンションにはよくあるタイプの、蒼灰色の花崗岩のタイルが敷かれてガラスが詰め込まれた両開き式の真鍮製の開き戸と銀色の自動ドアに挟まれた区画で、入り口から見て左側で管理人室のカウンターの真向かいにある、褐色の大理石で出来た内壁に取り付けられた、オートロックの共同のインターフォンに付いている鍵穴にバッグから出した鍵を差し込んで開錠し、自動ドアを開けると、さつきと同じ花崗岩のタイルがエレベーターと1階の共用廊下の境界まで一面に敷き詰められた、Gの字を逆様にしたような形をしたエントランスホールに差し掛かる。

このマンションのエントランスホールはかなり広い造りをしており、エレベーターをコの字に囲むように廊下が造られていて、一旦右に曲がってから大きく左へ迂回して1階の共用廊下とエレベーターの乗り場に出る様になっている。オートロックの自動ドアがある付近は少し凸と出っ張る様に広めに造られていて、正面の壁が下半分だけ削られて代わりに大きな一枚硝子が収まり、その向こうに、エレベーターと廊下と建物の部屋の壁の隙間に造られた、真上から燦燦と陽が落ちて白い砂利に反射し、幻想的な雰囲気醸し出している猫の額程の広さの枯山水の様な箱庭を見渡す事が出来る所が、硝子の前に細長い2人掛けのベンチが備え付けられ、住人の憩いの場になっていた。

その小さな広場の傍にある、管理人室とインターフォンがある区画とエントランスホールを分ける壁に備え付けられた鈍い銀色の郵便受けの中に手紙等が一切入っていない事を確認すると、僕はエレベーターに乗る為に廊下をまた歩き出した。

グルッと左側に180度転回すると、左側にエレベーターの乗り場、右側に1階の共用廊下への出口が見える。

上半分に網硝子が付けられた、燦とした様な銀色に輝く2枚戸片開

きのエレベーターの扉の前に立つて、『』のボタンを押すと、エレベーターの傍の大理石の壁に取り付けられた、階数を表示する赤いLEDで点すタイプのデジタル表示盤の数字がカウントダウンし、1になると共に上からLED蛍光灯で内部が明るく照らされたエレベーターの箱が下りてきた。

少し霞んで濁った様な色合いをしたクリーム色の内壁に操作部分の所だけ濃いグレー、足元の床にはネイビーブルーの人工芝のカーペットが敷かれた9人乗りの筐体に乗り込むと、僕は自分たち夫婦の部屋がある4階のボタンを押し、『閉』のボタンを押した。

何処のマンションでもそうなのかも知れないが、エントランスホールの部分だけやたら豪華に拵えている癖に、ちょっと上の階に上がると、共用廊下の壁は外壁と同じ色のコンクリートに、エレベーターの外扉も無味乾燥なカーキ色一色になって、途端に安っぽく感じてしまうのは何故なのだろう。エレベーターを降りる度に感じる疑問を今日も感じつつ、僕は廊下を右に回って我が家に向かって足を踏み出した。

エレベーターホールから出て丁度3軒目にあつて『富士之宮』と書かれた表札が掲げられている事以外では同じ階にある他のどの部屋とも違うない造りをしている403号室、ここが今現在自分達の暮らしている住居だった。

奥から手前に引く張るタイプの縦に細長くて鈍い金色に輝くドアノブの両端に取り付けられた二つの鍵穴を上から順に開錠し、ガンメタリックに塗装された鉄製のドアを開けて部屋の中に入ると、ドアを閉めて二重ロックをして金色に輝く折れ曲がった管状のドアチャイムを掛けると、僕は靴を脱いで玄関の上上がり込んだ。

土間だけでなく上り框にも灰色掛かった白い大理石のパネルが敷き詰められた玄関に入ると、目の前に黒に近い焦げ茶色に塗られた板材が敷き詰められているフローリングの、奥にあるリビングまで

真つ直ぐ伸びた仄暗い廊下が目の前に、右側にこの手の分譲マンションにはよくあるタイプの、フローリングと同色に塗られた、背が高く小ぢんまりとした備え付けの靴入れが現れる。

廊下に行くとすぐ左右に、これまたフローリングと同じような色合いをした木製のドアが1枚ずつ現れ、それぞれのドアを開けると、左側の方は廊下と平行になるように縦に長い6畳の広さの洋室に、右側の方は廊下と垂直になるように横に長い8畳の広さの洋室に出て、我が家では一応6畳の方を客間、8畳の方を夫婦の寝室として使っている。

6畳の洋室の隣には洋式トイレとクローゼットと押入れを挟んで6畳間の和室が、8畳の洋室には廊下や其々の部屋のクローゼットを挟んで洗面所と浴室、そして廊下に対して平行に細長い、主人が書斎として使っている8畳の洋室があり、廊下の突き当たりにある、唯一大きな磨りガラスが木枠に詰め込まれたドアを開けると、洗面所と浴室と書斎に接するように作られた、ホームカウンターも備えた最新のシステムキッチンと、和室と書斎に通じる広さ約15畳のリビングがあり、リビングに2つ、書斎に1つある2枚1組の大きな窓ガラスから、同じ階にある全部の部屋を一続きで結び、簡単な隔壁で仕切られたベランダに出る事が出来る。丁度真上から眺めるとほぼ正方形に見える4LDK…これが現在の我が家の全貌である。

もともと義父が愛人を住まわせる為に購入した部屋らしく、結婚祝いだと義実家から頂いて住み始めた当初は、近隣の住民から義父の新しい愛人だと勘違いされて困惑したが、女学院からも程近い同じ武蔵野市内の、『リリミエスタ・吉祥寺』という名前が示す通り、吉祥寺という色んな意味で恵まれた立地にあり、全戸南向きである事から、ここで暮らしている事に何の不満も僕は感じていなかった。

リビングに入って2つある蛍光灯のスイッチを入れ、直ぐ右側にあるキッチンのカウンターの前に、カウンターと垂直になるように

置かれた、白っぽい色をした長方形の形をしたダイニングテーブルにセットとして備え付いた4つの椅子の1つにドサツとバッグを置き、書斎とは反対側の壁に接する用に置いた低くて細長くて黒いテレビラックの上に置いた40Vのシャープのアクオスの電源を入れて、ラックと和室の前に敷いた小さなカーペットの上に置いた黒檀で出来た正方形の卓袱台の様に低いテーブルを挟んで、テレビの真正面に設置した白い革張りの2人掛けのソファーに座って午後のワイドショーでも見ようかと後ろを振り返った時、カウンターの上に置かれた金色の小さな写真立てが僕の目に入ったので、僕はその写真立てを何気なしに手に取って中の写真に目をやった。

写真には、純白のウェディングドレスを着て困った様に苦笑している僕と、顔を赤らめながらも僕と腕を組んで立っている、白いタキシード姿の和樹が写っていた。

「あれから…もう1年以上経つのよね……。」

と、感慨深く思ったあまり僕はそう独り言ちると、静かに写真立てをカウンターの上に戻した。

元々法的に認められた扶養家族になりたっただけで、花嫁さんに憧れなど毛頭も感じていなかったので、籍だけ入れて結婚式は行わない心算だったのだが、

「一応世間では一流の製薬会社として名を馳せている富士之宮家の息子が結婚式を行わないとは何事か！」

と、旦那の方の親戚連中の呑兵衛共が抗議の声を上げて来た上に、「そんな物を挙げられるお金があれば貯蓄にでも回した方がマシです！」

と、突っ撥ねたところ、

「そんな物祝儀で何ほでも回収できる！」

「わたし達だってやったんだから、あなた達がやらなくて済む筈がないでしょう！」

と、義兄夫婦からも圧力を受けて、結局2036年の6月15日の

日曜日に急ごしらえで結婚式と披露宴を挙げる羽目になったのである。

まあ、その時に招待客とした高校時代の友人や先輩達と久々に再会できた事は良かったのだが、新婦側の招待客は友人・親戚合わせで50人も居なかったのに、新郎側の招待客は、気が遠くなる位遠縁の親戚から取引先の会社の幹部やその関係者に至るまで、お呼びする必要があるのかと思うような人々が続々と、300人近くやって来て閉口した事も今となったら良い思い出である。

尤も、祝儀だけでは式に掛かった支出を補填する事が出来なかった上に、その後友人達が次々と式を挙げたものだから、その祝儀を包む為に更に金が出て行くという悪循環で涙目になったので、やっぱりやる必要は無かったのではないかと僕は今でも疑問に思っていたりする。

そんな事を少し懐かしく思い出しながらソファに腰を落ち着かせ、僕はテレビを点けようと卓袱台の上に置いてあるリモコンに手を伸ばし掛けたが、自分が帰ってからまだ手洗いも嗽も済ませていない事に気が付いたので、手を引っ込めてソファから立ち上がると、洗面所へ行く為にリビングから廊下へ向かって歩き出し、嗽手洗いを終えて手をハンドタオルで拭くと、改めてソファに座り、テレビのリモコンを手にとった。

テレビのスピーカーから流れる音声に交じって、窓の外から子供が何人かはしゃぎ回っている叫び声と、それを注意する親らしい女性の声が何度か聴こえて来る。恐らくベランダの直ぐ下の方にある敷地内の公園で何処かの親子が遊んでいるのだろう。その内自分もああしてあそこで子供を遊ばせる時が来るのだろうか。そんな楽しそうな情景に想いを馳せながら、また僕は自分の腹に右手を当ててそつと擦った。

3月の頭に最後の生理が来てからずっと3ヶ月以上生理が来なか

ったので、妊娠を疑って一番近所にあった産科の個人医院で診察を受けたのが今日の午前中の事だった。診察をした坂上という名前の中年の医者からは、

「妊娠を疑っていたのなら、どうしてももっと早く来なかったのです？」

と不思議がられ、苦笑してやり過ごしたが、仕方が無いじゃないかと僕は自分に言い訳をしていた。

だって本当にこの子を出産出来るのか全く自信が無かったのだ。今までだって孕んだ事は何度もあった。自分だけの秘密として胸の中に仕舞ってきたが、少なくとも高2の時に1度、高3の時に2度、大学時代は通算で5度、結婚してからだって1度出来てしまった事がある。だが、その全てが胎芽やまだ胎児になったばかりの時期に急な腹部の激痛と共に性器から体外へと流れてしまったのだ。最初の時こそ、あ！流れちゃった…ラッキー！と、平たく言えば今の旦那とやりまくっていた訳だけれど、10回近くもこう云う事が続くと、もしかすると本当に自分は子供を産む事が出来ない体なのではないのか、と不安になり、今度の妊娠の時も、また流れてしまうのではないのだろうか、と気が気でなくて結局自分で大丈夫だと確信を得られるまで二の足が踏んでいたのだ。

しかし医師から、

「間違いなく妊娠されていますね。お腹の中で赤ちゃんも元気に育っている様ですよ。お目出当御座います。」

と声を掛けられ、妊娠時の注意点と役所へ妊娠届けを提出して母子手帳を貰うように指示されてから、漸く肩の荷が下りた様な何とも言えない安堵が僕の心中に広がった。

そして、早速僕は医者に言われた通りその足で市役所に出向き、妊娠届けを提出して母子手帳を交付して貰い、今帰って来た所なのである。

暫くボーっとテレビを見てみると、今日は朝に掃除と洗濯をやっ

ただけで、まだ夕飯の買い物をしていない事に気付き、僕は慌ててテレビを消してキッチンへ行き、冷蔵庫の中の食材の在庫を確認し、今夜は何を作るのかな、と考えながら買いに行く物を考えた。

そして、ダイニングテーブルに置いた車のキーとハンドバッグを手に持った時、赤ちゃんが出来たと知ったら、あの人どんな顔をするだろう……と、和樹の驚いた顔をふと想像して、僕は少しだけ悦楽に浸った。

キッチンで夕食の準備をしていると、玄関からガチャリと鍵が開く音とバタンツと扉が開閉する音が突然聞こえて来て思わずビクツとすると、

「ただいま——……。」

と、すぐに間延びした声と共に和樹がリビングの中に入って来たので、僕は安心して緊張の糸を緩めると、鍋を掛けたIHクッキングヒーターの火力を止めて、

「お帰りなさい！あなた。今日もお勤め御苦労様でした。」
と言いながら夫の元に駆け寄った。

そして、夫から普段使いの、ノートPCや仕事の書類や書籍が入ってパンパンになった黒いビジネスバッグを受け取り、そのまま夫の背中を追ってリビングから書斎に入ると、本棚の傍に鞆をそっと置いて立て掛けた。

和樹から、彼が脱いだ背広の上着を受け取り、

「実は……あなたには黙っていたけれど、ここ最近ずっと生理が来ていませんでしたの。それで……今日、意を決して産婦人科の門を叩いたのですけれど……丁度3ヶ月ですって！」

と、左腕にスーツを抱えて下腹に右手を添えつつ恥らいながら報告をすると、

「ん？ああ！そうか……。良かったじゃないか。」

と、一瞬確かめるように此方に顔を向けただけで、素っ気無くそれだけ口にとすると、何事も無かったかの様に平然と僕に背を向けてネ

クタイの結び目を解き始めた。

一方僕の方は、夕方になって京都の実家にいる両親や、横浜に住む葵姉ちゃん、そして目黒の本家で暮らしているお姉様等、思いつく限りの親しい人達に電話を掛け捲って懐妊した事を報告し、皆から一様に祝福の言葉を投げ掛けられて有頂天になっていたこともあり、和樹の思いも寄らない冷めた態度は、拍子抜けする以上に地味に僕を凹ませるのには十分すぎる仕打ちの様に感じられた。

いや、別に僕が不倫等をしていて、腹の中の子供が旦那以外の精子から受精した子……だと云うのであれば、そんな態度を取られても致し方が無いとは勿論思う。だがしかし、今僕の腹の中にいる胎児は、確実に目の前にいるこの男との間に出来た子供に相違ないのだ。なのに、どうしてそんなに無関心でいられるのか、僕は不思議に思いつながら和樹の横顔を呆然としながら見つめていた。

僕が急に黙り込んだ所為だろう。訝しみながら僕の方へ振り向くと、和樹は僕に向かってこう声を掛けて来た。

「ん？嬉しくないのか？お前ずつと子供を欲しがっていたじゃないか。」

「え？……ええ。」

と、条件反射の様に慌てて僕が頷くと、また僕から顔を背けて着替えを続行し、普段着に着替え終わると、

「飯は？出来ているのか？」

と言つて、和樹はリビングへ出て行った。そして僕も、

「まだですわ。もう少しで出来上がりますから、テレビでも見ながらお待ちになって下さい。」

と、夫に声を掛けながら料理の続きを行う為に急いでキッチンへと引き返した。

今夜位は和やかに過ぎるのではないかと思われた夕食も、いつもの様に開始早々不穏な空気に包まれた。

「不味い……。」

と、ダイニングテーブルの向こう側、正面に座っている和樹が不機嫌にそう呟いたので、またか…と憮然としながらも、僕は目の前のテーブルの上に並べた副菜の一つである蜆の吸い物が入った塗り物の椀を手に取り、味を確かめる為に一口だけ啜ってみた。

普通に美味しい。自分で作っというてこう言うのも何だが、京風の昆布出汁に鰹の併せがよく効いて蜆の風味が引き立った、我なりに上出来だと思える位の出来栄えの良い汁物だった。だが彼にとっては、この手の薄味はとても相性が悪い物であるらしい。

「薄過ぎるんだよ！もっと濃い味にしてくれて言っているじゃないか！」

と、またいつもの様に僕が作った料理に文句を付け始めた。何処の家庭でもある事だろうが、嫁の作る料理が自分の母親の味付けと違うというどうでもいい事で勝手に不満を募らせているのである。

僕から言わせれば、幾ら京都と東京という生活環境の下地が大きく違うとは言え、義母が拵える様な濃口醤油で黒く色付いた、喉が渇く位濃い味付けの料理を毎日食べたたり、家族に日々の食事として供給する事に恐怖さえ覚えるし、仕事柄接待での外食が多く、塩分を過剰に摂りがちなことから、せめて家で食べる食事位塩分を控えた薄味の物を食べた方が夫の健康に関しても非常に良いと思うし、どう考えても田舎臭い濃い味付けより上方の薄い味付けの方が格と品があると思うのだが、詰まらない事で大喧嘩してもお互い余計に気分が悪くなるだけなので、

「申し訳ありません、あなた。次は気を付けますわ。」

と、素直に僕の方が折れるのが我が家の食卓では常態化していた。

こうして1年以上一緒に暮らしている内に、僕の中では和樹に対して、自分がこの人の事を都合のいいATM程度にしか考えていないように、彼にとっても僕は体の良い家政婦か何か程度の存在なのではないか、という疑念が渦巻き始めていた。いや、家政婦ならまだしも、生きているオナホールか喋る肉便器位にしか考えていない

のではないか、と思われる場面も多々あった。

夜が更け、食事の後片付けや風呂の後始末も終え、明日も早いからと、電気が消えて真っ暗になった寝室へ行って手探りでベッドを探し、僕は夫の隣に添う様に仰向けで横になった時、突然パジャマの上からブラジャーごと胸を驚掴まれ、そのまま和樹に馬乗りになれ、孕んでいる事を知っているにも関わらず激しく体を求められた。驚いて、

「お願い！あなた……やめてえ！お腹が……！お腹の中の赤ちゃんが……！」

と喚き、腹の中の胎児を庇う為に必死で抵抗すると、

「あ……、そう言えばそうだったな。………じゃあ、お休み。」

と言つて、全然反省の色を見せないまま彼は眠ってしまった。

僕は腹の中にいる赤ん坊を守れた事に安堵しつつも、夫の行動が信じられず、啞然としながら彼の寝姿を暫く見つめていた。

翌朝。

朝の5時半、幾ら日が高くなっている夏場でも薄暗いこの時間帯に僕は目を覚まし、まだ寝ている和樹を起こさないように静かにベッドから起き上がった。

主婦の朝は早い。同棲当初は朝に弱い自分がこんな時間に毎日起きられるものなのか、と不安で仕方が無かったが、一度生活習慣のリズムとして組み込んでしまえば、気が付くと何でも無い物になっていた。

洗面所で顔を洗うと、普段はこの時間にシャワーを浴びて風呂を掃除するのだが、昨日は珍しく主人が早く帰って来て日が変わる前に風呂に入れたから今朝はしなくていい。代わりにその場でパジャマを脱いで下着姿になり、洗面所の向かいに置いたドラム式の全自動洗濯機の蓋を開けて脱ぎ捨てたパジャマをドラムの中に放り込ん

だ。

そして寝室に戻ってクローゼットを開けて自分の普段着を一式出してそれを着ると、クローゼットから夫のワイシャツを1着、書斎に行って夫のスーツを上下一式とベルトとネクタイを1つずつ取り出してリビングのソファアームに掛けて夫の着替えを用意すると、僕はテレビを点けて朝のニュースの画面に出てくる時報を確認しながらキッチンに入り、冷蔵庫の中を物色しつつ朝御飯の用意を始めた。

炊き立ての御飯、豚汁、鰯の開きを焼いた奴……と、出来た朝食を皿に盛り付けてダイニングテーブルの上に並べると、カーテンを開ける為に書斎から各部屋を順番に回りつつ、旦那を叩き起こす為に僕は寝室に向かった。

なるべく足音を立てない様に部屋に入って共用廊下に面した窓に掛けられたカーテンを開け、そととベッドに近付いて夫が寝ている側に腰掛けると、顔を右後ろ下の方に向けて和樹の顔を覗き込み、右手を彼の胸の上に置いて優しく摩りながら、

「あなた。もう朝ですわ。起きて下さい。」

と、耳元にそとと語り掛けた。

本当は……いや実際に切羽詰った時にはやるのだけれど、

「あなた！いい加減に起きて下さい！！」

と言って強引且つ乱暴に布団を引っぺがして叩き起こせると良いのだが、それをやるとまた旦那が不機嫌になって朝っぱらから收拾が付かなくなるので、いじらしくて面倒臭いが、始終優しい口調でいる事を努めなければならない。全く毎朝ストレスが溜まる習慣だ。

そして夫が目覚めると、

「お早う御座います、あなた。早く朝御飯を召し上げて下さい。急がないとお勤めに遅刻してしまいますわ。」

と声を掛けてリビングの方に誘導し、ダイニングテーブルの彼の指定席に座らせて、朝食を摂るように促し、一緒に自分も食べ始める。

朝食を食べ終わると、夫が髭剃りや洗面等、朝の用意をしている合間に食べ残しをゴミ袋へ、皿を水が張られた盥の中に放り込み、テレビも消して自分も外に出られる格好になってテーブルの上に置いた車のキーを手に取ると、

「あなた、急いで！本気で電車で遅れますわ！」

と、夫を急ぎ立て、スーツ姿になって鞆を持ち、出勤の用意が整った夫に続いて僕もハンドバッグを持ってスニーカーを履き、玄関のドアを施錠すると車に乗る為に駐車場に向けて走り出した。

1JZエンジンをツインターボ化した後期型の160アリストのドアを開錠して助手席に和樹を突っ込むと、僕もドアを開けて運転席に乗り込み、シートベルトをしてエンジンを点け、ロービームとフォグランプを点灯してシフトレバーをDに入れ、サイドブレーキを解除してステアリングを左に切りながら勢いよく車を発進させた。

100km/hを軽く超える程のスピードを出し、吉祥寺駅の北口のバスターミナルの所で急ブレーキと右へ急ハンドルを切る事で車を右の方へテールスライドさせ、左へ一杯にステアリングを強引に切ってカウンターを当ててドリフトしながら突っ込む様に前のめりになりながら停止し、

「行つてらっしゃい！」

と、和樹を車外へ放り出すと、家路につく為に僕はアクセルを踏み込み、軽く後輪をスピンさせて粉塵を巻き上げながらアリストを急発進させた。

少々乱暴だが、こんな慌ただし夫の見送りをここ毎朝僕はずつと行っている。まあ、元々車を運転する事が好きだし、他の車の間を強引にすり抜け、パワーに任せて馬鹿みたいに飛ばす無謀運転をしたり、後ろの車の進路をひたすら妨害したり、前を走る車を執拗に煽り続ける事である種のストレスの発散に貢献しているし、車を乗り換えるいい機会でもあるので、僕にとってはある意味良い気分転換になっていた。

夕方、夕飯の支度をしようと包丁スタンドから俎板とヴェルダンの三徳包丁をシンクの上に並べた時、突然書斎に置いている固定の家庭用複合電話機がけたたましい電子音を上げて鳴り出した。

夕飯が要らないのならこの時間帯までに電話を掛けて教えて欲しいと、再三再四口酸っぱく言ってきたから、恐らく夫が飲みに行くお知らせで来たのだろう、と予想しながら僕はカウンターの上に置いてある子機を手を取った。

案の定電話を掛けて来たのは和樹だった。

「もしもし、薫？今夜は浅井達と一緒に飲む事になったから。夕飯は要らないからな。」

「はい、わかりました、あなた。楽しんできて下さい。……でも、あまり飲み過ぎて羽目を外さない様に気を付けて下さいね。」

「あ—— わかっている！わかっている！……んじゃ。」

と、調子のいい言葉を残して電話は切れてしまったが、大丈夫かな……と、不安を拭い切れず不吉な予感に苛まれながら僕は子機を充電スタンドに戻した。

深夜2時、中々帰って来ない和樹を待ち草臥れ、上から毛布を掛けてウトウトとソファで転寝をしていると、また家の電話が鳴り始めた。

誰だ……こんな時間に……非常識な奴もいるものだ、と思いつつ

も僕は起き上がり、カウンターまで歩いて子機を手に取り、

「もしもし……。」

と、不機嫌そのままにぶっきらぼうな感じで電話に出ると、

「もしもし?!富士之宮さんの御宅ですか?奥様でしょうか?」

と、物凄く必死な感じで叫ぶように早口で喋る男の大きな声と、何処かの店にいるのか、騒々しい有線の音楽と人々のざわめく微かな音が受話器のスピーカーから聞こえてきた。

「はい、左様ですが……。こんな時間にどのような御用でしょうか?」

と、不審に思いながらも電話の相手に僕は恐る恐る尋ねた。

「あ、失礼しました。初めまして。私、御主人の同僚で浅井と申します。」

「あ、こちらこそ。わたし、富士之宮の家内です。主人がいつもお世話になってますわ。そういえば今夜も皆さんと飲みに行かれていたとか……。」

相手が主人の同僚だと判って少しホツとしながらそう言うと、電話の相手の雰囲気之急に暗くなった。

「その事なんですが……その……言い難いのですが、富士之宮さん酔い潰れちゃったみたいで……その、向かいに来て貰えませんか？………って富士之宮！いいの？こんな時間に奥さん呼び出してさ……流石に不味いでしょう？いくらなんでも。タクシー呼んだ方が良くないか？」

そう言う男性の声と呼応するように、

「良いんだよ！兎に角薫にここの場所教えて迎えに来るように言ってくれ。」

と、酔っ払いモード全開の濁声に変わり果てたダメ亭主の声が電話線の向こうから聞こえて来た。

浅井さんから新橋にある本社営業部の近所にあるという店の名前と住所を聞き出してメモ帳にそれを書き込むと、僕はハンドバッグと家と車のキーを持って外に飛び出した。

下に降りて駐車場まで向かうと、1MZエンジンを3.5Lにボアアップしてスーパーチャージャーを装着したMCX20プロナードの後期型に乗り込んでシートベルトを締め、ロービームとフォグランプを点灯してエンジンを始動させ、発車措置をして車を急発進させた。

高井戸から首都高4号線に乗り、無神経な夫に対する怒りをアクセルペダルに込めて180km/hオーバーで並走する暴走車両を追い越し車線から走行車線へ蹴散らせながら疾駆し、新宿からC1

外回りへと合流して一路新橋へと僕は向かった。

どうにかこうにか、新橋の界隈の歓楽街のとある雑居ビルの半地下にある、そのキャバクラだとか何とかを探し出し、ビルの傍の路肩にハザードランプを明滅させた状態で車を駐車してエンジンと前照灯と霧灯を切ると、僕は車を降りて店の中に入っていった。

ケバケバしいピンクや空色の証明に照らされた品性の欠片も感じない雰囲気嫌悪感を覚えながら店の奥へ入っていくと、同僚らしい数人のスーツ姿の男性と店の娘らしい派手な色合いのミニドレスを着て髪をこれでもかと高く盛った2人のキャバ嬢に囲まれた、ベロンベロンになって見る影も無くした和樹が店のボックス席のソファーに寄り掛かっているのが見えた。

あまりの無様な姿に、

「あなた……………」

と、言葉を失って茫然と立ち竦んでいると、さっき電話を掛けて来た浅井という男だろう。その中でも夫の様子を案じるように人一倍介抱していた男性が僕の方へ振り向き、

「ああ！富士之宮の奥さんですか？」

と、声を掛けて来たので、

「はい……………」

と、返事をする、浅井らしき男性は和樹の方に向き直り、

「おい！起きろ！富士之宮！！お前の嫁さんが迎えに来たぞ！ほら……しっかりしろ！」

と叱咤した。

すると、和樹はトロンと惚けた表情をしながらも目を開き、真っ赤に染まった顔を上げて僕の方を見つめると、

「おお——薫、御苦労、御苦労。」

と言い、その場にいた仲間に、

「じゃあ…………ヒック…………俺は帰るよ。……ック。」

と言って、

「ヨイシヨ！」

と立ち上がり、千鳥足のまま僕の方へ向かって来ようとしたが、何かに躓いたのか、そのまま僕の方に倒れ込んで来た！

何とか咄嗟に彼の肩を手で掴んで持ち堪えると、浅井らしき男性が心配そうに、

「だ…大丈夫ですか……？」

と訊いてきた。

大丈夫なものか！身長155cmで体重45kgしかない小柄な、しかも身重の女が180cm近くあつて体重も80kg近くある大の男を支える訳ないだろ、常識的に考えて！と思いながら、

「助けて！誰か……誰か手伝ってえ！」

と、僕は情けない悲鳴を上げていた。

浅井さんに助けて貰い、二人で両側から和樹の肩を担いで店の前に止めた車の所まで連れて行き、和樹を助手席に乗せて彼の鞆を後部座席に載せ、

「今日は御迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。それと主人を運ぶのを手伝って頂いて有難う御座います。」

と、浅井さんに謝罪と感謝の言葉を述べて車に乗り込むと、エンジンをスタートさせてシートベルトを締め、ロービームとフォグランプを点けてハザードを切り、代わりに右ウインカーを点滅させて発車措置をし、右後方を視認してステアリングを右に切りながら僕は車を発進させた。

ぐるりと回って新橋からC1内回りに入る頃には、また大きな軋を掻いて和樹は眠り始めた。そんなだらしない夫の姿を横目にハンドルを握りながら、ある程度は覚悟を決めて自分が選択した道だとは云え、何処か煮え切らない何かを沸々と感じていた。

そして、この子が無事に産まれて来たら、こういう生活もある程度はいい方向に変わるのだろうか、と淡い期待を持ちつつ、シフト

ノブに添えた左手をノブから離すと、僕はまた腹を撫で始めた。

第二話：流産、性転換の代償

>> 薫

妊娠期間が7ヶ月目に入り、明らかに妊婦だと判る位お腹が大きくなつた頃、僕は5回目の検診を行う為に、近所にある坂上産婦人科を訪れていた。

体重測定や尿検査などをいつも通り順調に終え、最後に先生による問診とお楽しみのドップラー検査を残すのみとなつた。ドップラー検査では、普段超音波検査で見られる赤ん坊の映像以外に、子供の心音まで聞く事が出来ると聞いていたので、心弾ませながら僕は医師のいる診察室の扉を開けた。

お腹の中にいる子供が男の子だと発覚してから、僕の周囲の環境は大きく変わりつつあった。

夫の和樹には、以前何所かで書いたように、元樹という5つばかり年が離れた実兄と、同い年の洋子という伴侶、僕から見たら義兄と義姉に当たる身内があり、二人の間には綺羅羅という名前の、今年確か4歳になる娘が居る事には居るのだが、義理の両親にとつては初孫に当たるその娘を、義父も義母も余り可愛がつていない、という愚痴を義姉から度々聞かされる事があった。

と云うのも、新しく興つた方の家の割には義父も義母も古い考えを持つている人らしく、跡取りは自分の家の男児で無ければいけない、と頑なに考えていて、会社の跡取りである義兄の妻である義姉に、早く男の子を産め、と再三催促し、その為に義実家で義理の両親と同居している義姉には相当大きな精神的な負荷が申し掛かつている様で、お義姉さんからそう云う愚痴を電話で聞かされる度に、大変だなあ、と他人事の様には僕は聞き流していた。

ところが、僕の胎内にいる子供が男の子だと判つた途端、今まで然程接点を取らずに距離を置いていた義実家に夫と共に頻繁に呼び

出され、却って不信感を募らせてしまう位夫婦揃って歓待される事が増え、怖くなる位義両親からお腹の子供と我が身を氣遣われるようになった。

逆に義父や義母は義兄夫婦に興味が失せた様に関わりを持たなくなり、かなりぞんざいに扱う事が多くなっている様だった。

要するに、義両親が望む男の子を僕が身籠った事で、義実家の中の僕ら夫婦と義兄夫婦の立場が180度大逆転してしまったようなのだ。

これは僕にとっては相当大的な誤算だった。いや、勿論義理の両親はとても喜んで良くしてくれるし、和樹の方も、本来の後継者である兄を抑えて出世が出来るチャンスが巡って来た所為か、非常に機嫌が良いのは結構な事なのだが、本来長男夫婦に巡るべき家を背負うという精神的な負担と責任が肩の上に押し掛かってきて、何の為に次男坊と結婚したのか分からないような状況になってきたり、たかがその程度の事で足元を掬われる苦境に立たされつつある義兄一家に陰から恨み辛みを囁かれたりと、却って以前よりも心労が増えたような気がして、このところずっと落ち着けないでいた。

だからという訳では無いが、マタニティー関連の雑誌等を読みながら子供が生まれた後の生活を夢想してみたり、何週間かに一度定期的に通う妊娠検診を受ける度にお腹の中の胎児が順調にすくすくと育っている事を実感したりする事がここ最近の数少ない僕の楽しみになっていた。

勿論、お腹が大きくなるにつれて体も重くなって動き辛くなり、車の運転もやり難くなる等日常生活に多少の不便も感じてはいたが、胎内で小さな命を育てる感覚なんて男の時には絶対に味わえない事であるだけに、たまに赤ん坊が胎盤の中で動くだけでも、とても新鮮な体験で興味深く思えた。

そしてこの時も、今回はどの位大きく育ったのか、と楽しみにし

ながら僕は坂上先生の前にある患者用の白い布が張られたガス圧式の丸い椅子に腰掛けると、

「先生、今日も宜しく願います。」

と言って頭を下げた。

坂上先生はこの産科の院長であり、少しメタボで頭が禿げていて眼鏡を掛けているどこか憎めない風貌と患者の意見をよく聞いてくれる気さくな性格、同業者の父親に言わせればかなりの確かな助言をしてくれる事から、僕はこの先生に信頼を寄せていたし、この時も何の問題も無く臨月・出産に向けての相談をして頂き、受付で会計の序に次回の検診の予約を入れる心算だった。

坂上医師は検診の途中経過を書いた電子カルテを一瞥してから、
「う~~~~ん……………今までのところ、今回の検診も赤ちゃんにもお母さんにも問題があるところは無さそうですね！それでは問診と浮腫検査を始めますね。……それではお腹を見せて下さい。」
と、いつも通りの診断を始めたので、僕も服を捲って大きな腹を先生の方へ見せた。

先生は軽く触診をして、

「よし！オッケー！」

と言うと、今度は聴診器をボテ腹に当て、

「はい。今日も赤ちゃんは元気かな？」

と、腹の中の子に笑顔で語り掛けながら胎児の様子を調べ始めた。
が、すぐに、

「うん？」

と言って突然笑顔が曇り、真剣な表情になり、電子カルテを時々覗き込みつつ深刻そうに僕の腹の彼方此方を触ると、何かを確信したのか急に立ち上がると、

「榊君！榊君！」

と検査室の方に大声を掛けて中にいた若い女性の検査技師を呼び出すと、彼女の耳に何か囁いた。

耳打ちされた検査技師は一瞬驚いたように瞳を大きくして院長の

顔を覗き見たが、すぐに笑顔に戻って僕の方へ振り向くと、

「お待たせしました。それではドップラー検査を行いますので、このまま検査室の方へお越しください。」

と言つて、検査室の方へ行つてしまった。

慌てて立ち上がつて検査を受けに検査室へ向かうと、何故か彼女は子供の心音を聞かせてくれはしなかった。

腑に落ちないまま診察室に戻ると、鬱屈とした感じでカルテに目を通していた坂上医師から、

「急な事で申し訳ないが、少し厄介な問題を抱えているらしい疑いが出てきたかも知れないから、念の為に詳しい検査結果が分るまで入院して下さい。」

と、一方的に命じられ、全く事態が飲み込めない内に着の身着のままで入院させられる羽目になつてしまった。

CTとか、遺伝子検査とか、色んな検査を受けさせられてへとへとになった上に、急な入院で何も用意していなかったから、

「お仕事が終わった後で構いませんから、下着とかの着替えを幾つか持つて来て頂けませんか。あと、申し訳ないのですけれど、家に帰れそうにないから当分は家の事もお願ひします。」

と、頼んだだけなのに、

「お前の所為で、今日飲みに行く約束を取り止めなきゃいけないかったじゃないか！」

と夫にも切れられて、泣き面に蜂というか、個人的に散々な目にあった翌日、病室のベッドに横たわっていた僕の前に、やはり深刻そうな面持ちを崩していない坂上院長が現れ、

「富士之宮さん、検査結果が判りました。」

と伝えた。

先刻からの周りの医師や看護婦の態度や行動から、不穏な気配をビンビンに感じていたので、恐らく僕にとって良い知らせでは無いだろう、と直感して僕は固唾を呑んで院長の次の言葉を待った。

余程言い難い事なのか、院長は目を泳がせながら厳しい表情で口籠っていたが、真剣な眼差しで彼を見据えた僕の様子を見て覚悟を決めたのか、躊躇いながらも口を開いた。

「富士之宮さん……。私達としても大変申し上げ難いのですが……。残念ながらお腹の赤ちゃんは亡くなっています。」

「……………っ?!」

突然の死亡宣告に思考が追い付いていけず、僕は頭の中が真っ白になった。

「原因は今のところ判りませんが、精密検査の結果、あなたの胎児に生存反応が無い事は明白です。」

突き付けられた事実を到底信じる事が出来ず、

「そ…そんな……。う、嘘！嘘ですよ？！……先生！」

と、僕は必死に院長に縋り付いた。だが無情にも、何かを答える代りに、院長は自身が持っていた電子カルテがモニターに映ったタブレット型の電子機器を僕の目の前に差し出し、無言のままカルテを見るように促した。そして、検査結果の数値を示したりCT画像や心電図を見せたりしながら、これらからどうやって赤ん坊が死んでいると結論付けたのか、素人にも良く理解出来る様に懇切丁寧に説明してくれた。

「ですから、赤ちゃんが死んでいると判った以上、このままの状態だと母体にも悪影響が出る可能性があります。」

そして、坂上医師はそこで言葉を切り、大きく息を吸い込むと、

「堕胎しましょう。」

と、非情にも僕にそう宣告した。

為すがまま分娩台の上に寝かされた後左腕に子宮収縮剤を点滴され、激しく躍動する子宮と強引にこじ開けて広げられた子宮口や性器の所為で下腹部に走る例え様がない程酷い激痛に、耐えきれずに無様な位泣き喚いて暴れながら、僕は赤ん坊の遺体をひり出した。

瞼の中いっぱいに溜まった涙で霞んでよく分からなかったが、産

み落とした時、腐臭が漂って来そうな赤紫色に染まったおぞましい肉塊が視界の端にぼんやりと見えた。

分娩室から病室のベッドに戻されて全てが終わった時、僕は喪失感のあまり廃人の様に我を失い、泣く気力すら起こらずに、平たくなってしまった自分の腹の辺りをただぼんやりと見つめていた。

そこへ追い討ちを掛けるとでも云うかのように、ハンドバッグの中の自分の携帯が鳴り出した。

病院で携帯の着メロが鳴り響いている事に抵抗感があったが、幸い個室で僕以外の人間は部屋の中に居なかったし、電子制御に異常が起きて困る様な治療を受けている訳でもないので、少し位なら……と思いながら僕はバッグから携帯を取り出して誰が掛けて来たのかを確かめた。電話の相手は葵姉ちゃんだった。

葵姉ちゃんの事だ……こういう事を素直に言うと、物凄く心配して針小棒大に騒ぎ立てるところがあるから、今は大げさに構われるよりも心の整理が一段落着くまでそつとして欲しかった僕は電話を取ると、

「もしもし、葵姉ちゃん？」

と、努めて明るく振舞いながらマイクに向かって話し始めた。

「もしもし！クーちゃん。ちょっと聞いて、聞いて！」

と、電話の向こうの葵姉ちゃんは、普段は落ち着いた姉御肌の彼女にしては珍しく、余程嬉しい事があったのか、まるで庭先を走り回る仔犬の様なテンションで此方に話し掛けて来た。

「どないしたん？お姉ちゃん。そない浮かれて……何か良い事でもあったん？」

と、久し振りにお国言葉を使いながら僕は従姉に尋ねた。

葵姉ちゃんは、彼女の性格的に有り得無さそうだったので当時知った時はとてつもない衝撃を受けたが、地元の横浜の大学に通っていた時知り合った佐藤 誠という同学年の男性と、大学3年の時に

学生結婚をし、今はこっちの籍に入って祖父の家の会社の社員となり、彼女の実父で、僕から見れば母の実姉の夫、つまり伯父の下で働いている誠さんと共に横浜にあるマンションの一室に暮らしていて、僕が見る限り自分達夫婦よりも精神衛生的に幸せそうな暮らしを送っている風に思えた。

この時も、誠さんが伯父や祖父に認められたのか、それともまたこの夫婦の惚気話を一方的に聞かされるのかと思ったが、葵姉ちゃんは思いも寄らぬ事を口にした。

「わたしもね。赤ちゃんが出来たみたいなのよ。」

「え……………」

なんて返事をすればいいのか判らなかった。いや、勿論ここは常識的に考えてお祝いの言葉を送らなければいけない事は分かっていた。だが頭の中では理解出来ていても、心の中でそうする事を僕は躊躇した。

「どうしたの？」

と、不思議そうな感じで葵姉ちゃんが尋ねて来たので、僕は慌てて「え？…うっん、何でもないわ。良かったね、お姉ちゃん。おめでとう！」

と、精一杯取り繕いながら答えた。

でも、ここまでが限界だった。その次に葵姉ちゃんから発せられた、

「ええ、クーちゃんも。2人で一緒に元気な赤ちゃん、産もうね。」
と云う言葉が耳に入って来た途端、まるで突然決壊したダムのように両の目尻から涙があふれ、堪え切れずに嗚咽を漏らしながら、僕は病衣や掛け布団の上に大きな染みを作りつつ人目も憚らずに泣き出してしまった。

「葵姉ちゃん……………あのね……………赤ちゃんが……………赤ちゃんが……………」

最後まで言い切る事は全然出来なかったが、葵姉ちゃんは賢い人だから、僕の普通じゃない様子から全てを悟ったのか、

「クーちゃん……………」

と、戸惑いながら言いつつも、

「そう……………そうなの……………。ごめんね。知らなかったとはいえ、わたし……………こんな話をしてしまつて……………」

と謝った。

「うん……………いいの……………お姉ちゃんの所為じゃないもの……………でも……………わたし……………どうしたら……………」

「うん……………辛かったでしょう？辛かったよね……………。このお姉ちゃんが受け止めて上げるから、今日は思い切り泣きなさい。たくさん泣いてスッキリすれば、時が解決してくれる事もあるから……………」
「そうやさしく諭されて、

「うわあああああああ……………」
と、大きな声を上げて布団に顔を埋め込みながら、僕は小一時間泣き続けた。

そんな事があつた翌日、未だに塞ぎ込んでいる僕の所へ院長が回診の為に訪れた。

病室に入って開口一番、

「この度は……………ご愁傷様でした……………」

と口にする、この前以上に真剣な顔つきになって院長は僕にこう質問してきた。

「ところで……………富士之宮さん……………。あなた……………以前は男性だった……………という事はありませんでしたか？」

「……………？？！……………」

突然の不意打ち以上に、何故この先生がその事を知っているのかが分からず、僕は身構えて思わず院長を睨み付けた。

「失礼ですけど、どちらでその事を……………」

と、恐る恐る尋ねると、

「やはりそうですか……。」

と、納得したようにそう言うと、僕の様子など気にする風でもなく話を続けた。

「いや、そう云う事ならいいんです。何分プライベートな事ですからね。ただ、私としては原因が判ってスッキリしました。」

「原因……ですか？」

何の事が判らず、訝しく思いながら僕は院長に尋ねた。

「あなたの赤ちゃんの突然死ですよ。あの後胎児の遺体から採取した細胞をDNA検査に掛けた結果からもしやと思ったのですが、やはりそうだったのですね。やっと納得できましたよ。」

「はあ……。あの……。どういう事なのでしょう？」

「性決定遺伝子が両方ともY遺伝子だったんですよ、あの子。」

「は？……はあああああああああ？！」

世間話でもするように、あまりにも普通な感じで院長が言ったので言われた瞬間は理解できなかったが、その内容のとてもなさ加減に気が付いた途端、僕は仰天して大声を上げてしまっていた。

相同染色体以外の性決定遺伝子の並びがXYでもXYYでもなくYY？何それ？と、少しでも生物や遺伝子を齧って来た者なら、有り得ないとすぐに一蹴するような馬鹿げた事を大真面目に聞かされて、僕は少なからず面食らった。

「有り得ませんわ、そんなの……。XYYだとかそう云う事ではないのですか？」

「いえ、Xなんてありませんでした。間違いなくYYです。」

「でも、そんな事が……信じられない……。……。」

「私も驚きましたよ。長い事医者をやって来ましたが、こんなの初めてのことですからね。……ただ、あなたが元々男性だった、と仮定すれば全て説明を付ける事が出来ます。」

「それで、さつきはあのような事を……。……。」

と、この期に及んで僕は漸く事情を理解した。

確かに母親も男だったと仮定すれば、一応の説明をする事も不可能では無いのである。

卵巣から卵管において行われる卵母細胞の減数分裂で、Y遺伝子を性決定として引き継ぐ二次卵母細胞が卵子として生き残れば、父親由来のY遺伝子を性決定遺伝子として受け継ぐ精子が受精する事で性決定遺伝子の並びがYYとなる個体を生み出す事が出来る。

ただ、まかり間違えば血友病や色覚異常等、様々な遺伝病を引き起こす原因となる重要な遺伝子領域をカバーしているX染色体と比べ、Y染色体の殆どは遺伝学的に無意味、または制御部位不明の遺伝子砂漠と呼ばれる領域で占められている。普通に考えればまともに生育する事は不可能に違いないだろう。要するにあの子は死ぬべくして死んだのだ。僕は納得しつつも、言い様も無い悲しい気分に包まれた。

だが、まだ院長の話は終わってはいなかった。

「富士之宮さんは……ひょっとして富士之宮製薬の性転換薬を服用されたのですかね？」

「え、ええ……そうです。」

「だとすれば……、今までもこう云う事があったのでは御座いませんか？」

そう訊かれて、またしても僕は俯いて沈黙した。事実その通りだったからだ。

僕の沈黙を肯定したと捉えたのだろう。

「はあ……っ。」

と深い溜息を吐くと、

「富士之宮さん。あなたの様に、この手の薬を服用して性転換した人にはよくあるんですよ。こう云う事は……。」

と、院長は語り始めた。

「最初の症例は、性転換薬が定期服用型から完全体へと移行して1年経った頃かな……。だから3年程前になりますかね。産婦人科学

会の発表会で、確か東大の木村先生の所の研究チームだったかな、性転換薬を服用して女体化した元男性の妊娠と流産の症例における演繹的な考察に基づく分析研究の経過報告と題した研究発表をやりましてね。」

「……………」

「そこから早3年、このたった3年の間に全国津々浦々の大学や研究機関、医師達から続々と100件以上、あなたの様な元男性の妊婦さんの症例が報告されているんです。」

「……………」

「大体はあなたの様に、安定期における原因不明の胎児の突然死及び流産。異常な高確率でのダウン症等の重篤な先天性の遺伝子疾患の発現。無脳症、単眼症、二分脊椎症その他重篤な先天奇形の高確率の発生……………まあ、まともに生まれる事が出来た子供なんて殆ど皆無でしょう。」

「……………」

「ついこの間まで、何故性転換した妊婦においてのみ、ここまで異常な妊娠が続発するのか判らなかつたのですが、研究発表を重ねたり議論をしたりする内に最近だんだん事の全貌が見えてきましたね。」

そこで一旦話を止めて坂上医師は僕に背を向け、病室に1つ付いている窓の外に見える景色に目を向けると、また話を再開した。

「結局、いくら男性器を女性器に変えて、子宮や卵巣を付けて見て呉れだけ取り繕ったところで、根本的に男の体は妊娠して子供を産み出すのに向いていないんですよ。」

「……………」

「基本的に女性が妊娠すると、本来自分にとっては異物である子供を保護する為に、本能的に免疫力が落ちる現象が起きます。まあ、酷くなると悪阻だとか妊娠中毒を引き起こす原因にもなる訳ですが、兎に角そうなるように体が第二次性徴期の間に出来上がってしまった訳です。」

「……………」

「ところがどっこい。一方男の方にはそんな繊細な仕組み等持っていない上に、性転換薬はY遺伝子の性決定領域に作用して女体化を促す、つまり男としてのスペックをそのままに性別だけ女性に変化する訳だから、当然そういう仕組み等持ち合わせてはいない。」

「……………」

「だから、受精して着床し、胎児になったとしても、母親の体の方の免疫機構が子供の体を自己とは異なる異物：抗原だと認識して攻撃してしまう訳ですね。ここで抗原抗体反応やキラーT細胞やナチュラルキラー細胞の攻撃に晒された結果、子供が命を落として流産する事になったり、悪影響を蒙る事で正常な発生や発育を阻害されて産まれた子供に重大な先天性奇形が発見される事になったりもする訳です。」

「……………」

「加えて、性転換された方の場合、XとYの両方の性染色体を所持している為に、本来X染色体しか持っていない筈の卵子の中にY染色体を性決定因子としている不安定な物が現れ、それがそのまま受精して着床する事が50%という高確率で起こる事も、問題に輪を掛けて酷くしているようですね。恐らく性決定遺伝子以外の相同遺伝子が制御するDNA領域に関する遺伝病の発現も多いのもこの辺りに起因するのでしょう。」

と、一気に捲し立てると院長は僕の方へ振り返った。

「はつきり言つて、一産科医の立場としてあまりこう云う事は言いたくはありませんが、富士之宮さんの場合、セックスによる自然受精及び自然分娩による出産は不可能、とまでは言いませんが、今後也非常に厳しいと思われます。」

黙したまま院長の話を聞いていると、突然ぬつと院長が僕の方へ顔を近付けて来た。

ビビって僕が後退ると、にこやかに笑いながら院長は僕にこんな

提案をした。

「そこで、どうでしょう？もしもどうしてもお子さんが欲しいのでしたら、どこか大きな総合病院等で不妊治療を行ってみては如何ですか？宜しければ当院でも御相談に乘りますし、なんなら紹介状もお書き致しますよ。」

「ふ……不妊治療……ですか？」

思わずそう訊き返すと、院長は僕の左側に回り込んでベッドの枕元の近くに座り、タブレット端末の画面をカルテから白いメモ帳に切り替え、タッチペンで色々書き取りながら意気揚揚と説明し始めた。

「まずは、そうですね……。てっとり早く富士之宮さんの卵巣から未授精の卵子を取り出して核を摘出し、富士之宮さんの体細胞から取り出した核を代わりに移植して、時期を見て子宮に戻し、着床させるというのはどうでしょう？」

「それって……わたしのクローンを作るっていう事でしょうか？」

「ま、一言で言えばそう云う事です。核もあなたの物、細胞質や細胞膜の組成もあなたの物、ほぼ完全にあなたの細胞と同一の細胞を持つ子供が出来る訳ですから、免疫機構による攻撃や拒否反応は、理論上一切起こらない筈です。手間もそれ程掛からない分、費用の方も安く済ます事が出来ると思いますよ。」

「え……ええ……。」

正直遠慮したいな、と思った。

そりゃ、自分の子供は欲しいと思ったが、自分の分身が欲しいと思った事は一度も無いし、背格好どころか遺伝子や細胞質レベルでさえ自分と同一な個体なんて、想像しただけで気味が悪いではないか。それに自分自身のクローンであるという事は、必然的にそう遠くない将来、自分と同じ悩みを必然的に抱える危険性があるという事に他ならない。幾ら手っ取り早くてもそう云う方法を取りたくは無かった。

表情から僕が不満に思っている事を察したのだろうか、院長はメモ書きを消すと、新しくまた何かを書き始めた。

「ん……………それじゃあ、代理母出産はどうでしょう？誰かに卵子を提供してもらって、旦那さんから採取した精子と受精させ、それを第三者の代理母の子宮に着床させて出産させる。この方法だと卵子提供と受精は兎も角、代理母は国外で募集する事になりますから、その委託費用と卵子や受精卵の冷凍保存や輸送費用、その他諸々の経費によってお値段が跳ね上がりますが、確実に……………」

「お断りしますわ！」

と、僕は怒りに任せて院長に向かってそう叫んでいた。

冗談じゃない。卵子も僕以外の物、実際に産むのも何処の馬の骨とも分らない女、精子だけ旦那の物だなんて、まるで旦那の隠し子を自分の子として育てる事と変わらないじゃないか。僕の卵子にY遺伝子が入っている可能性が5割もあるから使い様が無いとはいえ、どうしても高い金まで払ってそんな罰ゲームの様な事をしなければならぬのか意味が解らなかった。

やれやれ、と頭を掻きながらまた書いた物を消し去ると、

「ですよね……………」

と呟きながらまた新しい説明を坂上医師は始めた。

「じゃあ、最後に自然分娩になるべく近い方法を説明しましょう。」

「あるのですか？そう云う物が……………」

あるのなら最初からそれを説明して欲しかった。どういう方法なのだろう、と期待を胸に抱きながら僕は院長の次の言葉を待った。

「ええ、まずは旦那さんとのセックスに精一杯励んで下さい。」

「……………は？」

と、拍子ぬけて目を丸くしながら僕は坂上医師の顔を覗き見た。だが、先生は相変わらず真剣な顔つきのまま説明を続けていた。

「そして、生理が来ない、これは受精したな、と疑うような事がある

「つたらずに病院へ妊娠しているかどうか確認する為に受診しに来て下さい。そこから治療開始です。」

「……………」

「妊娠を確認したら、こちらで薬を処方して人為的にお母さんの免疫機構を低下させ、免疫不全の状況下に強制的に置きます。」

「……………」

「後は此方の指示に確実に従って生活・通院して貰い、必要なら入院して頂きます。多少費用は掛かるものの、切掛けは自然受精、最終的には帝王切開などの施術を行うにしろ、本来の妊娠に限りなく近い形で進むために費用も掛りませんし、根本的な原因を緩和する為に問題なく出産まで無事に辿り着ける確率が、何もしない時と比べて圧倒的に跳ね上がると思います。」

「……………」

「ただし、勿論これにも重大な問題、というか欠点がありますよ。必要な処置とはいえ無理矢理免疫不全を引き起こす……つまりHIVに罹患したのと同じ様な状況下に体を置く訳ですから、もし万が一、母体が日和見感染を引き起こし、それが重篤化して合併症も引き起こしてお母さんが危篤状態にでもなった場合、最悪母子共に命を落とす可能性だってグツと高くなります。」

僕は悩んだ、最後の方法は一見魅力的に思えたが、出産するまでの10ヶ月間そう云う危険に怯えながら精神的にも体力的にも耐えられるのか、はつきり言って自信が無く、僕は心の中で自問自答し、「すみません。少し考えさせて下さい。」
と言って、結局問題を先送りにした。

どちらにしろ、僕が子供を産むのは難しいという現実だけはこれでもかと突き付けられたのだ。それだけがはつきりと自覚出来ただけでも大きな収穫じゃないか。

「まあ、治療を行わなくても、ひょっとしたら奇跡的な確率で元気な赤ちゃんを出産する……という可能性が無い訳では無いのですか

ら。……頑張りましょう。」

と言う、坂上医師の慰めとも励ましともつかぬ言葉を聞きながら、僕はそんな事を考え、一人で感傷に浸っていた。

第三話：嫉妬と羨望、義実家の仕打ち

>>薫

夫を送って家に戻って来てから独りで遅めの朝食を摂りながらテレビのワイドショーをぼんやりと眺める。そして冷たくなってしまうたご飯とみそ汁だけの簡単な食事を済ますと、シンクの中に置いた水を張った金盥の中に、先に下げた夫の食器と共に茶碗と漆器を放り込んだ。そして一度水の中に浸けてから食器を全部取り出し、盥の中の水を綺麗な水に入れ替えて盥の中に水道の水を注ぎ続けながら、スポンジを手にとって食器洗剤を付けて泡立てると、汚れが拭われて泡塗れになった食器を順番に盥の中に投入してある程度の泡を落とす。金盥から出た後、流水で残りの洗剤も洗い落されてピカピカになった食器類をキッチンに備え付けられている食器洗い乾燥機の中に順次投入し、乾燥のみに設定して蓋を閉めると僕はスイッチを押して食洗機を作動させた。

そして食器を洗って移す時に床のフローリングの上に滴り落ちてしまった水滴を傍にあった白いタオルで拭き取ると、そのタオルを持って洗面所に行き、ドラム式洗濯機の蓋を開けてドラムの中に放り込んだ。

それから洗濯機の反対側にある洗面台の下に付いている扉を開けて洗面台の下に置いた脱衣入れを引っ張り出し、中に放り込まれている前日に自分達が着ていた衣服やバスタオルや自分のパジャマを纏めて洗濯機の中に入れ、一度洗面所を出てリビングへ引き返して床の上に放置されている和樹のパジャマを回収して洗濯機の中に投入し、蓋を閉めてスイッチを入れ、乾燥以外にセットして液体洗剤を適量投入すると、僕はそのまま洗濯機を稼働させた。

寝室に置かれたベッドのベッドメイキングをした後、掃除をする為に家中の窓を順に開けていく。

廊下に唯一面している寝室と洗面所の扉の間にあるクローゼットを開き、中からモフモフしたハンディタイプの物とモップの様な形をした普通のクイックルワイパーとサイクロン式のパナソニック製の掃除機を取り出し、掃除機のコードを目一杯伸ばして玄関の靴箱の傍にあるコンセントに差し込むと、ハンディクイックルを片手にスイッチを入れて掃除機を動かしながら家中の部屋を巡回して掃除をし、その後クイックルワイパーのドライシートでフローリングの上に微かに残っている埃を掻き出すと、僕は汚れたシートを台所に置いた45Lのゴミ袋の中に捨てて掃除用具をクローゼットの中に片付けると窓を閉めて回った。

そうして家事が一段落着くと、僕はリビングのテレビの前にあるテーブルの、テレビと真正面に向かい合う場所に大きめのクッションを置くと、その上に尻を沈み込ませる様に三角座りをして足を伸ばし、再びボンヤリとテレビの画面を見始めた。

子供を墮胎してからもう半年以上も経っていたが、惰性と慣性で家事だけは淡々とこなしながらも、僕の心は未だに重く沈んでいた。無論自分の体質の所為で胎児をみすみす死なせてしまったという点に関してもショックだったが、それ以上に他の母親の子供は普通に産まれて育っているという現実に関して僕自身が抱いていた妬みや羨望といった主観的な、あるいは周囲の人々の落胆といった環境的な要因も僕の心の中に大きく影響している様に思われて仕方なかった。

特に義理の両親の落胆ぶりは凄まじく、流産した事を伝えた途端、「この役立たず！何故殺すような事をしたの？」とか、

「和樹の女房だとはいえ、お前は富士之宮の嫁である、という自覚があるのか？」

等と散々罵られ、後継ぎを期待していた分この人達もがっかりしているのだと解っていても、只でさえ傷ついた心を更に深く抉られた

様な気分を感じながら、僕は黙って俯いて耐える事しか出来なかった。

無論、あくまでもこういう反応は例外的な物であって、大概は同情や励まし等、此方を気遣う様な優しい言葉を掛けてくれる人が殆どであったが、心にポツカリと開いた穴が塞がるどころか却ってその心配りが負担になり、まるで目に見えない錘と鎖で雁字搦めにされている様な錯覚に陥って、誠に身勝手に申し訳ないと思いつつも内心では放って於いて欲しいと願いながら、僕はずっと自分の心の殻の中に閉じ籠っていた。

中でも葵姉ちゃんは、そんな気兼ねなどする必要は一切ないのに、僕と入れ違う感じで新しい命を宿してしまった所為か、特に僕に対して心配したり遠慮する様な事を口走っていたりしていたので、僕は彼女の前では一層元氣良く振る舞う様にし、特にここ最近では葵姉ちゃんが臨月を迎えた事もあり、3月末に引退して横浜から祖父の処へ引越していった伯母夫婦に代わって、日中に時々横浜の彼女の家を訪れては、拙いながらも出来る範囲で彼女の世話を焼くようにしていた。ただ、それでも赤ん坊を孕んで大きく膨らんだ彼女のお腹を目にするのは非常に心苦しく、見据える度に涙が溢れて心が崩壊してしまいそうだったので、今日もそうする心算だったが、なるべく午後の遅い時間に出かけて専ら夕暮れ時が夕方過ぎの早い時間に暇を請うのが日課となっていた。

芸能人の結婚スクープや離婚騒動等、恐らく自分も含めた視聴者の大部分にとっては知った処でどうでもいい情報を仰々しく報じる芸能リポーターの話を馬耳東風で聞き流していると、突然五月蠅くかなり声を上げていた洗濯機のモーター音がガタンと止まり、ピ——と間延びした様な情けない感じの甲高い警告音が洗面所の方から響いて来たので、洗濯物を干す為に僕は立ち上がると洗面所の方へ足を向けた。

タオル類だけ洗濯乾燥機へ入れ直して乾燥させ、残りの衣類を格

子状に小さな穴が沢山開いている白くて四角いプラスチック製の洗濯籠の中に纏めて詰め込むと、僕はそれとハンガーを纏めて仕舞った紙袋を持ってリビングへ引き返し、これらの洗濯物を天日干しにするために東側にある方の窓と網戸を開いて足元に籠と紙袋を置いた。

一度キッチンへと引き返して水で濡らしたキッチンペーパーを何枚が取って来ると、僕はベランダの框の処に置きっぱなしにしているサンダルに足を掛け、ベランダの規定された位置に取り付けた銀色の物干し竿に積もった埃を濡れた紙で拭って綺麗にし、その後ハンガーに衣服を掛けて物干し竿に順番に吊るしてから、汚れたキッチンペーパーを台所のゴミ袋に捨て、紙袋と洗濯籠を持って洗面所の方へ引き上げる序によく手を洗った。

お昼になったのでキッチンに入って薬缶に水を入れ、電磁コンロに掛けて湯を沸かし、戸棚の中から大量に買い込んでおいたカップヌードルの内の一つを取り出すと、中に湯を注ぎ込んで3分待った後、僕は割り箸とカップ麺を持ってリビングに舞い戻り三度テレビの前を陣取った。

別段料理をする事が嫌いな訳ではない。いや、寧ろ作っているとある程度は気が紛れる上に腹も膨れるから好きと言っても過言ではないと思うが、ここ最近気が滅入っている所為か作るのも片付けるのも面倒臭くなってきた為に、夫がいる朝晩の食事は兎も角、独りきりでいる事が大半である平日の昼食はこういう出来合いの物で簡単に済ます事が多くなっていた。

結婚当初の頃と比べれば、すっかりだらしくなって墮落した専業主婦ニートに成り下がってしまったている訳だから、心の中ではこのままではいけない！と自分に発破を掛けつつも、同じ様に心の何処かで、気が沈んでいるんだもの。仕方がないよね、なんか頑張る事に疲れたな、等と自分に言い訳をして結局だらだと過ごしてしまい、葵姉ちゃんの家へ行く時と買い物へ向かう時、後月末にある

マンションの管理組合の理事会の会合へ出掛ける時以外は殆ど外に出ず、独りで家の中に引き籠っている日々を送っていた。

カップ麺を食べ終わって片付けると、丁度いい時間になったので僕はテレビを消し、テーブルの前から立ち上がって出掛ける準備を始めた。

ノースリーブの白い薄手のワンピースの上から麻で出来た薄い水色の長袖のブラウスを羽織り、黒いパンストを穿いてバッグに財布や家とか車のキーを入れると、戸締りと電気とガスを確かめてカーテンを閉め切ってから玄関で靴を履くと、玄関の扉に鍵を掛けて僕は外に出た。

そして駐車場に停めてあったY33グロリアのアルティマに乗り込むと、エンジンを掛けて発車措置をし、ステアリングを左に切りながらゆっくりと車を発進させた。

丁度マンションの敷地の北側ある大通りに面する駐車場の出入り口から歩道の方へと車の鼻先を出す。目の前には緑地帯にした中央分離帯を備えた比較的車の通行量が多い片道2車線の道路が東西に伸びており、駐車場の入り口付近の部分だけ右折が出来るように分離帯が途切れ、向こう側の車線や歩道まで見通せるようになっていく。

高速に乗る為にはこの道を右折して東の方へ向かった方が僕にとっては都合が良かったので、僕は一時停止をするとフォグランプと前照灯を全て切って右ウインカーを点滅させ、左右の人の流れと右から来る車列が途切れるのを待ってから中央分離帯まで車を一気に前進させ、今度は左から来る車がなくなつたのを確かめてから思い切りステアリングを右に切って大通りを走る車の列に合流した。

ただでさえ真夏で糞暑いのに、車の排ガスが熱を閉じ込めた所為でムンムンに空気が蒸し暑くなつた渋滞の長い車列を掻き分けて、

4号線からC1を經由して1号線を南下して横浜のとある住宅地に接する、葵姉ちゃん夫婦が暮らすマンションの来客駐車場に車を止め、正面の出入り口へ回り込むと、僕はオートロックのインターフォンの機械に葵姉ちゃんの部屋の番号を打ち込んだ。

少し長い呼び出しの警告音が鳴り終わると、向こうも僕が来た事に気が付いたのだろう、僕がまだ何も言っていないのにも関わらず、「あ、クーちゃん、いらっしやい！」

と言う葵姉ちゃんの声がスピーカーから聞こえたのとほぼ同時に、マンションの関係者以外の侵入を頑なに阻んでいた自動ドアが呆気なく開き、僕はそのままマンションの奥へと入って行き、3階にある彼女達の住居へ向かった。

10階建てと大きい建物で、3LDKで間取りや印象も大分違うものの、ウチとほぼ同じような造りをした306号室のドア横に付いているインターフォンのボタンを押すと、間髪を入れずに玄関の扉が開き、扉の隙間から葵姉ちゃんの顔が現れた。

「お姉ちゃんごめんね。今日も遅くなっちゃって……。」

と、挨拶代りに詫びを入れると、向こうもこちらの勝手が知っているからか、

「いいの、いいの。上がって、上がって！」

と、軽快な調子で言う彼女が僕を家の中へと招き入れた。

海が見渡せるように、という立地上の制約の所為か、南向きというよりはかなり西を向いたリビングルームへ僕を通し、ウチの物と違って真っ白で、造花を飾る等して小奇麗に纏められた、小洒落たダイニングテーブルの一角に座らせると、葵姉ちゃんはキッチンに入ってガスコンロに火を入れ、薬缶で湯を沸かして紅茶を入れる準備をし始めた。

遠目でもはつきりと判る位、臨月を迎えて大きくパンパンに膨らんだ腹を抱えてしんどそうだったので、手伝おうと思って僕は反射

的に立ち上がったが、

「いいの！いいの！クーちゃんは座って待っていて！」

と、右手を左右にパタパタと大げさに振りながら断ると、そのまま彼女は一人で紅茶を入れ、丸い盆に紅茶が入ったカップとソーサーを2組み載せると、テーブルの上まで運んで来た。

もうすぐ出産を迎えるから、誰もいない日中は何かと大変だろう……、と思って手伝いに来たのに、いつも普通の来客のように扱われて気を遣われるので、今日も僕は少し肩身が狭い思いをしながら、なるべく縮こまって差し出された紅茶を啜っていた。

だけれども、僕だってただやって来ただけの役立たずでは終わらない。大抵の家事をこなす事が出来る葵姉ちゃんでも、さすがにこんな大きなお腹で重い荷物を持つて長距離を移動するのは体力的にも精神的にも厳しいという事なので、買い物だけは彼女の代わりに僕が行ってくる事に決めていた。

葵姉ちゃんからその日の買い物リストが書かれたメモを受け取る。

「じゃあ、お姉ちゃん行つて来るね。ゆつくりと休んどいて。」

「いつもごめんね。お金までクーちゃんに払わせちゃって……。」

「いいの、いいの。気にしなくて。大した出費やあらへんし。それに買える物はわたしの方の買い物と一緒に済ませてしもうてるから、お姉ちゃんが気に病む必要なんてあらへんよ。」

それでも葵姉ちゃんは何か言いかけていたが、僕は気にしないでと押し通し、玄関から外に出て下に停めた車に乗り込み、葵姉ちゃんが普段利用しているという、最近僕も半ば常連となった、葵姉ちゃん宅からほど近い所にあるイオンモールへと車を走らせた。

態とアイスや冷凍食品の様な低温化で保存しなければならない物を1つか2つ買って、これでもかという位大量のドライアイスや戦利品として頂戴し、スーパーのレジで貰った2枚の白くて大きなレ

ジ袋の1枚に自分の家で使う分として購入した食品と一緒に詰める
と、僕はまた葵姉ちゃんの家に取り返し、葵姉ちゃんに頼まれた分
の食材を彼女と共に彼女の家の冷蔵庫の中に仕舞う為に、二人でキ
ッチンの中へと入った。

ガサゴソと冷蔵庫の中の物を色々弄くりながら適材適所に食品を
無事保存し終え、冷蔵庫のドアをバタンツと閉めた途端、
「うっ！」

と妙に曇った唸り声を上げたかと思うと、突然両手で腹を押さえて
葵姉ちゃんが蹲った。

余りの事に、僕は豆鉄砲を食らった鳩の様に呆然と、悲鳴を上げ
ながらのた打ち回り始めた従姉を見下ろしてしまっていたが、直ぐ
に緊急事態だと思い当たって我に帰ると、

「お姉ちゃん！大丈夫？しっかりして！」
と叫び、腰を屈めて青息吐息している葵姉ちゃんを抱き支えた。

「く……クーちゃん……。あ……。赤ちゃんが……。」
「わかったから喋らないで！今119番するから！……ほら、ヒー
ヒー……！」

取り敢えずどうにか葵姉ちゃんをリビングまで移動させて仰向け
で横に臥させると、

「お姉ちゃん、電話借りるわね。」

と一声掛けてからリビングの一角に置かれていた白い複合機能付き
電話機の受話器を手にとって『119』と番号を押し、切羽詰まっ
ている所為でたった数回のコールも焦らされている様に感じながら
それを耳に当てた。

分悦室の『処置中』と白い字で書かれた赤いランプが消え、葵姉
ちゃんの筆舌に尽くしがたい位壮絶で強烈な阿鼻叫喚が収まって、
代わりに固く閉め切った扉の向こう側から元気な赤ん坊の産声が聞
こえ、緊迫して張りつめていた空気がドツと弛みきった様な安堵感

の様な雰囲気部屋の中から外へ漏れ出して行くのを感じた途端、僕は糸が切れた操り人形の様に、部屋の外の廊下に置かれた革張りのソファー様な黒くて四角いベンチの上に座り込んだ。

と同時に、僕が病院から公衆電話で呼び出してから慌ててすっ飛んで来て、出産の間僕以上にオロオロと右往左往していた誠さんも同様に僕の左隣の席でへたり込んでいる事にお互いに気が付いた途端、不覚にも僕等は相手の顔を見つめ合いながら嘔き出してしまった。

「フフフ……。」

「アハハ……。」

「ふう……。」「

と、二人とも息を吐いて心を落ち着かせた後、改めて僕は従姉の夫の方へ振り向いた。

「おめでとうございます。お父さん。」

「……?」

僕はただ、二人に無事に子供が出来た事を茶化しながら言った心算だったのだが、いきなり妻の従妹から『お父さん』と呼ばれた事に面食らったのか、ポカンとしながら誠さんは僕の顔を暫くの間見つめていた。

だが、すぐにそれが強ち間違っていない事に気が付いたのか、サツと表情を引き締めると、

「ありがとう。」

と、父親に相応しくしつかりとして頼もしい返事をした。

やがて1人の看護師が誠さんと呼び出す為に部屋の中から出て来ると、出産という重労働を無事成し遂げた妻と産まれたばかりの我が子に会いに行く為に、彼はベンチからそつと立ち上がった。

僕は立ち上がると、そんな彼の背中に向かって、

「お兄さん!」

と声を掛けた。そしてこちらの方を振り向いた彼に向って、

「申し訳ないけれど、わたし……そろそろお暇させて頂きますね。」と詫びた。無論彼の方は驚いて、

「え？もう帰っちゃうの？赤ちゃんの顔を見て行ってくれればいいのに。」

と引き留めてくれたが、

「大分遅くなつてしまつたし、ウチの人が帰ってくる前に片付けておかなければいけない諸々の事がまだ残っていますから急いで戻らないといけませんの。また明日、改めてお見舞いに来ます。」

と言つて、僕は少々強引に断つて帰り支度を始めた。

「そうか、残念だな……。あ、そうだ、今日は色々ありがとう。お陰で助かつたよ。」

「いえ、当然の事をしただけですわ。それではお姉ちゃんに宜しくお伝えください。さようなら……。」

「わかつた。じゃあね！」

そして僕等は別れ、僕は病院の廊下を、自分の車を駐車した駐車場に向かつて静かに歩きだした。

僕だつて勿論、ああいう場合は誠さんの言う通りにした方が好ましいという事は頭の判つてはいる。ただ、一体どんな顔をして葵姉ちゃんの赤ん坊と対面すればいいのか皆目見当も付かなかった。いや、分かつていても今の自分にはそういう表情……心から祝福する純粹で綺麗な笑顔を作る事が酷く難しい様に感じられた。

理由ははつきりしている。葵姉ちゃんと誠さんは僕にとってかなり親しい部類の身内だし、彼らにとって良い事は僕の心情にもある程度波及する分自覚する事が出来る感情は薄まつてはいるものの、要するに彼らの赤ん坊が無事に産声を上げた事を僕自身が素直に喜ぶ事を本能的に拒否しているからだ。

「これが、嫉妬というものかしら……。」

車に乗り込んで運転席に腰を掛け、シートベルトを締めてエンジンを掛けながら、そう僕は独り言を呟いた。

次の日の夕方の17時頃、面会時間も残り少なくなった頃に僕は横浜市内にある大学病院へ葵姉ちゃんとその赤ん坊を見舞う為に訪れた。

愛車の100系クレスタを駐車場の一角に停めた後、僕は病棟の中に入り、葵姉ちゃんと赤ん坊が待っている筈である個室の扉の前に立った。結局一日そこで心の底から表裏無く自分を納得させる事は出来ず、どういう顔をして従姉と赤ん坊に会えばいいのかも煮え切らないまま、そうかと言って知らない顔をする訳にもいかず、結局来てしまった。

まあ、来てしまったものは仕方がない、そう自分に言い聞かせて出来るだけ平静を装う為に深呼吸してから意を決し、僕は病室の開き戸をトントンと軽くノックした。

「はい？」

と、従姉の澄んだ声が扉の向こうから聞こえて来たので、いよいよ来たぞ、と自分の心に鞭打ちながら僕はそっと病室の扉を開け、部屋の中に足を踏み入れた。

「こんにちは、お姉ちゃん。」

「ああ！クーちゃん。」

と、ベッドから顔だけ此方に向けて素っ頓狂な声を上げつつも、妙にぎこちない僕の態度など意に返さないとでも言うかの様に、葵姉ちゃんはいつも通り暖かく迎え入れてくれた。

「具合はどう？もう大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫！心配してくれてありがとう。」

「そう……良かった！……それで、赤ちゃんは？」

そう言えば、姿が見えないな。誠さんから母子共に健康だと今朝の電話で聞いていたし、まだ面会時間の筈だから母親と一緒にいてもおかしくないと思ったのだが、もう新生児室へ帰ってしまったのだろっか……。そう思って赤ん坊の姿が見えない事を残念に思いながらも心の何処かでホッとしながら、僕は葵姉ちゃんから見て左側

のベッドサイドにあった見舞客用の椅子にハンドバッグを膝の上に置きつつ腰を掛けた。

だが、

「ごめんね、さっきおっぱいを上げたらぐっすり眠り込んでしまったのよ。」

と言うと、葵姉ちゃんは僕と彼女の間の空間の一点を見下ろし、その部分に掛けられた桃色の薄手の毛布をそっと捲り上げて、それが何であるか良く見えるように僕に見せた。

そこには真新しい産着を着て毛布に包まれ、母親の胸元に寄り添うように顔を埋めたままスヤスヤと眠る1人の小さな乳児がいた。尤も、小さいといっても昨日産まれたばかりの赤子としてはそれ相応の大きさの様に思われた。

ただ……こんな小さな身体であつたとしても生の脈動がちゃんと根付いてそのエネルギーをいかになく主張する様子を、元々生物学を勉強していた者として素直に感動せざるを得なかったし、赤ん坊ながらしっかりと自分の力で生きようと頑張る姿に胸を打たれたし、何よりも理屈抜きで可愛かったから、つまらぬ嫉妬心等何処へ行つたのやら、

「2700gの女の子だつたのよ。」

等と僕へ話す葵姉ちゃんの言葉も上の空で、僕は愛おしく思いつつ赤ん坊の寝顔を一心不乱に見つめていた。

そんな風にわくわくしながら赤ちゃんの様子を観察していると、不意に葵姉ちゃんが、

「抱いてみる？」

と言うって乳飲み子を抱っこさせてくれたので、僕は彼女の言葉に甘え、恐る恐るとまるで壊れ物を取り扱う様に慎重に葵姉ちゃんの手から子供を受け取り、自分の胸元に優しく抱き上げた。

赤ん坊の寝顔を直にまじまじと見下ろすと、愛しく思うあまり自然に表情が和らいでいくのが自分でも良く分かる。正直に言って、

下らない事に愚図愚図と拘り続けていた先程までの自分を僕は深く恥じた。

しかし…ふと、もしこの娘が自分の子供だったら……、という考えが胸の中に突然湧き出て来るや否や、僕は自分でもどうすればいいのか分からなくて手を拱く位、大きな喪失感にまたもや襲われた。その時、丁度タイミングを見計らったかのように、面会時間の終わりに近付きつつある事を知らせるオルゴールのメロディーが病室のスピーカーから流れて来たので、

「それじゃあ、お姉ちゃん。落ち着いたらまた来るわね。赤ちゃんの名前が決まったら教えてね！じゃ、赤ちゃんもバイバイ！また会おうね。」

と、これ幸いと帰り支度を済ますと慌てて僕は病室から飛び出し、
「ふ~~~~~~~~。」

と、大きく息を吐いて胸を撫で下ろした。

そして、いつか必ず自分の子供を授かってやる！と心に誓ったのだった。その時、本当にふとした拍子に、僕はあの坂上医師の言葉を無意識に反芻していた。

「自然分娩に限りなく近い母体補助型不妊治療……。」
今度…もし次に僕の胎内に新しい命が宿ったらやってみようかしら。そう思いながら車のハンドルを握りつつ、僕は呟いた。

葵姉ちゃんとその娘の茜ちゃんが病院から自宅へ無事に退院してから1週間程経った土曜日の夕方、僕と和樹は急に義理の両親に呼び出され、何が何やらさっぱり分からぬまま、僕の車で世田谷にある夫の実家を訪れた。

運転してきた、VQ30DETエンジンをツインターボ仕様に改造したJY333レパードの後期型をガレージの此方から見て右端、義兄のオデッセイの左隣のスペースに後退で横列駐車すると車から降り、僕は和樹の後に続いて義実家の敷居を跨いだ。

玄関の框の所まで僕等を出迎えに来た舅と姑は、今宵は非常に機嫌が宜しい様で、僕に向かつて悪言卑語や罵詈雑言を吐き捨てていた事等露ほども無かつたかのように、彼らの本性を知っているこつちが嫌悪してしまう位、始終笑顔を浮かべながら穏やかに歓迎した。

何か目出度い事でもあつたのか、どうやら今夜は盛大に宴会などを催す予定らしく、家の中に上がり込んでリビングにバッグを置き、手洗いを済ますや否や、僕は義母の命令指揮下の元、義姉のサポートをする様な感じで、義理実家の馴染みの高級寿司店から届けられた特上鯔の大皿2つと船盛り1つを受け取ってリビングに移動してきた大きな檜造りの和机の上に並べたり、キッチンに立ってその他のご飯や御馳走を作るのを手伝わされたりする羽目になった。

キッチンとリビングの境目辺りに据えた椅子の上に座って偉そうに嫁二人に指図をする姑も含めるかどうかはさて置いて、老若関係なく女達が甲斐甲斐しく働いているにも関わらず、まだ料理も皿も全部揃ってはいないのに、男共3人はもう既に檜机の一角に集まって、義父が持つて来た大吟醸を、燗を掛けないまま猪口に注いで乾杯し、早くも自分達だけで宴会を始めていた。

そんな様子を横目でちら見たところ、

「ったく、仕方がないわよね。男って奴は……。」

と、隣で僕が衣を付けた具材を、強火のガスコンロに掛けられている油が並々と入った鉄鍋の中に投下して天麩羅を揚げていた義姉が、突然吐き捨てるようにそう言った。

「いつも、いつも。人が必死になって食事の支度をしている前で楽しく酒盛りを始めやがって……。たまにはためえも手伝っての！」
「は……ハハ……。」

義姉が愚痴りたくなるのも解らない訳では決してなかったので苦笑しながら相槌を打ったが、何も家事スキルを持ち合わせていない奴に手を貸して貰った所で、効率が上がるどころか寧ろ足を引っ張られてペースが乱され、余計に手間が増えるだけだから却って何も

されない方がいいのではなからうか、と心の中で僕は考えた。

カリカリに上がって黄金色にキラキラと輝く天麩羅を、キッチンペーパーを敷いたトレイの上に移しながら、心の中でさっきからずっと気になっていた事を僕は義姉に尋ねてみた。

「そう言えばお義姉さん。今夜は何のお祝いなのですか？」

僕自身が知る限りでは、今日は義理の実家の何かの記念日という訳でも無かったし、何か格別に良い事があったとも夫から聞いてなかったなので、何でもない日に普段と違って豪く豪勢に御馳走を並べ、食卓を豪華に飾って宴会を催す事が不思議に思えて仕方がなかったのである。

すると洋子さんは、油を落とした天麩羅を有田焼の大皿に移しながら、別にどうって事が無い風にこう答えた。

「ああ、あれね……。本当に何でも無い、下らない事なのよ。今度はわたしに男の子が出来たって判った途端に勝手に大騒ぎして、あしてドンチャン騒ぎしているだけだから。急に呼び付けられて迷惑したでしょう？」

「い……いいえ……。そんな事はありませんけれど……。そう云う事なら、おめでとうございます。」

僕は何とか平静を装っていたが、心に会心の一撃を受けたような大きなショックを受けて動揺していた。

そんな僕の様子を知ってか知らずか、

「ありがとう。」

と受け流すと、義姉はまた作業に戻り、盛り付けが終わった皿を持ってリビングの方へ去っていった。

未だ酒盛りをして盛り上がっている男達の邪魔にならない様に食卓の準備を整えていると、義父と義兄と夫が交わしている会話が自然と僕の耳に入ってきた。

「……まあ、何だ。取り敢えずおめでとう、兄貴。」

「ああ、ありがとう。俺もやつと肩の荷が下りるよ……。」

「何しみつたれた事言っているんだ。お前なんかまだまだだ。後継ぎを拵えた位で大きな顔をするな。」

「まあ、わかっていますけどね……。父さん。」

「しかし、そう云う親父も何か機嫌がいいな。」

「ふん……。」

「まあ、気持はわかるけどな。俺もそうだし。……ところで、和樹。お前の所はどうなんだ？あれから何の音沙汰も無いが……もう産まれているんじゃないのか？」

「……………」

「……………ふん。」

「……………」

義兄が故意ではない分性質が悪い一言を発してから急に静かになったので、そつと3人の様子を横目で窺うと、バツが悪そうに俯く和樹と不機嫌そうに手に持っていた猪口を机の上に叩き置いた茂樹、そして和やかだった場の雰囲気が一瞬にして暗転した事に気付いて戸惑いながら他の二人の顔をキョロキョロと交互に見つめる元樹の姿が僕の目の中に飛び込んで来た。

「……………あつ！ああ！そうだったな。忘れていた。すまん、和樹！気を悪くしないでくれ。」

「まあ、良いけどさ。そんな気にしていないし。」

「馬鹿が……下らん事を思い出させやがって。折角の酒が不味くなる。」

「すみません……。でもさ……、そろそろ次の子供を作ろうとか、考えていないのか？」

「う……ん、俺自身はそこまで欲しいとは思わないけどさ。あいつの方はまだ諦めてないんだよな。」

「ふ……ん。まあ、分からんでもないけどな。」

「それにしたって不妊治療はないと思うんだ。」

「不妊治療？」

「ああ。なんだ。何か薬で母体の体調を調節する事で出産の安定性を上げるとか……そういう治療があるらしくて、受けてみたいとか言っているんだよな。……まあ、受けてもいいとは思うが、何分金が掛るからなあ。」

その時、兄弟の話を聞きながら黙って酒を飲んでいた義父が、突然穏やかでない声を上げて会話を遮った。

「……無駄だろう。」

「……………」

2人は会話を中断して黙り込み、呆然としながら父親の方へ顔を向けた。そして少しの間黙然とした後やっと義兄が額に冷や汗を掻きながら口を開けた。

「い……いや、父さん。そう頭ごなしに無駄と言う事は無いでしょう。まあ、俺も難しいんじゃないか、とは思いますが……。」

だが義父は、義兄の言う言葉に耳を貸す事もなく聞き流すと、こう断言した。

「薫さんと和樹の間に子供が出来ないのは、薫さんが鮎女だからじゃないのか？不妊治療？そんなもの……やるだけ無駄だろう。」

一瞬、永遠に時が止まった様な気がして僕は手を止め、そして体中が硬直して動く事が出来なくなってしまった。それでも淡々とした義兄の声が耳の中に入ってくる。

「と……父さん！そう云う事をここで言うのは……………」

どうやら義兄は会話をしながら僕の様子をチラチラと窺っている様だった。それとは対照的に義父は意に介さず、いやひょっとして敢えて無視を決め込んでいるのか、話を続けた。

「だいたい、子供が出来無い原因がウチの性転換薬に問題があるからだって？……巫山戯るな！ウチの薬は完璧だ！言い掛かりをつけるのもいい加減にしろ！」

そう怒鳴ると、また持っていた猪口を机の上に叩き付けてやっと義父は静かになったが、その肩は細かく震えていきり立ち、ピリピリ

と張り詰めた空気を彼方此方に撒き散らしていた。

義父の言葉にショックを受けると共に場の雰囲気になんとも耐えられなくなった僕は、立ち上がるとリビングから外の廊下に向かってその場から逃げ出してしまった。

廊下に出てから2・3m程行った所で立ち止まると、僕は廊下の左側の壁に左手をつくとその場でしゃがみ込んだ。

動悸が止まらない。ふと気が付くと目の前にあるフローリングの床が涙で滲み、一粒の水滴が現れたと思ったら、どんどん集まる事で小さな水溜りが僕の足元に出来ていた。

微かに嗚咽を漏らしながらも声を殺して5分程泣き続けていると何時の間にか何事も無かったかのようにリビングの方から宴会で盛り上がる義実家の面々の賑やかな声が痛ましくなる位僕の耳の中にもまで響いていた。当然の様にその中には義兄や義父と飲み交わす和樹の楽しそうな声も含まれている。そしてその声が本心から楽しんでいる様に感じる分、僕の方はショックを受けて落ち込むと共に、心の片隅で憎しみの様な物が渦巻いていくのを静かに感じていた。

信じられない。幾ら自分の父親とはいえ自分の嫁を思い切り貶されたにも関わらず言い返さない上に、その言葉にショックを受けて泣きながら妻が飛び出して行ったのに、後を追いつけてフオロしないどころか放置して、さも楽しそうに一緒に酒を飲んで楽しんでいるなんて……。許さない……！

そつと廊下のドアの陰からリビングの様子を窺うと、皆が此方に背を向け、話したり酒を飲んだり御馳走を貪ったりする事に夢中になって、此方の様子には誰も気が付いては居ない様だった。

僕は忍び足でそつとリビングの中に侵入すると、入り口のすぐ近くの壁際に置いていたハンドバッグを引っ掴み、回れ右して廊下から玄関へ向かうと、そのまま家の外に飛び出してガレージのシャツ

ターを開け、レパードに乗り込んでそのまま発進させた。

家には帰りたく無かったが実家に向かうのは遠すぎるし、ホテルに泊まれば金が掛るし、そうかと言って女一人でネットカフェに行くのも気が引ける。ただ単に身近な知り合いの家の中で今いる場所から一番近くて真っ先に思いついた、というそれだけの理由で僕はお姉様の家へ向かった。

車を玄関の前に停車してから外に降りてインターフォンのボタンを押すと、突然こんな夜遅くに訪ねて来た所為か少し驚かれた様な感じもしたが、僕は家の中に通された。

家の前に車を駐車して家の中にと上がると、

「久しぶりね、薫。……でもこんな時間に突然どうしたの？」
という声と共に目の前にお姉様が現れた。

僕は心配そうに此方を見つめるお姉様の顔を見た途端、

「お……お……お姉様！」

と、無様に泣き腫らしながら僕はお姉様の胸元に泣きついた。

その場で積りに積もった夫への不満を形振り構わずぶちまけかけたが、

「取り敢えず落ち着きなさい。話は中でゆっくりと聞いて上げるから。ほら、上がりなさい。」

と、お姉様から諭され、何とか落ち着きを取り戻した僕は彼女に促されるまま有栖川邸のダイニングルームへ通された。

丁度夕食時だったのだろう、廊下の方にまで温かい食事から漂う心地良い匂いが鼻につく。

部屋の中に入ると食卓を囲んでいた面々が此方の方に振り返ったので、僕は彼女らと目を合わせた。

部屋の中には小母様と使用人の女性2人以外に何故か杏子様と、おそらく彼女と進さんの1人息子の圭一君だと思われる小さな男の

子がいたので僕は少し驚いた。

「久しぶりね。」

と、杏子様から声を掛けられて慌てて会釈する。そして、

「大きくなったでしょう？この子。もうすぐ3つになるの。」

と言われ、改めてさつきから母親に食卓の上のスープを飲ませて貰う為に彼女の左袖を掴んで催促している、バイパーをデフォルトした様な赤いスポーツカーの絵が大きくプリントされた水色のTシャツを来た、何処となく進さんに雰囲気がよく似た男の子へ視線を向けた。

たしか以前にあったのは僕が結婚式を挙げた前後、この子がまだ産まれたばかりの頃に一度会ったきりなので、なるほど…こうして見るとたった2年という短期間で倍以上に大きく成長しているのが良く分かる。しかも初めて会った時は杏子様の腕の中で爆睡していた癖に、今ではこうしている間も活発に身体を動かして、

「ママ！ごはん！ごはん！」

と、一人前に口を利用して食事を強請っているのだから余計に目を見張るものがあつた。

スープをスプーンで掬って一人息子の口元へ持つていき、宥めすかしながら杏子様は話を続けた。

「ほら、ウチわたしも進さんも外に働いていて、共働きでしょう？だから昼間の間、わたしの仕事が終わるまでここで預かって貰っているのよ。」

そしてそのまま夕飯も御馳走になっている時もある、と云う事のようである。道理でここに杏子様と圭一君の姿がある訳だ。

序でだから僕も一緒に食べて行けばいいと促され、自分の方も言われてみれば腹が空いている事を自覚したので、僕は言葉に甘えてダイニングテーブルの一角、お姉様の隣で杏子様の真向かいの席に腰を下ろした。そして、

「さてと……。奇しくも久々に三姉妹が顔を揃えた訳だけれど……。」

どうやら末っ子の方は穏やかではないみたいね。何があったのかお姉さんに話してごらん。」

と杏子様に問われるまま、僕は先程義理の実家で起こった事を逐一お姉様達に訴えた。

若干日頃の鬱憤を晴らす様な感じで話し終わると、その場にいた他の女性陣は一樣に眉を顰め、それから同情する様な、というより呆れている様な微妙な視線を僕に向かって投げかけて沈黙していた。「酷い話ねえ……。辛かったでしょう……。」

と杏子様が沈黙を破った。

「でもそこまで取り乱すような話でもなかったわね。もっと大人にならなくちゃ駄目よ。」

「……………」

たしかに、考えてみればあんな一言位無視して聞き流す位の度量があつてこそ一人前の大人なのかも知れない。後顧してみると自分の行動が酷く大人気ないものに思えてならず、シユンとした僕は俯いて押し黙るしかなかった。

「立ち向かつて一言でも言い返すなら兎も角、逃げ出したら益々舐められてあなたの立場が悪くなるだけよ。」

「……………」

「でもまあ、和樹君の方も追い掛けて引き留める位の事はするべきだよねえ……。」

「……………」

「それで正直な話、薫ちゃん。あなた今心から幸せだつて言える？」突然そんな事を杏子様から問われ、僕は益々答えに窮した。今の自分を客観的に見た時に、不幸では絶対に無いと断言出来るが、主観的な観点から自分の心に問いかけてみると、どうも幸福だとは即答しかねた。

答えられずに押し黙っている僕の様子を見て溜息を吐くと、今度

はお姉様が口を開いた。

「ねえ、薫。こう云う事を言うのはどうかとも思っけれど……。あなた、和樹さんと別れた方が良くはないかしら。」

そしてお姉様に迎合するように杏子様も、

「そうね、こう云う事が起こる度に大騒ぎをする様な事が今後も起こりそうなら、別れた方がこの娘にとつて最善かも知れないわね……。そうしちゃったら？まだ20代の前半なのだからやり直すチャンスなんて幾らでもあるわ。」

「……………っ！」

さつきとは打って変わり、僕は激しく首を横に振って2人の姉の提案を突っ撥ねた。冗談じゃない。目の前にいる二人には信じられない話なのかもしれないが、僕は学生時代にも殆どアルバイトとかそう云う物はやらなかったし、卒業後すぐ和樹と一緒にやって以来、パートにも行かずにずっと現在まで専業主婦をやっている。要するに24年間も生きてきて一度も履歴書に書けるような就業経験が全く無いのだ。そんな状況で離婚して独りで職を探し求めた処で、そんな奴を誰が好き好んで雇うというのか？だからこそ夫の成す事言う事に逆らう事が出来ず、益々和樹の傲慢さに拍車を掛けて悪循環に陥っているのだろう。そうかと言って金銭的に完全に夫に依存している現況で離縁など出来る訳がない。取り敢えず『離縁する』という選択肢は僕の頭の中には存在しなかった。

僕の様子を見て、お姉様と小母様は手を拱いている様に困った表情をして黙っていたが、杏子様は一瞥しただけで再び新しい提案を僕に持ちかけた。

「今の夫婦生活に不満がある、そうかと言って離婚したい訳じゃない……。困ったわね。でも打破する方法が無い訳じゃないのよ。」

「……………？」

「そんな夫なんか放っておいて実家に帰っちゃいなさい。あなた達には冷却期間というか、一人になってお互いの事を見つめ直す必要

があると思うわ。」

優しく微笑みながらそう語る杏子様の言葉を聞きながら、たしかに和樹から離れて互いに相手の事を冷静に考えた方が良いのかもしれない。

その晩、急遽僕は身一つで数年振りに帰郷する事に決めた。

第四話：一縷の希望ももう二度と夫を家で一人にさせない

>>薫

その日の晩の内に荷物を纏めて置手紙だけを残し、朝一番に出掛けて吉祥寺駅で京都市内までの切符と新幹線の自由席券を手に入れた僕は、後ろめたく感じながらも実家に居座っていた。

恐らく有栖川家の方から電話か何かあつて事の経緯を聞いていたのだろう、父も母も突然子供が押し掛けて来た事に対しては何も訊いて来なかった。しかし、

「いわんこつちやない。」

「だからあんな男止めとけつて言つたんだ。」

等と、まるでこうなる事を予見していたような両親の言葉に心なしか鬱陶しく思つてしまった。

和樹から一言でも詫びの言葉を引き出したら家に戻ろうと思いつつ、奴の方からは何の音沙汰も無く一週間程過ぎたある日の晩、リビングで母と共にテレビを見ながら夕飯を食べていると、大学から帰宅した父がリビングに入るなり、鞆の中から何か雑誌の様な物を取り出し、いきなり僕の膝の上にそれを放り投げた。

何だろうと思つてそれを手に取ると、あるページに黄色の付箋を一枚貼り付けた、世界中から送られた医学系の論文を掲載している『ネイチャー・メデイシン』という学術誌だった。

なんでこんな物を？と不思議に思いながらしげしげと雑誌の表紙を眺めていると、中腰になりながら僕の方へ屈んだ父がポストイットを挟んだ所を指しながら、

「読んでみる。」

と、ポツリと言った。

言われるがままそのページを開いて見てみると、そこには英語で

書かれた長い論文が掲載されていた。

元々英語自体が得意ではない上に、大学で勉強していた専門分野の内容や用語の意味も大部分が頭の中からポツカリと消失していた為、上辺だけをなぞっただけの大体の意味しか読み取れなかったものの、僕はその論文の内容に引き込まれた。

それは、慈恵医大の力サイ アキラという博士が著したものであり、元々男性で性転換薬を使って女体化したアカギ ナオミ（旧名ヤマノ ナオト）、及び他2名の性転換で女性になった元男性の患者における妊娠症例に於いて、母体にも胎児にも負担を掛けずに母親の体調を管理する技術を開発し、三連続で無事出産まで漕ぎ着けた過程とその研究結果の報告、そしてその研究の基礎理論を詳細に記述したものだ。この技術を用いれば性転換した女性となった人でも子宝を授かれる可能性が格段に高まる。そのように論文には書かれていた。

残念な事に、図解やグラフも交えて詳細に記された仕組みの殆どを理解する事は出来なかったが、これは十分期待できる物なのではなからうか！と僕は期待に胸を膨らませた。

「ねえ、お父さん。これ、貰っちゃってもいいかしら？」

と父の方に顔を向けて尋ねると、

「そうでなければ、渡さん！」

と、父が快諾してくれたので、僕はその雑誌を持って嘗ての自室に置いたスーツケースの所へ行くと、大切に仕舞い込んでからリビングに引き返し、食事を再開した。

>
>

薫が良く分からん置手紙を残して唐突に姿を消してから一週間、少し淋しさを感じつつも五月蠅い嫁が居なくなっただのを良い事に、和樹は独身時代の頃を回顧しながら久々の自由を謳歌していた。

普通なら女房が何の音沙汰も無く一週間も家に帰って来なかった

ら、例え実家に帰っていると判っていても心配して向こうへ連絡を取る等するものだと思うのだが、彼は一切そう云う事はしなかった。勿論妻が居ないからと云って家事をする訳でもなく、夜は遅くまで梯子酒をし、食事はコンビニやスーパーで売っている惣菜で済ませる等していい加減に過ごしていた。

その日の晩も仕事を終え、いつもの通り勤務先の近くにある馴染みの飲み屋に行こうとした途端、突然スーツのポケットの中に入っていた私物のスマートフォンが鳴り始めたので、和樹は立ち止まってポケットから電話を取り出すと、タッチパネルを見る事で誰からの電話か確かめた。

ディスプレイには『八重樫 進』と云う名前とメールが来た事を示す手紙のマークが表示されていた。進は和樹の1つ年上で、中学校どころか大学の学部さえも同じだった上に、互いの妻同士が疑似姉妹の関係にある事から、職場は違えども社会人になった今でも交流する機会が割と多い先輩である。たまにこんな感じで物凄く此方の都合が良いタイミングを見計らったかの様にメールを送って飲みに誘う事が何度かあったから、この時も和樹は深く考えずに進の提案に乗り、彼と飲む為に指定された待ち合わせ場所に小走りで行った。

和樹が新橋の勤め先から六本木の界限にある待ち合わせ場所に向かうと、そこにはやはり仕事帰りの進だけではなく、慶応大学経済学部の進の同期で、和樹から見れば1つ上の先輩に当たるが早産まれの為に同い年である、進の紹介で麗子と知り合って有栖川の家に婿入りした征司も一緒に待っていた。

彼ら3人は、大学こそ同じくするものの、職場の場所も自宅の住所もてんでバラバラである為になかなか一緒に集まる事が難しかったが、彼らの嫁が同じ疑似姉妹関係にあって今でも頻繁に連絡を取り合っているのだ、たとえ久々に顔を合わせたとしても3人が3人

とも互いの近況を良く知っており、女房の姉妹関係にかこつけて三国志の『桃園の誓い』の如く義兄弟の盟約を酒の席で冗談交じりに交わす位仲が良く、こうして揃って飲みに行く事が時々あった。

さて、この日の晩も進が先導するまま3人はとあるバーにやって来た。様々な酒が陳列された棚と7席しか椅子が無いカウンターだけの薄暗くて小さな場末の店だったが、進がチョイスしただけあつて雰囲気の良い店だな、と和樹は感じた。

その日の客は彼ら3人のみで、この店のバーテンダーで30半ばと思しきダンディーな雰囲気醸し出している渋面のマスターを含めると4人しか人が居なかった。恐らく進がよく来る店なのだろう。彼ら3人が店の中に入って来た途端、カウンターの奥にある酒棚の方を向いて此方に背を向けていたマスターが彼らの方を振り向き、「おや、いらっしやいませ。八重樫さん……。久しぶりですね。」と、親しげに声を掛けてきた。

バーカウンターの真ん中にある3席の一番奥の席に進が座り、手前の席に征司が腰を掛け、必然的に年長者二人に挟まれて真ん中の席に追いやられた事に戸惑いを覚えつつも、和樹も腰を落ち着けた。「マスター。」

「はい？何でしょうか？」

「さつきから気になっていたんだけど、奥の棚の上から3番目で右の方にある、あの変わった形のビンの奴さ。何あれ？ウイスキー？」

「あ？ああ、これですか？……一応スコッチ………でしょうかね……。アイスランドの酒ですけど……。」

「ああ、そうなんだ。ふ…………ん……。じゃ、それをチエイサーで……。」

と、左隣にいる進が馴れた様子でマスターに注文すると、

「和樹？お前はどうするよ。」

と、自分の方に話を振って来たが特に何も考えてはいなかったので、

「じゃあ、自分もそれで……。」

と、和樹は進に同調した。

ただ、征司は強い酒が苦手な所為か、

「僕の方は水割りでお願いします。」

と注文していた。

慣れた手つきでボトルを扱い、

「どうぞ。」

と言いながらマスターは進と和樹の前にスコッチが入ったチューリップグラスと水が入ったグラスを1つずつ置き、征司の前には水割りされたウイスキーが入った厚底のウイスキーグラスを置くと、酒を棚の上に戻してそのままつまみの用意をし始めた。

そうしてまた店の中が静かになると、酒が入ったグラスを手に取りながら、進は右隣に座っている和樹に話し掛けた。

「そついえばさ、和樹……。薫ちゃん、元気にしているか？」

「え？元気にしていますけど……。」

何故いきなり薫の話題が？と奇妙に思いつつも、和樹は平静を装いながら誤魔化した。が、進の方は杏子達から薫と和樹の家庭内のトラブルの話聞いていて、既に薫が実家に戻ってから1週間以上経過している事も知っていたので、和樹の答えを聞くや否や機嫌が悪くなった。

「嘘言うな。薫ちゃん、お前と喧嘩して1週間も実家に戻ったきりだろ？知っているぞ。」

「いや、別に喧嘩したわけじゃ……。っというか、何故進さんがそんな事を知っているんです？」

「ウチの杏子から事細かく聞かされてな……。ちなみに同じ理由で征司の方も既に知っている。」

「ええ?!」

驚いて和樹が反対側にいる征司の方へ振り返ると、彼はウンウン

と何度も深く頷いてから、

「先週、麗子さんとお義母さんと杏子さん達がいる時に薫ちゃんがやって来たらしくてね……。」
と付け加えた。

大方の事情を知った和樹は、被害者面をしつつも内心ではしてやったりと姉二人に訴えていたであろう薫の顔をありありと想像しながら、こういう所だけどんどん女臭くなりやがって、と苦々しく思いつつ酒を一口含むと、コップの水を飲んで一気に流し込んだ。

そんな和樹を窺めるようにまた進が口を開いた。

「聞いたぞ、和樹。お前、この間実家に帰った時、親父さんから薫ちゃんの事、『マグロ女』呼ばわりされたんだって？」

「え……ええ、まあ……。」

それがどうした？と思いつながら和樹は進の顔を窺った。彼は、何が問題にされているのか、今一つ理解していなかった。

そんな弟分の態度に呆れながら、進と征司は揃って溜息を吐いた。
「お前なあ、いくら手前の親父だからって、自分の嫁の事を名指しで堂々と『マグロ女』って言われたら普通切れるだろ？俺がお前だったら、もしも杏子が親父からそんな事言われたら、その場で殴りかかって大喧嘩になるぞ。なあ？征司……。」

と、進が征司に同意を求めると、

「殴りかかる……まではいなくても、僕も激昂するだろうね……。」

「

と、相槌を打つ様に頷きながら征司も彼に同調した。

「まあ、僕だって父さんに面と向かって文句をいう度胸は無いから、気持ちに分からない訳ではないけどさ……。せめて薫ちゃんをフオローしてあげるべきだったんじゃない？さすがに放置はないと思うんだ……。」

「泣きながら飛び出した、って言っていたそうだからな……。」

年長者二人にそれぞれダメ出しを食らってから初めて自分の非に気が付いた和樹は、バツが悪くて思わず後ろ髪を搔いてしまったが、何故夫婦二人の間で解決するべきどうでもいい問題について赤の他人である筈の彼らから意見されなければならないのか解らず、彼は不服そうに頬を膨らませた。

「わかりましたよ。俺もあいつに対して配慮が足りなかったと思います……。思いますけどね……。態々こんな所に呼び出されて迄言われる事じゃないと思うんですが……。」

と、イライラとしながら文句を言うのと、進と征司はすまなそうに彼の顔を見つつ白々しくこう言い放った。

「いや、まあ……。僕らもあまりきつく言わない方がいいかなあ……とは思っただけだよ……。」

「杏子から『きつく懲らしめて上げなさい。』って念を押されているからさ、言わないわけにはいかんのだよ。」

「……………」

和樹は一瞬言葉を失いかけたが、だが待てよ？と疑問に思いながら和樹は反論した。

「でもそんなの、黙って聞き流していればいいでしょう？態々馬鹿正直に実行しなくても……。先輩らしくない。」

「そんな事出来るなら苦労しないよ。毎晩、毎晩、帰る度に『今日こそ言ってくれた？』って訊かれるこっちの身にもなってみろ！世の中の亭主がみんな、お前みたいに亭主関白出来る訳じゃ無いんだよ！」

「進君はまだいいよ。僕なんて、自分が決めた事だとはいえ、義理の両親やお祖父さんとも一緒に暮らしているんだよ。しかも今回の事に関して言えば、麗子さんだけじゃなくしてお義母さんからも言い含められているからね。和樹君には申し訳ないけど、無視するなんて絶対無理、無理！」

「またまた御冗談を……。」

半ば必死になって家庭内の立場が弱い事を大げさにアピールする

兄貴分二人を鬱陶しく思いながら和樹が茶化すと、何糞とばかりに進が反論した。

「じゃあ、聞くが。和樹、お前、月々の小遣いを幾ら貰っている？」「いきなりこんな事を聞かれて少し戸惑いつつも和樹は答えた。

「俺ですか？……特に決めていないですね……。必要な時は薫に出させますから。」

「俺は月3万だ……。」

「ごめん、僕……5万も貰っている。」

「5万か……。羨ましいな、この野郎！」

今度は、月の小遣いを幾ら貰っているか、という話題で一頻り盛り上がっている兄貴達を見て、和樹は心底驚愕した。

「3万？5万？……たったそれだけ？！」

「いや、相場だと思うが？」

「別段少ないとは思わないなあ。時々人様から、有栖川の次期総帥候補でも小遣いこれだけしか貰ってないんだ、って驚かれる事はあるけどね……。」

「独身の時は兎も角、自分の金を全部自由に使うって訳にもいかなからなあ……。月3万も誰にも文句を言われずに自由に使える金があるだけでも十分だろ。常識的に考えて……。」

「ですよ……。」

「そう言えばさ、和樹。お前普段何食べているんだ？朝食。」

「え、朝食ですか？」

「うん、朝食。」

また違う話題を進から突然振られて和樹は困惑したが、

「最近はコンビニの菓子パンで済ます事が多いですかね……。」

と、最近食べた物をぼんやりと思い出しながら返答した。しかし、進が望んだ回答とは違うものだったのか、

「違う、違う。最近のじゃなくて、薫ちゃんが実家に帰る前にお前が食べていた朝食を教える。」

と言われてしまったので、仕方なく彼はまた記憶の引き出しを開け

て整理し始めた。

「あいつが帰る前ですか？基本あいつが用意したやつを食べていましたけど……。」

「そんな事は判っているよ！要は、薫ちゃんがお前の為にどんな飯を毎朝出していたのか、って云う事が知りたいんだからさ。」

「はあ……。大体毎朝、御飯、味噌汁、焼き魚、納豆……。たまにこれに何か副菜がもう一品付くって感じですかね……。」

「ほう……。まあ、普通に理想的な和食の朝食って感じたな……。」
有栖川に婿入りしてから似た様な、むしろこれよりも豪勢な物を食べられるようになっていたものの、元はごく普通の市井の人だった征司は、このラインナップの朝食を毎朝和樹に出している薫の力量に感心していた。

一方、進の方は和樹の答えを聞いて酷く落ち込んでいた。

「うわー、朝から豪勢な物を食っているな。羨ましい。俺なんか……、昨日なんてコーンフ레이크に牛乳掛けただけで済ませたぞ！」
彼の場合、夫婦共働きの所為である事も少なからず影響しているのだが、そういう事情を含めても、いつも軽く済まざるを得ない自分と違って手の込んだ朝食を毎朝出される羨ましい立場にありながら、そこまで尽くしてくれる男から見れば理想的な嫁を蔑ろにしている事に、少しだけ怒りのような物を覚え始めた。

「それで、朝になつたら駅まで薫ちゃんに車で送って貰っているんだって？」

「別にそれはいいでしょう？だってあいつの車の維持費だけでも結構掛かっているんですから、その位させたって構わないでしょう。それにあいつだって喜んでやっている節があるし……。」

「朝は兎も角、深夜にも飲み屋まで迎えに来させているらしいじゃないか？！さすがにそこまでさせるのはどうかと思うぞ。それに第一、あの子と一緒になつたら車も自動的についてくる事位初めから判っていた事だろ。」

「うっ……。」

そうして黙ったまま煽る様に酒を飲み始めた和樹を抑えるように肩を叩くと、進は彼を諭し始めた。

「なあ、和樹。俺が言つのも何だが……。薫ちゃん位色々尽くしてくれる娘なんてそうそう居ないぞ。もっと大切にしてやれよ。」

「はあ……………」

「取り敢えず帰ってから直ぐにでも薫ちゃんに連絡を取って謝れ。」

「はあ……、でも謝れって言われてもなあ……………。何て言えばいいんです？」

「知るか、そんな事！思い浮かばなければ、元気か？とかでも良いから兎に角連絡だけは取っておけ！いいな？！」

「はあ……、分かりました……………」

不承不承ながらも和樹から言質を取った途端、進は漠然とした達成感に浸って少しだけ上機嫌になった。

「ようし、分かったのならそれでいい。それじゃ、大分遅くなったし今夜は解散するか。マスター！勘定を！」

店を出て他の二人と別れた後、独りになった進は鞆の中から自分のスマートフォンを取り出すと、今夜の顛末を妻に聞かせる為に自宅に向かって電話を掛けた。

「あつもしもし、杏子？俺だけど……………」

>> 薫

突然鳴り始めた携帯の着メロによって、僕は叩き起こされた。

時計で時刻を確かめると丁度深夜の0時半。こんな時間に誰からだろう、と思つて携帯を見ると杏子様からだつたので吃驚する。兎に角、特に最近歳の所為か眠りが浅くなりがちである両親を起こさない為に、僕は急いで電話に出た。

「もしもし、杏子様？薫です。」

「もしもし、薫ちゃん。良かった、まだ起きていたのね！あ、ひよ

つとしてもう寝ていたのを起こしてしまったのかしら？」

「いいえ、大丈夫です。お気遣いなさらないで下さい。ところで、こんな夜更けに如何されたのですか？」

「ええ、さっきウチの進君から電話があつてね。征司さんと2人で和樹君を呼び出してキツク言い含めたんだって。だから、早ければ明日……いえ、もう今日かしら？和樹君から連絡があると思うわ。」

「そうですか……、有難う御座います。すみません、進さん達にまでわたし達の事で御迷惑を掛けてしまつて……。」

「いいのよ、気にしなくても。お姉さん達がやりたくてやった事なんだから。」

電話機に向かうの杏子様の声はとても暖かくて優しい物だったが、その分こんな余分な心配を掛けてしまった事を僕は心から申し訳なかつた。そして、

「こつちに戻つたら、また連絡して頂戴。じゃあ、お休みなさい。」
と言つて杏子様は電話を切つた。

僕は携帯を折りたたんで枕元に置くと、再びベッドの上に横になつて就寝した。

そして朝になつて、今度は和樹からの電話で起こされた。

「もしもし……。」

「……俺だ。」

「あなた……？」

「ああ。……元気か？」

「ええ。あなたは？」

「俺も、だ……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「あのさ……。」

「……はい？」

「……すまなかつた……。」

「……………」

「お前の気持ちに全然気が付いてやれていなかった。」

「わたしこそ、ごめんなさい。勝手に出て行っちゃって……。」

「……………」

「……………」

「家に……戻って来てくれないか？」

「……………」

「ダメか……？」

いつもと違って物凄く弱気な夫の声に少しだけ面食らったが、帰宅する事を軽率に決めていいのか考えあぐねたので、僕は黙って和樹の声に耳を傾けていた。

「頼む……………」

「わかりました……………」

もういいだろう。何故か全てを許してしまえるような気がして、僕はそつと受話器に向かって囁いた。

「今日直ぐ、って云う訳にはいきませんが、明日そちらに帰りますわ。予定が立つたらまた連絡しますから。」

そう和樹に話して電話を切ると、自宅に帰る事を伝える為に、僕は両親の居る所へ向かった。

翌日の夕暮れ時、JR中央本線の快速電車を降りて吉祥寺駅の北口の改札を出ると、何故か夫が自分を迎える為に待っているのを見て、僕は少し驚いた。

改めて、

「心配を掛けてすみませんでした。」

と言って、お互い仲直りしてから僕らは2人で一緒にタクシー乗りに場に停車していたタクシーに乗り込んで帰宅の途に着いた。

心なしかウキウキしながら家の玄関の扉の前に着き、鍵を開錠し

てドアを少し開けた途端、強烈に不快な臭いが鼻を衝いた所為で僕は酷い吐き気を催してその場に蹲った。どうにか吐く事は我慢したが、何なのだ？この臭いは？腐卵臭というか……まるでうつすらと家中に満遍なく硫化水素を撒き散らした様な、もつと具体的に言えば、生ゴミの腐った臭いと油が酸化しまくった後の匂いと黴が混じった埃特有のムワツとした香りが入り交じった様な不快臭が漂っていた。

玄関に荷物を置き、靴を脱いで家の中へ上がって廊下を進むと、最悪なことにリビングに近付く程臭いが強くなっていく事に僕は気が付いてしまった。激しく嫌な予感がしたが、意を決するとリビングのドアを開けて部屋の中に足を踏み入れた。

そして、リビングの惨状を目の当たりの瞬間、僕はその場で泡を吹いて気絶しそうになった……。

さすがにボタンキユーはしなかったものの、部屋の中の様子は頭を抱えるのに十分な位酷い物だった。

まずリビングの東半分に敷いたカーペットの上のテーブルとソファとテレビ周りが一番凄惨な様相を呈していた。テーブルのソファ側には惣菜や唐揚げのプラスチックトレイのパックの残骸やパンか何かの包装のビニール袋、割り箸、レジ袋等がこれでもかと散乱し、その足元のカーペットとフローリングの上には空っぽになったウイスキーやワインの酒瓶数本やビールの空き缶が幾つか散乱していた。どう見ても、テレビ見ながら酒を飲んでつまみを摘まんでいた跡です。本当にありがとうございました。

閉めきつたままだったカーテンと窓を開けて空気を入れ替え、ゴミを処分するためにゴミ袋を取りに行こうと台所へ行くと、ピ——ッという甲高い警告音と共に冷蔵庫の冷蔵室のドアの隙間から黄色い光が漏れている事に気が付いた。どう考えても冷蔵庫の扉が開いています。ただでさえ糞暑いのに冷気がガンガン逃げているか

ら……。東京電力から来月請求されるだろう電気代と、冷蔵庫の中にしまった食料品に訪れたであろう惨劇を想像しただけで、凄い目眩が僕を襲った。

ふらつきながらも半ドアの冷蔵庫の扉をキチンと閉める為に少し開けた時、チラリと見えた冷蔵庫の中身に驚いて、扉を大きく開けて中身をよく確認すると、その光景を目の当たりにして僕は啞然とした。何せ元々入っていた食品類を奥の隅の方へ追いやる形で、買った覚えも無い缶ビールが10本以上も無理やり突っ込んであったのだ。開いた口が塞がらない方がおかしい。どうせ僕が居ない事をいい事に、調子に乗った和樹が買ってきた物だろう。まあ、奥に追いやられたお陰で元々買い置いていた食料品には冷気が当たっていた様だったから、一瞬想像したような惨状は不幸中の幸いにも回避されていたが、だからと言って怪我の功名だと褒められるものでは決してない。

だいたいこの冷蔵庫はいつから開いていたのだ？まさか一週間ずつつとて訳でもあるまい。昨日からっていうのもちよつと考え辛だろう。だって夜中に電灯を消して真っ暗にした時、冷蔵庫の扉を半ドアにしていたら黄色いランプの光が漏れるから、いくら鈍感な奴だったとしても嫌でも気が付くと思うからだ。

と…その時、悪魔のような考えが僕の心の中に浮かんた。

もし……もしこのリビングの蛍光灯が2ヶ所とも、いや台所も含めて3つとも1週間中点けっ放しだったとしたら……、電灯だけじゃない！リビングを心地よい温度に冷やしているエアコン、そこで夕方のニュースを流しているテレビ、他諸共……。どれもこれもが電源を切られる事もなく1週間ずっと稼働しまくっていたとしたら……。いくらエアコンが目標温度に達すると低電力モードになるとはいえ、温度が上昇する日中や熱帯夜も全力で動いていただろう。いくら夜間は電気代が安くなるとはいえ、1週間×24時間以上もフルで使い続けていたら相当の電力を消費している筈だ。

「今月分の電気代、一体幾らになるのかしら？」

そう呟いた途端、何故か僕は声を出して吹き出しそうになってしまった。きつと精神的に壊れかけていたんだと思う。

更に本能的な危険信号を受信しておっかなびつくりと自分達の寝室を覗いてみると、こっちはこっちで相当に悍ましい様相を呈していて、正直発狂するかと思った。

ベッドは当然ベッドメイキングされるなんて事は一切無かったよ
うで、掛布団やベッドカバーが彼方此方で捲れ上がって不様に目立つ大きな皺を其処彼処に拵えている。そしてそのベッドの上や傍の床の上に、和樹のパジャマが裏表逆になったような状態で乱暴に脱ぎ捨てられていた。

もしかして、もしかすると……洗濯とかも一切やってなかったりするのだろうか、と戦々恐々としながら洗面所に入ると、案の定脱ぎ捨てた服や使い終わったバスタオルが濡れた風呂場の床の上に纏めて積み重ねて放置されていた。しかしながらその量は、僕が予想していた量よりもずっと少なかった。さすがに洗濯に関しては時々やっていたらしい。

だが、それはそれで僕は不穏な空気を感じざるを得なかった。毎回毎洗濯を開始する前に、果たして和樹はこの全自動洗濯乾燥機に2ヶ所付いているフィルターをチェックしたのだろうか……？少なくとも今まで僕以外触ることがなかったこの子に関して言えば、下手をすると動かすだけで手一杯だったかもしれない。恐らくそんな事まで気が回ってはいなかっただろう。

僕は風呂場に入って洗面器を取り出し、洗濯機の下の方に付いている洗濯用のフィルターのリッドを開いて洗面器を押し付け、フィルター部分のコックを捻って思い切り引き摺り出した。

その瞬間、ドバドババシャバシャ………と埃が混ざって灰褐色に濁った水が勢いよく流れだし、洗面器の中にどんどん溜まってい

った。

幸いギリギリ洗面器いっぱいになった所で水の流入が止まったので、僕は慎重に洗面器を持ち上げると、風呂場の排水溝からその汚水を下水管へ排出した。

そしてフィルターを綺麗にしてから元に戻し、今度は上についている乾燥機用のフィルターを取り出してゴミ袋の所へ行つて一頻り埃を落とし捨てると、また洗濯機にフィルターをセットし、バスタオルを1枚残し、残りの風呂場に集積されていた洗濯物と寝室にあったパジャマを纏めて洗濯機の中に放り込んだ。

次にパンストを脱いで裸足になってから風呂場に入り、扉を閉めてからシャワーの水を一面に掛けて浴室を清掃し、さっき汚水を捨てた洗面器もよく濯いでからシャワーを止めて洗面所に戻つてバスタオルで足を拭いてから浴室の床の水気を軽く取つてやると、洗濯機の中にバスタオルを放り込んでスイッチを入れ、洗剤を投入して僕は洗濯をし始めた。

そこからはもう半分やけくそだった。こんな奴を少しでも許そうと思つた馬鹿な自分を呪いながら寝室へ行つてベッドメイキングをし、リビングへ引き返して散乱したゴミをゴミ袋に分別しつつ回収し、家中の窓を開けてエアコンやテレビのスイッチを切り、廊下のクローゼットから掃除機を取り出すと、僕は家中の大掃除を始めた。既に帰宅した時点で日が暮れかけていたから、夕食を作る時間どころか食べるような時間になるまで全ての作業が終わらせる事が出来なかった。

それなのにも関わらずどうしてこの男は空気を読むという事が出来ないのだろうか？夕飯時になった途端、こっちが必死に掃除をしていて夕飯を作る余裕等無い事が判りきっているだろうに、声を掛けてくる和樹に対して僕は思わず怒声を上げていた。

「なあ、薫。飯、まだか……？」

「まだに決まっているでしょう？というか、これを見てそれどころじゃないって判りませんか？馬鹿なの？死ぬの？」

「いや……、まあ……。」

「大体ね。わたしだつてとつくの昔にご飯を作つてあなたと一緒に食べたかつたわ。でもね、あなたが家をこんなにした所為で、もう夕飯なんて作れる気がしませんわ！」

「いや、今からでも作れば……いいんじゃないか？」

「何をふざけた事を言っていますの？もう夜の9時を過ぎているのよ！今から作つた所で何時に出来ると思っているの？」

結局その晩は和樹と二人で店屋物を取つた。そして蛇足になるが、和樹に向かつて怒鳴つた後、家中の窓が全部開いている事に気が付き、恐らくさっきの怒号がマンション中に響き渡っていたであろう、という事に思い至つた途端、僕は鬱屈したあまり死にそうになった。それ以来、何か大声を上げる時には必ず窓やドアが閉まっているか無意識の内に確認する癖が付いてしまった。

第五章：最後のチャンス！～出産へ

>>薫

2039年になって少し経った冬のある日、お姉様が懐妊されている事が発覚した。そして同じ年の9月3日、無事に元気な女の赤ん坊が誕生し、お姉様に顔立ちが良く似たその娘はお姉様と征司さんによって『麗奈』と名付けられた。

その年の4月2日には、義姉が長男の『雅樹』を出産していたので、僕の周りではちよつとしたベビーブームが巻き起こっていた。そして、この流れに乗り込んで自分も子供を手に入れてやろう、と画策した僕は、和樹をその気にさせる為にあの手この手を講じていた。

下品な話、やるやらない以前に和樹が家に帰って来ないと話にならないので、まず夫が真っ直ぐ家に帰ってくる、否帰りたくなる環境を整える事に僕は尽力した。例えば、今までは酔っ払ったり酔い潰れたりしたら色々面倒な事になるからという理由で家の中への持ち込みを遠慮して貰っていたが、少しでも譲歩して、仕事上または付き合いでもどうしても顔を出さなければいけない場合を除いて必ず家で飲む事を条件に、規制緩和をして多少の酒類を家の中に置いておく事を許す事にした。

他にも、料理を作り終えてから夫の皿にだけ塩やその他の調味料を加え、義母が作る料理のそれ…彼好みの味付けになるように工作して和樹の機嫌を取ったり、性的興奮を促進させる為に下着の代わりにビキニタイプの水着を着て、胸元が大きく開いている服とか裾の短いスカートを履くとかした際疾い格好を家の中ではしたりして、努めて夫にとって居心地の良さそうな環境を整えた。

これで上手く自分の思惑通りに事が捗れば万々歳だったのだが、

実際はそういう訳にもいかず、急に僕が懐柔策に乗り出した所為か、何かを警戒するように僕を一瞥するだけで、和樹は何かと理由をつけてなかなか家に戻って来ようとはしなかった。急いては事を仕損じる、急がば回れ等と云うので、彼がその気になるまで根気よく続けようと思っていたが、それでも何処かモヤモヤとした気分の悪さを感じ、憂鬱になりながら僕は日々をすごしていた。

さてそんな中、立春を迎えて大分立ち、そろそろ3月も半ばに差し掛かったので衣替えをしようと寝室のクローゼットの中に仕舞ってある衣類ケースを引っ張り出して漁っていると、ふと高等部時代に着ていた紺色のスクール水着が、何故か夏物の下着や水着の中からではなく、春物のシャツ等が入ったケースの中から現れた。

不思議に思いつつも高等部時代を懐かしく思いながらそれを広げて眺めていると、突然僕の頭の中に、これは使えるのではないか？という考えが思い浮かんだ。思ってみればこの水着を学院の水泳の授業以外で身に付けたことは全く無く、従って和樹にこのスクール水着を着た姿を見せた事も全然無かった。

しかも彼は二次元美少女が出て来るエロゲーが好きなオタク気質の持ち主で、かつ女装していた僕に恋慕した挙句、性別さえ男から女に変えてしまった変態である。更に言えば、ヒトが大便をしている所を凝視しながら欲情に駆られる様なマニアックな性癖まで持ち合わせているから、スク水姿なんかを披露すれば喜んで飛びつくかもしれない。

物は試し、善は急げ、と僕はスクール水着に着替えてみる事にした。

高2の初夏に購入して以来高3の時まで使っていた水着なので、まだ着られるかどうか不安だったが、何の事もない、特にきついと感じる事もなく易々と着る事が出来てしまった。考えて見れば高校時代から身長も体重も3サイズも特に変化していないのだから、着

られないという事の方がおかしいのだが……。あ……。でも、少しだけ胸の辺りがきつくなったような気もしないでもないけれども……。まあ、大丈夫だろう。

家には全身が映せる様な大きな姿見が無いので、恐らく家にある鏡の中で一番大きなものであるう洗面所の鏡の前に立って自分の姿を確認してみた。さすがにあれから10年近くは経っているの少しだけ老けた感じが否めないが、中学時代からずっと同じ眼鏡を愛用し、高等部時代から髪型を変えていない所為か高等部の学生だった頃と見て呉れがあまり様変わりせず、学院時代の事がありありと思い出されて懐かしさで心がいっぱいになった。

みんな元気にしているだろうか……。

同じクラスになった友人達の殆どとは大学に進んでから疎遠になったし、学生会で共に活動した親友達も皆、互いが結婚してからはだんだんと音信も途絶え、今現在まで家族ぐるみで交流があるのはお姉様と杏子様位のものである。

同窓会のような物でもあればいいのだろうが、そういう話が出る訳でもなし、そうかと云って自ら幹事になって皆を集めるというのも面倒だし、こんな草臥れた姿を仲間達の目の前で晒すのも気が引けた。

まあ、一人で勝手に気が滅入っていても仕方がない。取り敢えず今は夫が帰って来るまではこの格好で過ごす事に決めると、僕は鏡に背を向けて洗面所を出て行った。

スク水を着た姿を和樹の目の前で見せると、予想以上に好評を博したのかと思いきや、スク水の上にエプロンを着てキッチンで食事の用意をしていた僕の腰に艶めかしく両手を回して愛撫しつつも、和樹は警戒をしているのか何かを勘ぐるように、

「なあ、薫。お前、最近ちょっとおかしくないか？」

と、僕の左肩に顎を乗せて左耳に息を吹き掛けるようにそっと囁い

た。

僕は、鬱陶しいな…昔みたいになつたと襲えよ、と内心苛立ちながらも、

「あら、何を言っているの？わたし、普通よ。」
と、作り笑いをした。

突然、険しい表情になつたと思ったら、そのまま和樹は物凄い力で後ろから僕をガシツと抱き締めた。あまりにも強い力と体を締め付けられた猛烈な痛みに驚いてか細い叫び声を上げてしまったが、やっとその気になつたのか、と内心嬉しく思いつつ手に持っていた包丁を俎板の上に寝かせると、僕は全身の力を抜いて彼に身体を預けた。

しかしながら彼はそれ以上僕に手を出そうとはせず、代わりにまるで地獄の底で静かに煮えたぎっている大釜のような明らかに怒気を含んだ恐ろしい声で話し掛けてきた。

「お前さ……。ひよつとして俺以外の男と浮気しているんじゃないだろうな？」

「……………」

震え上がるよりも先に、こいつは何を言っているだろう？と拍子抜けながら夫の瞳を覗き見た。僕としては手っ取り早く子づくりに勤しんで次の子供を孕みただけなのだが、目の前の男は違う迷惑を予感したらしい。目が真剣そのものだった。ただし、如何なる過程を経てそう云う結論に達したのか、皆目見当がつかないので僕は当惑した。

「い……嫌だわ、あなただったら。冗談も程々にして下さいませ。わたしがあなた以外の男と目合うなんて事がある訳ないでしょう？…
…そんな事より、久しぶりにエッチしましょう！」

馬鹿馬鹿しい、そう思つて夫の言い掛かりを黙殺すると、僕は彼の腕の中で身体を回して彼の方に向き合い、背伸びをして彼の胸板に乳房を押し付け、上目遣いで和樹の顔を見つめながら一心にその

体を求めた。

だが、彼は表情を緩める事もなく僕に詰め寄った。

「ほら、そこだ！そこなんだよ！」

「……………」

訳が分からず呆然としながら僕は和樹の顔をただただ見上げた。

「結婚して3年、出会ってからもう10年近くも経つが、お前の方から求めてきた事なんて、今の今まで一度も無かっただろ！どうして今になって急に発情しているんだ？どう考えてもおかしいだろ！」

そう言つて両手でガシツと僕の両肩を掴むと、彼は僕の身体をブンブンと前後に揺らし始めた。

「なあ、薫。お前、俺が居ない間に他の男と生でやって、それを誤魔化す為にセックスしたがつているんじゃないだろうな？」

「違います！」

三半規管に思い切り響く位頭が激しく振動して気持ち悪いやら、和樹のあまりにも突飛な思考に閉口するやらで、げんなりしながら僕はそう答えた。

しかし、納得しかねているのか、尚疑り深い視線を和樹は僕に向かって投げ掛けた。

「なら訊くが。どうして最近そんなに色気付くようになったんだ？いくら何でも不自然にも程があるぞ。」

「それは……………」

それを僕の口から言わせるつもりなのか？信じられない！と愕然としつつも、僕は口を固く閉じて和樹から目を逸らした。

「なあ……………どうなんだ？」

「……………」

「黙っていたら判らないだろ！どうなんだよ！」

「……………」

「なあ、薫！」

半ば悲鳴のようにも聞こえる和樹の度重なる悲痛な怒声を耳にする内に、その声に応えなければいけないと思う良心の呵責と、本当に下らない卑小な本心を曝け出したくないという自尊心との板挟みで、僕の心は段々と耐えられなくなっていくた。

そして遂に、何時の間にか目尻に涙を溜めながら、僕は心の奥底に押さえ込んでいた感情を和樹に向かって吐露していた。

「どうしても……どうしても子供が欲しいのよ。」

僕の言葉に一瞬虚を衝かれたように目を丸くしながら押し黙ったが、直ぐに真顔に戻ると和樹は静かに僕に語りかけた。

「それは知っている。でもな、薫……。お前は……その……体質的に難しい事をお前自身が良く解っているだろう？……それに、別に子供が居なくなつて構わないじゃないか。兄貴の所に雅樹も生まれだし、俺達が跡継ぎを作る必要はもう無いんだからさ。このまま夫婦2人だけの生活でもいいじゃないか……。何が気に食わないんだ？」

「……悔しいのよ。」

と、僕が乾いた雑巾を絞り切ったようにか細い声を上げると、不可解なものでも見るかの様に怪訝そうな顔をして和樹は黙って僕の顔を見つめ、そしてこう問い質した。

「悔しい？」

「だってそうじゃない！ 葵お姉ちゃんも、お姉様も、杏子様も、お義姉さんも……みんな普通に妊娠して、無事に元気な赤ちゃんを産んで、凄く幸せそうにしているのに……。どうして……どうして、わたしだけ……。わたしだけ……。」

今度は大声で泣き叫びながら、僕は和樹に向かって自分の心中を思い切りぶちまけた。が、彼はそれ程ピンと来なかったのか、

「そんな事を言っても仕方が無いだろう。」

と、僕を抱きしめて宥めながら諭し始めた。

無論和樹に指摘されずとも、言っても仕方が無い事だし、こう云

う事に対して嫉妬心に駆られる位馬鹿馬鹿しい事も無い事だつて僕自身重々承知している。実際幸せそうにしているのが全くの赤の他人だつたら、単に羨ましいだけで済んでいただろう。

だが、義姉も葵姉ちゃんもお姉様も杏子様も僕にとつてはとても親しい人達である。ただ単に一期一会ですれ違う程度の他人と違つて、互いに互いの生活や人生の全容を良く知っている間柄で、頻繁に顔を合わせる人々である。だからこそ、会つて幸せそうに子供と過ごしている様子を見せ付けられる度に、絶え間ない羨望と劣等感から、まるで般若の如く怨恨に苛まれてしまう。

しかも一方で、義姉は置いておくとしても、彼女達は僕の大好きな人達で、僕にとって大切な人達である。だからこそ幸せになつて欲しい、と本心からそう思う。だけれども僕を差し置いて幸福に享受する事だけではどうしても許せない！そんな矛盾を心の奥底に抱かえて葛藤しながら僕はこの数年間をずっと過ごしてきたのである。そして、誰も不幸にする事も無く僕自身の心が救済される為には、僕自身が子供を授かるのが一番手っ取り早い解決方法だった。

それだつて嘗ては絶望的に有り得ない、万に一つ起きるか起きないかの奇跡だつたかも知れないが、日進月歩の医学の成果により、百に一つ起きそうな所まで飛躍的に確率が向上している。可能性は十分にある。

そして自分の齡が25歳という、子供を宿すのに恐らく最も適した年齢に差し掛かっているという、機運が熟したように感じていた。だからこそ、今行動せずには何時にせん、と自分一人だけが焦燥に駆られて空回りしてしまつていたのである。

色んな想いが心の底から続々と込み上げてきたが、その場で上手く言葉に纏める事が出来ず、僕は一向和樹の胸の中で泣き続け、そうして気が付くと何時の間にかリビングのソファアの上で僕は彼を押し倒し、彼の股間の上に馬乗りになつて無我夢中で腰を振り続けていた。

2040年の8月某日、葵姉ちゃんが2人目を妊娠している事が発覚したのと前後して、僕の胎内にも新しい命が宿っている事が確認された。

以前にもお世話になった坂上医師から妊娠している事実を知らされると、僕は自分のトートバッグの中から、父が郵送して来た、例のカサイ博士が著した最新の論文が掲載された医学学術誌を取り出して先生の目の前に差し出し、こう切り出した。

「先生。わたし、母体介添型の不妊治療を受けようと考えているのですけれど……。」

すると、坂上医師は嬉しそうにこちらの方を向き、

「そうですね、それなら話が早い。私も今、奥さんに奨めようと考えていたところでしたから。」

「ええ、それで……実は父とも相談したのですけれど、治療を開始するに当たって、この論文を書かれた先生の所へ是非受診したいと考えていますの。つきましては、お手を掛けしますが、このカサイ先生の所へ紹介状を書いて頂けないでしょうか。」

と、僕は坂上医師に向かって頭を下げた。

ところが、坂上医師はさっきとは一転して少し困ったように禿げかけた頭を書きながらこう答えた。

「慈恵のカサイ先生ですか……。紹介状を書くのは一向に構いませんが、正直受診できる保証はしかねますよ。」

「……………」

彼の言っている事がよく分からず、最初僕は思わず小首を傾げた。彼の説明によると、カサイ医師の論文が発表されてから、全国にいる僕と同じ様に例の性転換薬の女性になった元男性から問い合わせや申し込みが殺到しているようなのだという。さらに博士本人がバリバリの研究畑の人で慈恵医大でも教鞭を執っている等何かと忙しい人なので、そうしたアポイントの殆どを断っているのだという。

「だから、こちらから先方へ富士之宮さんの事を紹介してみますが、向こうが承諾してくれる可能性はかなり低いですよ。それでも構われませんか？」

そう、真剣な眼差しを向けて念を押すように、坂上医師は僕に向かって尋ねてきた。だから僕も先生の瞳を射抜くように真っ直ぐ見つめながら、

「はい、構いません。宜しくお願い致します。」
と、大きくはつきりと答えた。

どうせ出たとこ勝負である。駄目なら駄目だったで、他の方法を取ればいい。取り敢えずまずは、近所の信頼できる掛かり付けのお医者さんに紹介状を書いてもらってアポイントを取る、これを実行に移す事にした。

数日後の夕暮れ時、坂上先生から我が家へ電話が掛かって来た。
「すみません。出来る限りの事はやってみたのですが、やはり断られてしまいました。」

そう言つて、顔が見えなくても明らかに肩を落としている様子が容易に想像できる位がつくりとした声を出しながら先生は何度も僕に謝った。

元々断られる公算の方が大きく僕の方だつて覚悟はしていたし、無理なお願いをしたのは此方の方なのだから、そんなに頭を下げられると申し訳なさのあまり却つて此方の方が気を遣つてしまう。

「そんな、無理を承知でお願いしたのは此方の方ですからお気に為さらないで下さい。わたしの方こそ、お手を掛けて頂いて本当に有難う御座いました。」

誰も見ている訳でもないのに無意識の内にペコペコと頭を下げて礼を言つと、僕は電話の子機を充電器のスタンドの上に戻して大きく溜息を吐いた。やれやれ、やっぱり駄目だったか。

さて、それならすぐに次の手段を講じなければならない。僕は再

び子機に手を伸ばすと、私立の医大を卒業して今は彼女の祖父が経営する病院で研修医をしている瞳ちゃんの携帯に電話を掛けた。

少しの間呼び出し音が受話器の中で鳴り響いた後、ガチャリという音と共に、

「もしもし……。」

と言う懐かしい声がスピーカーから聞こえてきた。

「ああ！もしもし、瞳ちゃん？」

「え？……ええ、そうですか……。その……、どちら様ですか？」

「ああ！ごめんなさい、わたしったら……。薫です。」

僕の声覚えていない様だったから、慌てて自分の名前を名乗った瞬間、電話の向こうからボタンつと椅子か何かが倒れた時の様な派手な音がして、時間差で瞳ちゃんのしどろもどろな声が聞こえてきた。

「か……。薫様……。？！え、何で？どうして？！」

一先ず瞳ちゃんを落ち着かせた後、妊娠した事、そして不妊治療を受ける事にした一連の経緯を彼女に向かって簡単に話すと、僕は本題を切り出した。

「……それでね、瞳ちゃん。あなた、慈恵医大の出身だったわよね？」

「ええ、そうですけれど……。それが何か？」

「カサイ先生ってご存知でないかしら？慈恵で教鞭を執っておいでだと思うのだけれど……。」

「はい、存じて居ますわ。わたしもあの人の講義を受けた事がありますから。でも残念ですわ。わたしはあの人の研究室の所属では無かったので、面識はあっても親しい訳でもありませんし。専門にしている科も違うので紹介状を書いて差し上げる事も出来ませんわ。申し訳ありません。」

「……………あ！」

切られた。『カサイ先生』の話を出した途端、心なしか声がウン

ザリした調子に代わり、そのまま一蹴されてしまった。僕はがっくりと肩を落とした。

仕方がない、また別の方法を考えるか……。そう気を取り直すと、僕は子機の外線ボタンを押し、今度は父の携帯に電話を掛けた。

「……もしもし、薫か？」

車の運転中だったのだろうか、父の不機嫌な声共に車のエンジンのアイドリング音とウイNKアーリーのチカチカ音が受話器の向こうから聞こえてきた。

「ごめんなさい、お父さん。運転中だった？」

「まあ……。で、どうかしたのか？」

「うん、実は相談というか、お願いしたい事があったのだけれど……。また後にするわ。家に着いたら連絡してくれませんか？」

そう言つと、僕は一度電話を切つて子機を充電スタンドにセットした。

暫くして、実家の方から父が折り返して僕の所へ電話を掛けて事情を訊いてきたので、妊娠している事が判明した事と不妊治療の補助を受けようと考えている事を伝えた上で、父が持つコネクションを使って、僕が力サイ医師の治療を受ける事が出来るように橋渡しをしてくれないか、と切り出した。

「どうでしょうか？」

と僕が言つと、電話口の向こうで渋るように唸ったまま父は押し黙ってしまった。

やはり駄目か……。と思いつつも、

「お父さんに迷惑を掛けている事は解っています。でも、これに賭けたいんです！お願いします！」

と全力で頼み込んだところ、

「わかった……。やるだけやってみよう。……でも、今回だけだからな！」

と渋々ながらも父が承諾してくれたので、僕は嬉しさのあまり、
「はい！分かっています。……ありがとうございます。お父さん、本当にありがとう……。」

と、心の中ではしゃきながら涙を流して感謝の言葉を述べていた。

そして一週間後、父から紹介状が添えられたベージュ色の封書が僕の手元へ送られて来たのだった。

ずっと男性だと思っていたので、実際に診察室でお会いした笠井瑛博士が妙齢の……四十路も半ばに差し掛かったような女性だと判った時は目が点になった。そして世間話で彼女に小学生の息子が2人いる事を耳にした途端、この人が持つ研究成果を頼って治療を受けに来たものの、僕は早くも自分が選択ミスをした事に気が付いて後悔していた。

一般に、産婦人科のような女性が深く関わるような所では、男よりも女の医師の方が良いと考えられがちである。いや、確かに同じ女性だからこそ解りあえて意思の疎通が潤滑に図れる部分も勿論あるのだが、事に妊娠・出産に関していえば必ずしも女の医師の方が良い訳ではなく、寧ろ男の先生の方が結果的に良かったりする時が多かったりする。

というのも、男は妊娠・出産が出来ない分その痛みや苦しみを想像で補うしか無いので、患者が少しでも不調や不満を訴えた場合迅速に処置してくれたり、余程医学的に考えて常軌を逸した物では無い限り、少々無理な要望を親身になって聞いてくれたりする場合が多いのだ。そして、これはまだ妊娠や出産の経験の無い若い女医にも当てはまる。

一方、妊娠出産経験済みの年配の女医さんの場合、特に初めて妊娠して出産を迎えるような未経験の患者において、経験者という1段も2段も上の立場から、ああしろ、こうしろ、わたしの時はこれで上手くいったからその通りにしろ、と経験者故の心強さや頼りが

いがある反面姑並みに小煩く細かい所まで指導してくるので、当たり外れが物凄く激しいらしい。あくまで身近にいる経験者の皆様の意見を僕なりに総括してみただけなので実態はかなり違うものなのかも知れないが、ハズレだったらどうしよう……、と心の中で僕は戦々恐々とした。

というか、ハズレである可能性の方がずっと高そうだ。何というか、丸いとか形容しようがない程腹に肉が付いたポツチャリとした体型に、同じく肉付きが良すぎる丸顔には額や口元に小皺が沢山刻まれていて、セミロングの茶髪にコテコテのパーマをこれでもかと当てた拳句此方の様子を舐めるように観察している、縁が赤い楕円形のレンズのメガネを掛けて薄桃色の白衣を羽織った目の前のおばちゃんを見て、僕は率直にそう思った。

事前に記入して看護師に手渡していた僕の問診票を左手で取り、右手に持ったペンをクルクルと回して手慰みをしながら、笠井医師は僕に向かってブツクサと、およそ淑女としては似つかわしくはないぶつきらばうな調子で語り掛けてきた。

「しっかし……、驚いたわよねえ……。こんな若い娘の為に天下の京都大学の医学部の学部長……。それもあたしと同じ産婦人科の専門医が、態々宜しく頼むって頭をさげてきたんだから……。いくらあたしでも旧帝の偉いさんの要請を無下に断る、なんて事出来ないから診てあげるけれど、あんた一体何者なの？」

「娘です……。」

本人はそのつもりは無いのかもしれないが、何処か刺があって嫌味な言い方にイラつきながらも、グツと耐えて僕は静かに答えた。

此方がどれだけイライラしても素知らぬ風を突き通す心算なのか、笠井医師は右足を上にして組んでいた足を右足が下になるように組み直すと話を続けた。

「……ふん。それにしても苗字が違うようだけど？」

「結婚して夫の苗字に変わったので……。」

「……そう。」

そう言つと笠井女史は右足で床を蹴つて回転椅子を半時計回りに90度回り、僕に少し背を向ける形で机に向かつてカルテに何かを書き込み始めた。そして再び顔を上げて僕の方に顔を向けると、

「じゃあ、今から治療に当たつて簡単な問診をするけど……。その前に一つだけ言わせて頂戴。」

「……………」

「たとえどんな事があつても、主治医である『あたし』の言う事を絶対に従つて頂戴。何も訊かずにあたしの言う事をよく聞くのよ。他の人が何と言おうがあたしの方が正しいのだから。医者としての治療と一緒に、2人の子供を産んで育てている先輩ママとしてもアドバイスしてあげるから、感謝しなさい。」

「は……はい……………」

自信満々の女史の態度に不安を感じて苦笑しながら、ああ……これは本当にハズレかもしれないな……、と僕は心の中でガックシと肩を落とした。

が、何にせよ賽は投げられた。もうここまで来たらこの人に何処までも縋るしか無いのだ。こうして僕の出産までの長い日々が幕を開けた。

運命のデッドラインである7ヶ月目の検診を今度は無事にパスをし、特に大きなトラブルもなく臨月を迎え、予定では次の月の頭に出産を控える事になった2041年3月12日の事だった。

年が開けてからずっと冬の割には暖かい日が続いていたからだろう。例年よりもずっと早く桜の開花が観察された、と報じる昼のワイドショーのニュースを視ながらソファーに腰を掛けて本を読んでいた時、突然重厚なハンマーが何かで軽く殴られた様な鈍い痛みが下腹に走り、思わず僕は大きくなった腹を抱かえてその場で蹲つた。満潮で満ちた海が引き潮に向かつて下がっていく様に鈍い余韻を残しながら痛みは引いていったが、まだ予定日まで大分あるのにも

関わらず、僕は陣痛だと確信した。

まだ下腹に痛みが残っているし、またこれからもつと激しい痛みが襲ってくるだろうとも考えたが、兎に角病院へ行こう！と考えた僕は慈恵会医大第三病院へ電話を掛け、陣痛が始まったのでこれから向かう、との旨を連絡すると、急いで身支度を整えて出かける準備をした。

まだ急を要する程酷い陣痛が訪れている訳ではないので救急車を呼ぶのも気が引ける。会社にいる和樹に電話して家に呼び戻し、車で病院まで運んで貰うのが一番良いのだろうが、年度末で忙しいそうなので手を煩わせる訳にはいかないし、第一奴の性格を考えても帰って来るか怪しい。というより下手をすると、

「そんな事で一々電話するな！馬鹿野郎！」

と怒鳴られるのが関の山だろう。……頑張つて自力で行こう、そう思つて僕は100系マーク？のキーを手にとってハンドバッグを手にとると、壁に手を着いて寄り掛かりながらエッチラオッチラと歩き始めた。

どうにか駐車場に停めてある車まで辿り着いて乗り込むと、シートベルトを締めてエンジンを掛け、発車措置をしてから僕は車を急発進させた。

時間が経つにつれ、まるで地震津波のように激しい陣痛が次々と襲い、最初はまだ周囲の状況も何とか気遣える程度で済んでいたものの、最初の陣痛を感じた頃から1時間も経った頃には、運転どころか座っているのもやっとな位身体が苦しくなり、シートベルトに締め付けられながら僕はバケットシートの中で激しくのたうち回っていた。

幸か不幸か、もう目の前に病院の白い建物が見えている所まで来ているにも関わらず、僕の車は信号待ちの渋滞の長い車列に填つて

立往生していた。

向こうの方に赤く灯っていた信号機の灯火が消え、入れ替わるように青い電灯が光始める。向こうの方に見える銀色に輝くトラックのコンテナがゆっくりと遠ざかり始め、前に止まっている車が制動灯の赤い光を順番に消していって徐々にゆっくり動き出して行く。が、僕の方はそれどころではない、歯を食いしばって陣痛に堪えながらも左手をインパネのセンターパネルのエアコンの吹き出し口の方に手を伸ばし、ハザードランプのスイッチを入れてから、崩れるようにシートに深く座り込んだ。

最悪な事に3車線の内真ん中の車線で停車していたので、後続の車からパ——ンと激しいクラクションの嵐を浴びたけれども、どうしようも出来ずに僕はただ蹲って耐えていた。そして後続の車もそうした気配を感じ取ったのか、ウインカーを付けて車線変更をして、次々と僕の車の両側を追い越して行った。

どれ位時間が過ぎ去っただろうか、今までも苦しかったが、突然これまで経験した事が無い程激しい痛みが下腹を襲ったかと思うと、まるで大便をひり出す時の様な感覚と共に、何かが腹の中から股間の方へ下りて来るように感じた。まだそれどころではないのに、赤ん坊が外に出て来ようとした。

「駄目！駄目！まだ出てきちゃ駄目！」

と、膨らんだ腹に向かって喚いたが既に時遅し。あれよあれよという間にマンコが開いていき、太腿に何か丸くて固い、表面がザラザラした物が当たるのを感じた。気が付くと、股間の辺りのロングのワンピースのスカートの裾がグツショリと濡れて滲み、車のシートやフロアのカーペットにも同じ様な大きな染みが浮き出していた。何時の間にか破水していたらしい。

苦しさのあまり薄れていく意識の中、僕はふと、いつその事ここで産み落として楽になってから病院へ向かおうか、という考えが頭

を過った。ところが、

「も……もう出てきていいから！さあ……、早く出て来なさい。」と、シートベルトのバックルを外して赤ん坊に向かつて呼びかけた途端、今まで順調にその身体を出していた赤ん坊の勢いが、まるで出ようか出まいか考えあぐねている様に急に落ち込んだ。

「ちょ……ちよつと、どうしたの？赤ちゃん……。で……出てきてもいいのよ……。ほら……。おいで！」

僕は焦った。産むのならとつとと産み落とした方が良い。下手に長引かせると赤ん坊に余計なストレスが掛かってしまう事になる。もしかしたらもう既に異変が起こっているのかも知れない……。そう思うと居ても立っても居られなかった。

どうしよう……。そう思ったその時、突然後ろからファンファンとけたたましく鳴り響くパトカーのサイレンの音が響いてきた。

何とか首を動かしてルームミラーを見ると、僕の車のすぐ後ろに紺色の制服に制帽を被った男の警官が2人乗ったクラウンの白黒パトカーがパトランプを点けてサイレンを鳴らした状態で停車しているのが見えた。

すると、助手席に乗っていた眼鏡を掛けた若い警察官が、車から降りて僕の方へやって来て運転席のガラスをドンドンと激しく叩いた。

「もしもし！どうしました？大丈夫ですか？！」

た……。助かった……。そう感じた僕は最後の力を振り絞って運転席のドアノブに手を伸ばし、ドアを開けるとそのままその警察官の腕の中に撓垂れた。

「た……。助けて……。あ……。赤ちゃんが……。」

いきなり若い女に抱きつかれた拳句助けを求められて警官は面食らった様に目を丸くしたが、僕の大きな腹と不自然に濡れた車内、そして僕の股間から顔を出そうとしている赤ん坊の頭を目にした途端ハッと表情を変え、此方の様子を窓から顔を出して見守っていた

パトカーの運転手の方へ顔を向け、

「大変です！至急緊急要請！緊急要請！妊婦が……出産しかけています！というか赤ん坊の頭出てる！」

と大声で叫んだ。すると運転していた警官の方も、

「え？え……え、わ……わかった。」

と、目の前の警官に負けない程大声で返事をし、少ししてから、

「今、本部へ緊急要請を出した！後5分！」

と此方に報告してきた。

それを聞いて少しほっとしたように表情を緩めながら、

「奥さん、もうすぐで救急車が来ますから。頑張つて！」

と、眼鏡の警官は僕を励ましてくれた。

暫くして、思ったよりも早くピ——ポ——ピ——ポ

——と鳴り響く救急車のサイレンが遠くから聞こえて来た。

救急車は僕の車の右斜め前に停車すると、中から数人の救急隊員が降りて来てリアハッチのドアを開け、ストレッチャーを出して僕を乗せるとそのまま目の前の病院へ向かって走り出した。

病院の救急搬送口から分娩室へ運び込まれた途端、居合わせた産科医に引き摺り出される感じで僕はやっと赤ん坊を産み落とした。

意識が遠のいて視界が暗転していく中、

「オギャア！オギャア！」

と元気に泣き喚く赤ん坊の産声と、

「おめでとうございます。元気な女の子ですよ。」

と、僕に向かって語りかける看護師の声が耳の中で木霊していた。

第六話：桜生誕〜こんにちは赤ちゃん

>>薫

急な陣痛から出産まで終えて、ドタバタしたまま緊急入院してから3日後、僕は6人用の大部屋の病室の、入り口から入って右側の真ん中のベッドで寝させられていた。

そこへ、突然他のベッドと同じ様に、自分の左側に小さくて可愛い乳児用ベッドに毛布等が掛けられた。軽度の未熟児としてのこの世に生まれ、一時的に新生児室へ入っていた赤ん坊が今日から母親と同じ病室へ移される事になり、共に退院するまでの間も母子が一緒に過ごせるように手配されたのだ。

やがて病室のドアが開き、白いタオルで包まれて真新しい産着を着た赤子を抱いた看護師が静かに入ってきて、赤ん坊を仰向けでベッドの上に寝かし付けて毛布を掛けると母親である僕に会釈し、そのまま来た時と同様に音を立てずに退室して行った。

僕の両隣と向かいの窓際の母親達が慣れた手付きで子供を抱き上げてあやし始める中、僕はベッドから半身を乗り出し、初めて対面する我が子の姿をじつと観察した。

母親が穴のあく程見つめているにも関わらずぐっすりと眠り込んでいる赤ん坊は、髪もまだ十分に生えていない上に体が小さく頭でっかちであつたものの、驚く位僕とそっくりな顔をしていた。というより、まばらに生えた茶味掛かった髪の色が少し和樹のそれに似ている事を除けば、小さい頃に撮った写真の中に写っている乳児の頃の僕の姿に瓜二つだった。

そつと右手を伸ばして赤ん坊の股間に軽く触れてみると、何の感触も感じなかった。そうか…本当に女の子なんだ……、と感慨深く思いながら僕は抱き上げる為に赤ん坊の腰を両手で掴もうとした。

すると突然、今まで閉じられていた瞼がパツと開き、赤ん坊が目

を覚ました。生まれたばかりであるとはいえ、もう3日も経っているからある程度は目が見えているのだろうか、クリクリとした大きな目を更に大きく見開きながら不思議そうな顔で赤ん坊は僕の顔を見上げていた。

か…可愛い！可愛過ぎる！！生来の子供好きの所為で、今までもこういう小さな子を可愛いと思って眺めた事はあるにはあったが、そんな他所様の子とは比べられない位僕は目の前にいる子供を愛おしく感じ、猛烈にモフモフしたいという欲求に駆られた。が、どうにか理性で抑えながら僕は赤子の腰を両手で優しく掴んだ。

その途端、手で触った感触でもありありと判る位、唐突に赤ん坊の体が硬直した。見ると、額から冷や汗を一筋滴らせて口を真一文字にギョツと結び、目を見張りつつ不安そうに此方に視線を向ける赤ちゃんが目が合った。直様僕は、この娘は絶対に僕を母親だと認識していないな、と直感した。

固まったままの子供をそつと持ち上げると、今度は怯えたように細かく震えだしたので、僕は今にも泣き出しそうな娘の顔を左の乳房に押し付ける様にそつと胸に抱き寄せた。

当初こそ混乱するように手足をパタパタと可愛らしく振って抵抗していたものの、僕の心臓の鼓動が聞こえたのだろうか、急に大人しくなっておっぱいに耳を当てて安穩となり、また不思議そうにポケツとした顔で僕の顔を見上げた。

そうしてどの位の時間見つめ合っただろうか、5分……いやたった数瞬の間だったかもしれない、まるで溜飲を下げた様に唐突に赤ん坊の表情が明るくなり、口を大きく開けて満面の笑みを浮かべながら、

「アウア！アウアッ！」

と、手足をパタパタと動かして僕の胸に抱きついてきた。どうやらこの段になって漸く僕を母親だと認識出来たらしい。

僕は安堵しつつ、

「こんにちは、赤ちゃん。お母さんですよ……。」
と囁きながらギュッと我が子を抱き締めた。

暫くそうして子供をあやしていると、不意に胸の辺りに鈍痛を感じた。そして気になり始めるや否や、乳房に強烈な痛みを感じて僕は胸が苦しくなった。まだ抱きつこうとジタバタと抵抗する我が子を、ごめんね、と申し訳なく思いながら少しだけ引き離すと、左腕で子供を抱えながら右手を病衣に突っ込み、僕はそっと左胸に触ってみた。

乳房がこれまでに経験した事がない程パンパンに張っていた。道理で胸部に痛みが走って苦しい訳だ。しかも心做しか乳頭の辺りが湿ってきているようにも思う。僕は今更ながら、自分が妊娠出産して母親になったのだ、という事実に改めて思い当たった。恐らく既に体の中で母乳の生成が始まって、この数日の間に限界まで蓄えられていたのだろう……。

乳飲み子なら都合よく目の前で戯れているものの、果たして今母乳を飲ませても差し支えがないのか定かでは無かったから、赤子を抱きながらどうしたものかと僕は考えあぐねた。

だが、僕の胸が張っている事に気が付いたのか、母親の思惑など何の其の、とでも言うかのように赤ん坊は僕の病衣の左襟口に手を掛け、そのまま引き剥がして乳首に吸い付こうと藻掻きだした。そう云うせつかちな娘の様子を見下ろしつつ、まあいいか、と思って僕は胸を開けると、子供の顔を左の方のおっぱいに引き寄せて存分にしゃぶらせた。

子供の下が乳首に触れた瞬間、電撃が走ったかの様に痺れる感覚と共に片方の乳房から母乳が溢れ出していく。もう片方の乳房にも刺激が伝搬して乳頭から母乳が迸ったが、片方の胸は張りを失って痛みが引いていつているのに、もう一方は未だに張る事による痛みが残っているの、胸に奇妙な感覚を得たまま僕は授乳を続けていた。

夢中で母親の乳首に吸いついていた娘の視線が、ふと僕の左胸から右胸の方に逸れた様な感じがした。恐らくもう片方の乳頭からも母乳が滲み出している事に気が付いたのだろう。左の方のおっぱいから口を離すと赤子は左手を僕の右の乳房の方へ伸ばし、そのまま右胸の乳首を掴んで自分の口元へ持つて行こうとするような仕草をした。どうやら左右の乳房から同時に母乳を頂戴しようとする目論みでいるようだ。見ている分には可愛くて凄く和む光景なのだが、がめついな、と呆れながら僕は我が子の行動を観察した。

午後の回診の時間に笠井医師が僕の所へやって来た。相変わらず何処か偉そうなオーラを周囲に振り撒いて此方の神経を逆撫でているが、結果的に無事に出産を終える事が出来たし、先輩ママとして子育てに役立つ便利な小技や豆知識を、此方が何も質問していないにも関わらず小姑の様に勿体ぶりながら教えてくれたりするので、特に表立って不満を表すような事は無く、今回も子育て指南と称する無駄話をするだけして終了するかと思いきや、

「実は、少しあなたにお願いがあるのだけれど……。」

と、意味ありげな口調で話しながら彼女は僕に詰め寄った。

「この娘……、もう名前は決めたのかしら？」

「いいえ、まだですわ。夫と二人で決めようと思っていまして……。」

「……そう。それじゃあ単にベビーって呼ばせて貰うわね。このベビーをあたしの研究対象とする事に協力してくれないかしら？」

「……………は？」

思わず僕は絶句した。自分の子供が研究対象になる？という事だ？

二の句が継げずに呆然と彼女の顔を見つめる僕などお構いなしに笠井女史は話を続けた。

「本当、素晴らしい子供よ。この娘は！そう！奇跡……まさに奇跡

の子供だわ！！」

笠井医師は酷く興奮して捲し立てていたが、一方僕はそんな彼女に大変冷めた視線を送っていた。この娘が奇跡の子？確かに本来なら体質的に子供なんて出来ないだろうと思われていた自分の腹の中から産まれてきたのだから、そういう意味ではある意味奇跡的な出生だったかも知れないが、親の自分でさえどうも臆目に見ても、奇跡の子供どころか至って普通の五体満足な子供にしか見えない。第一、研究のために供与して欲しいと要請されて、たった一人の我が子を差し出す親が何処にいるというのか？しかもそれを言い出している本人は、一人の研究者である前に二人の子供の母親である。仮にも人の親であると自認しているのなら、こう云う事を言い出したら相手がどう感じるのか自分が一番よく解るだろうに、どうして態々こう云う事を言うのか、本気で理解に苦しんだ。

しかし、取り敢えず何処がどういう風に奇跡なのか？そこが妙に引っ掛かって気になったので、

「奇跡……ですか？」

と、僕は女史に向かって聞き返した。

「そう、まさに奇跡だわ！信じられる？実の親子なのにHLAが1箇所も違いが見られなかったのよ。父親のとは殆ど一致しなかったのに、子供のHLAが母親のそれと100%も一致するなんて奇跡以外の何ものでもないわ！いいえ、生物学会の常識を覆す世紀の大発見だわ！」

成程、笠井女史が興奮して大声で叫ぶのも無理もない、と僕は考えた。彼女の言う事が真実であるとするのなら、確かに奇跡である事に違いなかった。

HLAは主要組織適合遺伝子複合体(MHC)の一種で、ヒトの白血球等の細胞が持つヒト白血球型抗原を略した言い方である。平たく言えば赤血球における血液型と同じ様に白血球の型を示す物である。

同時にこれは、T細胞やナチュラルキラー細胞といったリンパ球が細胞性免疫において自己と非自己を明確に区別する、暗証鍵としても作用するので、細胞性免疫系が確立された以後は、このHLAの型が合わないと骨髄や臓器を移植しても拒否反応を起こしたり、それによる重篤な免疫疾患を発症して死に至ったりする事もあるので、現代医学において非常に重要視されている。

面倒なので細かい内訳の説明は省略させて貰うが、その型の種類は優に数万種類に及び、赤血球の比ではない。無論ABO式血液型と違い、一番一致する可能性が高い兄弟姉妹間で25%であり、赤の他人と一致する事が殆ど無いのは勿論、通常は父親と母親から半分ずつHLA因子を受け取るので、親子間で一致する事はまず有り得ず、あつたとしてもその確率は1%以下と限りなく低い。しかも今回は僕と和樹のHLA型は全く違う物である上に、今の僕は性転換して女になった元男である。そら奇跡だと騒ぎたくもなるだろう。

僕だって学部は違えども大学で遺伝関係を嚙っていた身だ。彼女の気持ちも解らない訳ではない。解らない訳ではないのだが……、「考えられるのは、父親から受け継ぐ筈だったHLA因子の遺伝情報、連鎖や組み換えを受けて偶然母親の物と同一の物になった……ってところかしら。ただ、偶然にしては出来すぎているわ。……ねえ、協力してくれないかしら？あたしも母親だから二の足を踏みたくないか。気持ちも分かるけれど……。あたし、純粹にその子に興味があるのよ。」

「……すみません、お断りします。」

と、僕は丁寧な断った。確かに興味深い現象ではあるが、その為にと、僕に手に入れた子供を差し出す様な真似はしたくなかった。それに、それはそれで神の御業が成した奇蹟という事にしておけば良いではないか。態々その原因を究明する必要もあるまい。そう思うのだ。

暫く苦い表情で沈黙した後、

「はあ……。」

と深く溜息を吐くと、

「わかったわ。ごめんなさいね。さっきの言葉、聞かなかった事に
して頂戴。」

と言いついて、笠井女史は僕等の前から去って行った。

話の内容は解らずとも不穏な雰囲気は感じ取ったのか、気が付くと
胸に抱いた赤ん坊が不安そうな表情をしながら僕の顔を見上げて
いた。僕は子供の顔を肩の上、首の辺りまでそっと抱き寄せると、
「大丈夫。心配しなくてもいいからね。」

と、子供の背中をトントンと掌で優しく叩きつつ語り掛けた。

日が暮れてそろそろ面会の終了時間が近付いてきた頃、やっと和
樹が病室に見舞いに来て、開口一番こう言った。

「よっ、どうだ？体調は。」

早産で、しかも移動中の車内で産み落としかけるといってんでも
ない出産だった上に、後産を終えた後も暫く後陣痛が続くなど産後
の肥立ちも芳しくなかったから、彼なりに僕の体調を気遣っている
ようだった。恐らく十中八九今一時の間だけで終わる優しさだろう
が、僕は少しだけ嬉しく思った。

「ええ、大分良くなったわ。」

僕がそう答えると、赤ん坊のベッドの傍に置いてある見舞い客用
の背もたれのない円形の青い合成皮革が表面に張られたパイプ椅子
に座り込むと、和樹は安堵したように溜息を吐き、顔を上げて僕に
話し掛けた。

「さっき看護婦さんとすれ違った時に聞いたんだが……。赤ん坊、
新生児室から出たんだって？」

「ええ……。」

そう答えると僕は、脇にある小さなベッドの中で薄桃色の毛布に
包まれてスヤスヤと寝息を立てている子供の顔を愛おしく思いなが
らそっと静かに覗き込んだ。

ふと顔を上げると、和樹もまた、同じ様に僕の向かい側から赤ん

坊の顔を見下ろしていた。

二人で頭頂部を突きつけ合うように、子供の寝姿を左右から眺めていると、突然和樹が静かに口を開いた。

「俺さ……。」

「……………」

「考えてみたんだよ。赤ん坊の名前。」

「……………」

「桜……、っていうのはどうだろう？」

桜か……。恐らくはそういう名前のキャラクターがいて、そこから肖ったのだろうが、今年はもう桜が開花し始めているから特に変な感じもせず、女の子らしい可愛い名前だと思ったので、僕は特に異論を唱えず、和樹が名付けた名前を受け入れた。

退院したその足で直接、僕は自分の車を受け取る為に家族揃って調布警察署へ行った。あの出産のドタバタした時に、やむを得なかったとはいえ、エンジンを掛けたまま車を放置してしまったので、退院するまで一時的に警察署の方で保管しておいて貰ったのである。入院中に和樹に手続きを取って家の駐車場に移動しておいて貰っても良かったのだろうが、和樹は滅多に車を運転しない上に、僕自身も家族とはいえ自分以外の人間に自分の車を触られるのも嫌だったし、何よりも無事に子供が産まれた事を報告するついでに、あの時助けて頂いた警察官の方にも会って一言礼を述べたかった。

無事に手続きを終え、桜を抱っこしながら和樹と並んで、車が保管されている駐車場まで歩いていると、奇遇な事に廊下の向こうから、先日の若い眼鏡を掛けた制服警官とその上司らしい、パトカーのハンドルを握っていた壮年で中肉中背な制服警官が並んで歩いて来ているのが目に入った。

僕が軽く頭を下げて会釈すると、向こうも此方に気が付いたのか、
「あっ！」

と叫びながら駆け寄ってきた。

「先日は、家内がお世話になりました。」

「お陰様で無事に生まれました。有難う御座いました。」

と、夫婦揃って感謝の言葉を伝えて頭を下げると、

「いえいえ、仕事ですから。」

「無事に産まれたんですね。どうなったんだろうと気になっていましたから、ホツとしました。おめでとうございます。」

と、若い方から逆に祝いの言葉を掛けられた。

すると、突然上役らしい警察官が僕等に向かって話し掛けた。

「ところで、お二人はお子さんの為にベビーシートはもう購入されたのですか？」

「いいえ、それは……。」

はつきり言つて、産まれたばかりの子供を車に乗せて何処かに連れ回す、という発想は無かったので、チャイルドシートなら兎も角、長くても精々一年半程度しか使わないであろうベビーシートを買う気は今の所無かったし、人から借りようにも、身近な知り合いの家には、ベビーシートなど無いが、あったとしても現役で使っている子供がいる家ばかりだったから、借りる当てすら無かった。だからと云つてお巡りさんの前で、車は持っているけれど、乳児を車に乗せる予定が無かったので買っていない、とは口が裂けても言えないので、僕は茶を濁してしまった。

だが、お巡りさんはやれやれとでも言うかのように笑いながら、優しい口調でこう言つた。

「まあ、今回は突然の事態だったようですから大目に見ますが、お子さんの命を守る為にも出来るだけ早い内に用意してあげて下さいね。何でしたら、各地の警察署・役所・公安委員会でもベビーシートやチャイルドシートの無償貸し出しを行っていますから、是非利用して下さい。」

「レンタルする事が出来るのですか？しかも無料で？」

僕は驚いた。そんな行政サービスがあったのか……。

「ええ、お住まいはどちらの方ですか？」

「吉祥寺の方ですが……。」

「吉祥寺か……。よく分かりませんが、おそらくそちらでも交通安全協会の方で無償貸し出しを行っている筈ですから、一度問い合せてみて下さい。……あ、そうだ！何処へやったかな……。」

と言いながら、警官は持っていた鞆の口を開けて、手をつ込んでガサゴソと何かを探し出し、僕達の前に差し出した。それは、チャイルドシートの無償貸出に関する東京交通安全協会のパンフレットだった。受け取ってパラパラと中身を覗いてみると、少し型の古い廉価モデルから憧れのアップリカの上位製品の最新モデルまで、本当に期間限定だとはいえ無償で貸し出されていた。

実際に利用するかはさておいて、帰ったら直ぐにでも最寄りの警察署か市役所に問い合わせてみよう。桜を抱いた和樹が隣りの助手席に座る帰りの車の中で、少しばかり興奮しながら僕は考えた。

マンションの駐車場に100系マーク？を駐車し、和樹から桜を受け取って抱きしめると、僕等は駐車場からマンションへ向かって歩き出した。

家に着いてリビングに入って電気を点けると、目に飛び込んできた部屋の風景に心底僕は驚いた。

そこには、ソファアの後ろに置かれた真新しいベビーベッドと布団、毛布やメリーゴーランドのセットを始め、女の子らしい薄桃色や黄色などのベビー服が数着、ガラガラ、おしゃぶり、乳幼児用の玩具、紙オムツなど、当面必要になるだろうベビー用品が一箇所に纏めて大量に置かれていた。無論、どれも購入した覚えも誰かから貰った記憶も無い物ばかりである。

「ど、どうしたの？！これ……！」

一瞬言葉を失ったものの、僕は和樹に説明を求めた。

「ああ、桜が無事に産まれた事を伝えたら、一昨日の夕方に突然お

袋と親父が訪ねて来てさ。まだこういう物を買ってない事を話したら、昨日はいきなり業者まで引き連れてこれを置いて行っただ。」

「これ……、全部……？」

「ああ。」

さらりと何でもない風に彼はそう言ったが、僕は畏れ多く思った。これだけ揃えるのに相当の支出をした筈だ。普段は嫌な人達だと思つて、互いに関わらないようにしている分、心から僕は義理の両親に感謝した。……新しく買ってきたらしい割にはどこか草臥れているピカチュウのような耳と尻尾が付いた黄色い乳児服の裏を捲るまでは。

その服には、足を覆う部分……丁度足の裏に来る部分に、義姉の字で黒い油性マジックを使って『綺羅羅』と書かれていた。いや、この服だけではない、義実家から頂いた数十着のベビー服の全てに同じ名前が同じ人間の手によつて書き込まれていた。要は、あまりにも女の子っぽくて甥子に着せられそうになく、手を持て余していた物をお下がりという形で桜に厄介払いしただけのようである。

しかしそれ以外は、早く揃えなければ、と内心焦っていた物ばかりだったので、僕はやはり有り難く感じた。

興味津々なのか、腕の中でモゾモゾ動きながら、ベッドに付いている色とりどりのプラスチック製の小魚の飾りが沢山付いたメリーゴーランドに向かつて桜が手を伸ばそうとしている事に気が付いたので、早速僕は娘をベビーベッドの布団の中に仰向けで寝かせ、メリーゴーランドのモーターのスイッチを入れてみた。

スイッチを入れた途端、メリーゴーランドに付いていた小さなLEDの電飾が淡く虹色に輝きだし、ゆったりした電子オルゴールの音色と共に魚の飾りがゆっくりと回転し始めた。

いきなり音と光を撒き散らしながらメリーゴーランドが回りだしたからだろう。ただでさえ大きくて円な瞳をさらに大きくして桜は目を丸くした。そして非常に気に入ったのか、

「キヤツキヤツ。」

と嬉しそうに満面の笑みを浮かべながら、上から糸で吊り下げられて空中を泳ぎ回る魚達を捕まえようとするかのように両手を伸ばし、瞳で魚の動きをグルグルと追いかけ始めた。

僕は、そんな娘の様子を、彼女が遊び疲れて眠りに落ちるまで、静かに見下ろしていた。

桜が寝入ってしまったので、僕らは夕食を取って風呂を済ませて、ベビーベッドの上に桜を一人残してリビングの電気を消すと、寝室へ向かって就寝した。

真夜中、何故か中々眠りに落ちることが出来ず、ウトウトしながら目を閉じていると、リビングの方で何かがガサガサと動く気配と共に、

「アウウウウ？アウア……！アウア……！バブウ……。」

と寝言？を呟くような桜の声が聞こえて来た。何処か寂しげな、不安気にか細く響くその声の調子が少し気になったが、赤ん坊も人間だ、寝言の一つや二つ呟くだろう、と思って僕は聞き流してしまっただ。明日も朝が早かったので出来る限り寝ておきたかったのだ。実際その後すぐに桜の声は止んで静寂が戻ったので、そこまで重要な事だとは思えなかったのだ。

しかしながら、そう安堵して眠りに就こうとした刹那、

「ウ……ウ……ビエエエエエエエン……！……ウエ——
ン！アウア！アウア！」

と、凄まじく大きな赤ん坊の泣き声が、リビングの方から暗闇を伝って僕の耳に聞こえて来たので、僕は吃驚して飛び起きると桜の元へ駆け出した。

リビングの電灯を点けてベビーベッドに駆け寄って中を覗き込むと、顔に大きな皺を作りながら桜はワンワンと大泣きしていた。

急いで桜を胸に抱き寄せ、あやすようにユサユサト揺らして宥め

ていると、その内泣き声が段々小さくなり、やがて眠りに落ち、スヤスヤと寝息を立てる音を除けば再び辺りに静寂が訪れた。

暫くすると、今度は寝室の方からガサツという音が聞こえ、少しペースが速くて音も大きな、明らかに苛立っているような足音と共にリビングに和樹が入って来た。どうやら起きてしまったらしい。部屋に入るや否や、彼はすぐく不機嫌そうな声を上げて僕を問い質した。

「一体どうした？何だったんだ？今の……。」

「ごめんなさい。桜が夜泣きをしてしまったみたい。もう収まったわ。」

僕が眠りに落ちた桜をベッドの上に仰向けで寝かせながらそう答えると、

「夜泣き？」

と和樹はなお苛立ちながら訊き返してきた。

「……ひょっとして、これから毎晩続くのか？勘弁してくれよ……。」

うんざりしたい気持ちはよく解るが、如何せん赤ん坊のする事である。少しは大目に見て我慢して欲しいのだが、彼の性格を鑑みるにそう云う訳にはいかないだろう。気が滅入りたいのは僕だって一緒である。

桜を妊娠中に出席していたマンションの管理組合の会合の後、同じマンション内の主婦達と雑談をしている時に、先輩ママの人達から赤子の夜泣きの恐ろしさについての苦労話を聞かされて散々脅かされたが、確かにこんな真夜中や朝方に、一度どころか何度でも毎晩のように叩き起されるのは、想像しただけで鬱屈としてくるものがある。

しかしながら逆に、どうして赤ん坊は夜泣きをしてしまうのか？その原因を紐解いて行けば快適な睡眠を妨げられる事も無いのではないか、と僕は考えた。

そうした中で僕は、コンラート・ローレンツの『ソロモンの指輪』

の中に著述されていたある逸話を思い出した。

ある日、ローレンツ博士はハイイロガンの卵の人工孵化の観察実験を行っていた。もう間もなく生まれようとするその卵の雛が無事に孵化したのを見届けたら、博士はこの雛を母鳥の元へ返そうと目論んでいたが、孵化した雛が一番最初に見た物が博士だった事から、雛は博士を親だと認識し、本当の母親の所へは決して向かおうとはしなかった。（この時初めて『刷り込み』という現象が発見された）仕方なく博士はその雛にマルティナという名前を付けて、フィールドワークも兼ねてその娘を養う事にした。そしてその一連の顛末が一つのエピソードとして先述の本に記載されている訳だが、その中に次のような事が書いてあったように僕は記憶している。

博士はマルティナを、それこそ実の娘と同じ様に慈しみ、彼女の為にふかふかのクッションと柔らかい布地、そして更に小型の電気毛布をバスケットに仕込んだ彼女専用のベッドを拵えてやり、夜になれば彼女をそこに寝かせて自分の枕元に置いていた。

ところが、普段はとてもいい子のマルティナだけれども、夜泣きが激しく、毎晩のように

「ピープッ！ピープッ！」

と泣き叫んでは博士を憔悴させていた。

毎晩のように叩き起されるのに辟易した博士は、何とか彼女の夜泣きを抑えようと、ベッドに色んな細工や工夫を凝らしてみたが、どれも今一つ効果を上げなかった。

しかしながら毎晩のようにマルティナの鳴き声を聞いている内に、博士はある事に気が付いた。

先ず、マルティナはいきなり大声で夜泣きを始める訳ではない。

夜泣きを始まる前に必ず、

「ヴィヴィヴィヴィッ？」

と云う、誰かに呼び掛けるような小さな鳴き声を上げていた。博士

はその的確な観察眼と長年の研究で培った経験から、それが意識をすれば、

「お母さん！お母さん！どこー？」

という、子供が母親を探している鳴き声である事を突き止め、更に様々な試行錯誤の上、親のガンが子供のガンに呼び掛ける、

「お母さんはここにいるから、安心しなさい。」

という意味の鳴き声である、

「ガガガガガ！」

という音を出してマルティナの背中を優しく叩いてやれば、

「ヴィルルルル……！」

という満足気な声を上げて、彼女が夜泣きをしない事を発見した。

もしも、誰かが眠っている私の耳元で、

「ヴィヴィヴィヴィヴィ？」

といったら、今でもすかさず、

「ガガガガガ！」

と私は答えるだろう。そのように博士が書き記している位なので、実際に物凄く手を焼いていたのだろう。

兎も角この出来事のお陰でローレンツ博士は、母親の姿が見えない事からの不安、そして母親が近くにいると庇護しているという安心を求める寂寥感と逼迫感から、雛鳥は夜泣きという行為をするのだと結論付けた。

さて、桜の夜泣き対策も同じ様に考えてみよう。そう思っと思案し始めたものの、あつという間に結論が出てしまったので、僕は考える事が馬鹿馬鹿しくなってしまった。

そら、こんなただ広くて真っ暗な部屋にたった独りで取り残されたら泣いて当然だろう。

下手すると大人でも、百物語や一人かくれんぼをしたり、幽霊や妖怪の類を創り出したりする程、暗闇というものに恐怖という物を連想して畏れるくらいだ。赤子ならさもありなんだろう。

しかも桜は此方が全面的に世話をしなければ生きていけないか弱い乳児である。庇護してくれる母親がいないという状況など、絶望以外の何ものでもないだろう。夜泣きをするなという方が酷である。

そうとなれば桜の夜泣き対策は自ずと決まってくる。リビングの電気を点けっ放しにしておくか、一晩中桜を胸に抱いてあやしなから過ごすか、その両方が……。蛍光灯を点ける事は体内時計のリズムと子供の成長に与える影響を考慮すると論外にも程があるので、今の所一晩中一緒に過ごすのが一番現実的であるように僕は思った。「ごめんなさい、あなた。わたし、今夜からこの娘とこっちで一緒に眠る事にするわ。その方が夜泣きをしてもすぐ泣き止ませる事ができるでしょうし。」

和室の押入れから毛布を持ってきてソファアの上に敷き、その中で寝転がりながら僕は和樹に声を掛けた。そして、

「そうか……。わかった。じゃあ、電気消しとくぞ。」

という彼の声を合図に、僕はソファアの上に、和樹は寝室で、その日の晩は別れて眠る事になった。

その後、僕は新しく布団を購入して和室に敷き、その上で桜と共に眠り始めた。そして何時の間にか和樹も同じ様に隣に布団を敷いて和室で就寝するようになり、結局今まで使っていた寝室を、将来は子供部屋にするという事で桜に譲り渡す事になるのだが、それはまた別の話である。

第七話：桜も1歳9ヶ月、初めての帰省とクリスマス

>>薫

2042年、冬。

桜が産まれて早くも1年半以上が経過しようとしていた。

大人の自分達にとっては一瞬で過ぎ去って行く年月も、子供にとってみればそうでもないようで、ついこの間まで日がな一日寝てばかりいた桜が、もう喋るところか家中をちょこまかと走り回るようになっていいるのだから、考えて見れば不思議な事であり、感慨深くも思う。

感慨深いと言えば、NHKの『おかあさんといっしょ』や『アンパンマン』や『ドラえもん』等、自分どころか両親や、ヘタをするとその前の世代が子供の時分から脈々と見続けられてきた子供番組が、未だに手を替え品を替えて放送し続けている事に吃驚した。特に『アンパンマン』や『ドラえもん』等は、作者がとうの昔に鬼籍に名を連ねているのにも関わらず、大人の事情で後世の人によつて『新作』なる物が創られているのだから、どうなのだろうか？と個人的には疑問に感じ得なかつたりする。

でもそんな大人達の思惑など関係ないともいうように、今も桜はリビングのソファアの上にちよこんと座りながら一心不乱にテレビ画面を見つめ、夕刻にやっている子供向け番組を夢中になって視聴していた。

普段はちよつとした事で大泣きしたり、

「ママ——、ママ——。どこ——？」

と呼びながら僕の姿を探し回ったりして纏わり着くから、嬉しい半面家事が捗らなくて少し困っていたのだが、テレビを点けている間は画面を食い入るように見つめているので、その合間に家事等を手早く済ます事が出来て正直助かっていた。本当、テレビは最高で最

悪の子守りマシンとはよく言ったものだ。

そんな感じで今日もテレビに背を向けてアイロン台で夫のハンカチやワイシャツにアイロンを掛けていると、リビングの電話が鳴りだしたので、僕はアイロンのスイッチを切ってケースにセットし、電話に出る為に立ち上がった。

カウンターの上に置かれた子機を手にとると、ディスプレイには僕の実家の電話番号が表示されていた。

「もしもし……。」

と電話を手にとると、

「もしもし、薫？」

と、母の声が受話器から聞こえてきた。だが、普段から日常的に電話をしている仲でもなかったので、急に何だろう？と不思議に思いつながら僕は母親と会話を始めた。

「ええ、そうだけれど……。どうしたの？お母さん。何かあったの？」

「いえね、特に急ぎの用がある訳じゃないんだけど……。」

そう言つて一呼吸置くと、本題を切り出すように母は話し始めた。
「薫。あなた、今度の年末と正月はどうするの？」

「え？まだ決めてはいないけれど……。」

実際、もう年末まで1ヶ月を切っていたが、僕はまだ年末年始の予定を一切立てられていなかった。

今年の正月こそお姉様から有栖川邸に家族と共に招待されて、杏子様の家族とお姉様の家族と共に楽しいお正月を過ごしたが、来年は杏子様達の方では圭一君の小学校入学に向けてなんやかんや忙しいらしいし、お姉様の方でも2人目の御懐妊が発覚したとかで色々とてんやわんやしているらしいので、恐らく今年みたいに一緒にゆっくりと過ごす事は出来そうにないようだった。

義理の実家で過ごすという手もあるにはあるが、はっきり言って

あまり乗り気がしなかった。あの義父と義母と、たとえ数日間といえども、一日中顔を合わせる羽目になるのかと考えると想像するだけで気が滅入る。

それよりも気に掛かるのは、綺羅羅と雅樹という、義兄と義姉の2人の子供の事である。

姪の綺羅羅は9歳の小学3年生、甥の雅樹は来年幼稚園へ入園する事がほぼ決まっている3歳児。甥子の方は好奇心旺盛のやんちゃ坊主の上に、両親祖父母からこれでもかと甘やかされて育てられてきた所為か傍若無人な振る舞いが際立つ糞餓鬼だし、姪子の方は姪子の方で、弟とは対照的に家族から疎まれて孤立し、綺羅羅という名前にそぐわず、いつも俯いて過ごしているような暗くて陰湿な少女だった。今年の盆に仕方なく義実家に夫と娘と共に2泊する事になる羽目になった時、度々いたずらをしようと手を伸ばしてくる雅樹の所為で、桜から一瞬足りとも目が離せなくて非常に疲れたし、綺羅羅の方からは何とも言えない不気味なオーラを感じたので、少なくとも娘を連れて義実家へ挨拶しに行きたくはなかった。

京都の実家や松江の祖父母の家等、こっちの親戚達と一緒に過ごすのも悪くないし、出来ればそうしたいのも山々だったが、何故か和樹がなんだかんだと理由を付けては行きたがらなかったため、今度の年末年始は自宅にて家族3人で過ごす事になるのだろっな、とぼんやりとそんな事を考えていた。

だから、

「多分こっちで、家族3人で過ごす事になると思うわ。」

と、僕が母親に向かって答えると、

「あら、そうなの？……ちょっと困ったわね……。」

と、母は口を濁した。

「どうしたの？」

と尋ねると、

「実はね。お父さんが今度の年末年始の京大医学部の飲み会や会合

にどうしても出席しなきゃいけない事になっちゃって……。孝の方も研究が忙しくて行けないっていうし、あなたに島根の方に行って貰おうか、ってお父さんと話していたんだけど……。ほら、桜も1歳9ヶ月になったでしょう？お祖父ちゃんとお祖母ちゃんも会いたいって言っているし……。駄目かしら？」

と、母は困ったような調子で訊いてきた。

「出来ればわたしも行きたいし、お祖父ちゃん達に桜を会わせてあげたいけれど……。和樹さんが中々首を縦に振ってくれなくて……。」

と、僕は困惑しながら母に言った。すると母は大した問題では無いと考えているのか、

「何言っているのよ。あなた一人でも桜を連れて帰ればいいじゃない。散々学生時代に車を運転して帰郷していたじゃないの。電車やバスや飛行機を使っって手もあるわよ。そっちなら方法は選り取り見取りでしょう？」

と笑いながら言った。

「それはそうなのだけど、和樹さんを一人で家に置いていく訳にはいかないでしょう？」

和樹を独りきりで家の中に放置していればどうなるか、4年前にその惨状を散々に経験して懲りた身としては、是が非でも和樹一人を家に残すという事態は回避したかった。

しかし、そんな僕の気持ちを知っているのか知らないのか、母は呆れながら僕に向かってこう言った。

「馬鹿ねえ。和樹さんだって、もう子供じゃないでしょう？自分の事は自分でキチンと始末出来るでしょう？」

それが出来ないから苦労しているのだよ、安心して留守番を任せられるなら今直ぐにでも桜を連れて帰っているわ！と僕は心の中で愚痴をこぼした。が、

「それか、和樹さんの実家の方で彼を預かって貰えば良いじゃない。

彼に一人で彼の実家の方へ挨拶に行つて貰つてという名目で。それであなたの方はあなたの方で、桜を連れて向こうへ行けば何の問題も無いでしょう？」

と母に言われて初めて、その手があったか！と僕は目から鱗が落ちるような、そんな気分になった。それなら僕も気兼ねなく家を空けられるし、和樹のプライドだって保たれる。全くもって名案だとは思えなかった。

「確かにそうだね。それじゃあ、あの人にそう言つて相談してみろ。向こうに行く日取りが決まったら、また電話しますから。」

そう言つと、僕は母との電話を終えてカウンターの上のスタンドに子機を置いた。

アイロン掛けを再開しようとテレビの方へ振り返ると、此方を向いて立ち上がり、ソファアの背凭れに両手を掛け、首まで髪が伸びておかつぱのようになった頭をちょこんと覗かせて桜が僕の方を見ている事に気が付いた。

「あら、桜。どうしたの？」

と声を掛けると、彼女はその可愛くて大きな目を更に大きくして爛々と瞳を輝かしながら、

「京都のお祖父ちゃん家、行くの？」

と、やや興奮したような感じで訊いてきた。

無理もないだろう。我が家に何度か両親が遊びに来た事はあるが、京都や松江に桜を連れて行った事はまだ一度も無かった。

その所為だろうか、特に物心が付き始めた今年の盆の頃には、下にあるマンション内の公園でいつも一緒に遊ぶお兄さんお姉さん達が、夏休みにそれぞれの祖父母の家に掛ける話をして盛り上がり、実際その頃にはみんな地方へ帰郷して閑散としてしまったので、

「ねえ、ママ。桜はお祖父ちゃん家、行かないの？ねえ、ねえ。」とせがまれ、仕方なく義実家へ泊まりに行った位だった。

だが、やはり世田谷にある義実家が、桜が思っていたような『田舎の祖父母の家』という象形からはかけ離れた物だったからか、それともいつものように図に乗ったのか、今度は、

「京都のお祖父ちゃん、お祖母ちゃん家にも行く——！行きたい！行きたい！」

と事あるごとに言い出すようになっていた。

だからきつと、さっきの電話で話している様子からピンと来たのだろう。桜は瞳をキラキラと輝かせながら期待に満ちた笑みを浮かべて僕の方を窺っていた。

僕はそんな娘の様子を何時もながら可愛いなと思いつつ、

「ええ。でも京都のお祖父ちゃんお祖母ちゃんのお家じゃなくて、松江って云うところにある、ママのお祖父ちゃんお祖母ちゃんのお家に行く事になると思うけれどね。」

と答えると、僕が言った意味がまだ良く理解出来ていないのか、桜は不思議そうな顔をして可愛らしく小首を傾げながら、

「ママの、お祖父ちゃん？」

と尋ねてきた。

「そう。桜の曾お祖父ちゃんと曾お祖母ちゃんに当たる人達よ。」

「……………」

まだ解っていないのか、桜は依然として首を傾げつつキョトンとした表情で僕の顔を見つめていた。僕は彼女の傍まで歩み寄り、娘の手の甲に重なるようにソファアの背凭れに両手を掛け、彼女の視線まで腰を落として向かい合うと、なるべく解り易くなるように噛み砕いて説明した。

「ママのお母さん、つまり京都のお祖母ちゃんのお父さんとお母さんなの。」

「……ふん。」

今一理解していないながらも自分の中で一応の落とし前を着けたのか、少し間を置いてから桜は納得したように頷いた。そして再び

眩しいくらい輝いた笑顔になると、

「それでね！それでね！ママ！何時行くの？何時行くの？」
とはしゃぎ出した。

「今度のクリスマスが終わってから大晦日の間位にね。パパとも相談しなければいけないけれど、お正月をあつちで過ごす事になると思うわ。」

「うん、わかった〜」

まるでそこがランポリンの上であるかのようにソファアの上で跳び上がって小躍りしている桜の様子を暖かく見つめながらも、僕は自分で発した言葉に内心当惑していた。そうだ、クリスマス……、どうしよう？

去年のクリスマスは桜がまだ9ヶ月だったから、桜には粥状の離乳食、自分達も普段と変わらぬ食事を摂って、特に飾り付け等もせずに素っ気無い物になってしまったが、物心ついて離乳食も卒業し、大抵の物なら介添えしてやれば食べられるようになった今、これからは食卓の上にクリスマスケーキやフライドチキンを用意したり、部屋をそれらしく飾り付けたりしてクリスマスらしいクリスマスを過ごすべきかもしれない、と僕は考えた。

和室に敷いた自分の布団に桜を寝かし付け、自分も掛け布団の上に寝転んで寝ている娘に寄り添い、髪を梳く様に右手で桜の左の頬を摩っていると、玄関からガチャンっという音が響き、和樹が廊下を玄関からリビングの方へ歩いて来るのが開けっ放しにされた和室の襖越しに見えたので、僕は娘を起こさないように静かに立ち上がって夫の元へ向かった。

「お帰りなさい、あなた。今夜は早かったのですね？」

「ああ、まあな。」

「先に御飯を召し上がりますか？それともお風呂を先にお済ませに

なりますか？」

「飯だ！」

前を歩く和樹に従うようにリビングへ入ると、僕は彼からコートとスーツのジャケットと鞆を受け取ってソファアの背凭れに掛け、彼の食事を用意する為に台所に入った。

ダイニングテーブルの、和樹が食事を摂っている所の真正面にある椅子に腰を下ろし、両肘をテーブルの上に置いて頬杖を突くと、僕は彼と向かい合い、そして話し掛けた。

「ねえ、あなた……。」

「ん、何だ？」

食事をしていた手を止めると、和樹は訝しげな表情をして僕の方へ顔を上げた。

「今度の年末年始の事なのだけれど……。」

「……ああ。」

「わたし、今度の年末年始に桜を連れて松江の方に行く事になると思いますから。申し訳ないのですけれど、わたし達が向こうへ行っている間、代わりに世田谷のお義父さんとお義母さんの所へはあなた一人で挨拶に行つて下さらないかしら？」

「ああ、わかった。……ああっ？」

夕飯を食べながら僕の話聞き流していた和樹は、驚いたような大声を唐突に上げると、目を丸くしながら僕の顔を凝視した。

「なあ、薫。今、何と言ったんだ？」

「今度の大晦日からお正月に掛けて、桜を連れて島根の方へ行く事になった、って言いましたけれど。」

「其の次だ。」

「だからあなたは、あなたの実家でお正月を過ごして下さいね。」

「いやいや、聞いていないぞ。そんな事。」

「今日、わたしの実家から連絡があつて。お父さんとお母さん、そ

れに孝も仕事で忙しくて、今度の年末年始に向こうの家へ挨拶に行けないそうなのよ。だからわたしに桜を連れて松江の家へ行つて欲しいそうですね。それに、お祖父さんとお祖母さんにはまだ桜の顔を見せていないし、いい機会だから会わせに行こうって思ったのよ。」

「そういう事なら分った。分ったんだけどな……。」

何故か、心なしか彼が焦っている様に僕は感じた。

「どうして俺が一人で取り残される事になっているんだ？」

「……………！」

本気で言っているのか？と内心驚愕しながら僕は和樹の顔を見つめた。

「解らないの？」

「何が？」

「だってあなた、いつもわたしの実家や綾小路の本家に行く事を嫌がっているじゃない。」

「う……………」

和樹は不貞腐れたように黙り込んでしまった。

「ひよつとして、あなたも一緒に行きたいの？」

と、僕は彼を軽く揶揄した。すると彼は沈黙したままそっぽを向いた。僕はそんな彼の様子を横目で見ながら話を進めた。

「別に一緒に来てもいいのよ。というより、そっちの方がわたしだって有難いもの。元々あなたが来ないだろうと思って桜と二人で行こうか、って思っていたのだから。家族３人で行けるのなら、そっちの方がずっと良いですね。」

「……………」

「……………」

「……そうか、わかった。」

「……良かった。でもあなた、大丈夫？あなただって会社の忘年会や新年会に顔を出さなければいけないでしょう？」

と、僕が問いかけると、

「ちよつと待っている。」

と言うと、和樹は徐に食卓から立ち上がり、鞆を開けて黒革の手帳を取り出した。

「26日に仕事納めで、27日の土曜に忘年会があつて、3日に新年会があつて5日から仕事始めだから、28日から正月の2日までなら休みが取れるぞ。」

「そう。じゃあ、29日から元日までで予定を立てればいいですね。」

僕は、和樹と会話しつつ傍にあつたメモ用紙とボールペンを手に取ると、日付をメモし始めた。

「29?28日から行けばいいじゃないか。それに元日に帰る事もないだろう?」

「何言っているの。27日に飲み会があるのでしょ?あなた、十中八九飲み過ぎて遅く帰つて来るでしょう。寝不足と二日酔いの状態で子供を連れて千キロも移動する自信がありますの?もうあなた、30なのよ。」

「うつ……。ま……まあ、そうだが……。」

「それに3日に新年会があつて、すぐに仕事始めがあるのなら、帰つてから一日ぐらい休める時間が必要だろうし……。」

「そこは要らないんじゃないか?3日の次の4日は日曜日だし、ここで休息を取ろうと思えば取れなくもないぞ。それに元日早々に翻すのも向こうに対して失礼じゃないか?」

お前が言うな、とも思ったが、確かに和樹が言う通り、正月早々に慌ただしく向こうを立つ、というのは世間体を考えると色々問題があるように思われた。そうかと言って、1月の2日の深夜に戻ってきて翌3日に夫を飲み会に送り出すというのも、それはそれでどうなのだろうか……。

「う——ん。」

と唸りながら僕は考えた。

「それじゃあ、帰りはお昼くらいに立って、飛行機を使って戻った方がいいかもしれないわね……。」

そう呟くや否や、

「え？お前の車で行くんじゃないのか？」

と、唐突に和樹が大声を上げたので、僕は驚いて彼の方へ顔を上げた。

「え？……ええ、その心算でしたけれど……。新幹線とやくもで行こうかなって……。」

「ふーん。でも珍しいな。お前なら絶対車で行きたがると思ったのに。」

「そりゃ、車で行けるのなら行きたいけれど……。桜がいるから難しいわね。さすがに子供の面倒を見ながら運転なんて出来ませんもの。」

「桜なら俺が面倒を見ればいいだろ。」

「トイレの問題があるでしょう？あの娘、まだちゃんと自分でおしっこ始末が出来ないのよ。PAやSAを通り過ぎた直後とか渋滞中に、『おしっこ！』とか言い出したらどうするの？紙製の簡易トイレや替えのおむつパンツを用意するにしても限度って言うものがあるわよ。それに後始末だって大変だし。電車だったらお手洗いだっていつでもいけるし、おむつを替える事が出来る設備が備わっているわ。」

「それはそうだが……。でも小さな子供連れで乗り込んだら他の客の迷惑にならないか？」

和樹は、珍しくまともな事を言って渋い顔をしたが、僕の方は杞憂で終わるだろうと高を括っていたから、彼の心配を一笑に付した。「大丈夫よ。桜は大人しくていい子よ。他の人に迷惑を掛けるような事は絶対にしないわ。それに、新幹線には子連れ家族専用の指定席車両が設けられているし。やくもの指定席車両なんていつもガラ

ガラよ。案ずる事は何もありませんわ。」

「そうだといいが……。」

「でも、それなら行きの切符と帰りのチケットを出来るだけ早い内に手配しておいた方がいいわね。明日にでもネットで予約の手続きを取っておく事にするわ。」

「ああ、そうだな。お前に任せるよ。」

そう言つと、和樹は再び黙々と夕食を食べ始めた。

家族で帰省する為のＪＲの切符とＪＡＬのチケットを予約してから少し経つた日曜日、僕は２つ上の階の部屋、田山さんの一家が暮らす６０３号室のキッチンに、田山さんの奥さんと他数人の自分の娘と同じ年頃の子供を持つママ友数人と共に集合していた。田山夫人に、小さな乳幼児でも食べる事が出来そうなクリスマスらしい料理の作り方を教えて貰う為である。

田山さんというのは、ウチのマンションの管理組合の理事長を１０年以上引き受けている、マンション最古参の住人の一人である。

旦那さんの方は、いつも裾の長いデニムのズボンを穿き、Ｔシャツやトレーナーの上に赤い格子縞のシャツを羽織つて、野球帽を前後逆に被るといふ典型的なオタクな服装をしている、一見すると変質者のようにも見えかねない、黒縁の眼鏡を掛けて頬や顎に髭を貯えた小太りの小父さんだが、その正体は大手出版社の月刊誌や週刊誌で連載を受け持つ巷ではかなり有名ならしい少年漫画家である。

奥さんの方も少しふくよかな人で、濃い茶色に染めたショートヘアーに楕円形のレンズの銀縁の洒落た眼鏡を掛けた上品な婦人である。彼女もまた、その分野では有名な出版社で絵本や児童書を沢山執筆している童話作家である。

二人とも子煩悩で、このマンションでは最高齢となる高校生の男の子と中学生の女の子の兄妹を育て上げており、また大変な子供好きで児童教育に関して非常に造詣が深く、近所の子育て中の母親の

相談も気軽に受け付けて助言を添えてくれるので、僕も含めて近所の母親連中からとても信頼されていた。

実際、僕も桜が産まれて半年近く経った頃、離乳食の作り方や与え方も全く分からなかったので、その事について田山さんの奥さんによく相談に乗って貰っていたし、最近桜がよく喋り始めてからも、乳幼児期の情操教育に適切な絵本を紹介してもらったり頂いたりして、すごく助かっていた。遠くの親戚より近くの他人とは良く言うが、すぐ近くにこうして頼りになる人達に恵まれた事は、僕にとって非常に幸運な事だとしみじみ思う。

自分で調べて自分の家で作るのが正しい事なのかもしれないが、クリスマス当日までは、ケーキを作る事を桜に内緒にして喜ばせよう、と僕は密かに考えていた。この日も、同世代の主婦で娘と同年位の子供を抱えている田中さんと深山さんと共に、田山夫人にレシピを教えて貰ったという訳である

田中さんと深山さんというのは、先に書いた通り僕と同じ位の歳の、同じマンションに住んでいるママ友で、これまた僕と同世代の主婦であり、同じマンションに暮らす小山田さんと小暮さんと本庄さんを中心とするグループとよくつるんでいる人達の事である。よく一緒に小山田さん達のグループに入らないかと誘われるが、小山田さん達は良い人達ではあるけれども人の噂話を井戸端会議で話し合うのが大好きという、僕が苦手とするような類の人達なので、適当に言い繕って心なしか彼女達とは少しでも距離を取るようになっていた。

そんなこんなでクリスマススイブを迎えた。

キッチンで小さなクリスマスケーキや手羽先を揚げたフライドチキン等を準備する為に調理していると、その前の週末に銀座の三越で料理に使った食材を買ったついでに、可愛かったからという理由で購

入して現在リビングに飾られている20cm程の虹色に輝くLEDの電飾が付いた緑色の小さなクリスマスツリーを見て、

「キヤツキヤ。」

と楽しんで見とれていた桜が、何かのおまけで付いてきた、赤と黄色の横縞が斜めに入っててつぺんに金色に輝く房がついたボール紙製の円錐形の防止を被った状態で、ヨチヨチと台所の中に入ってきた。

「ママ——、何しているの？」

「こらっ。危ないから台所には入ってきちゃ駄目って、いつも言っているでしょう。」

そう言って桜の腰を両手で握って持ち上げ、抱き寄せてリビングの窓と窓の間に置いたクリスマスツリーの前へ連れていこうとしたが、

「ヤーよ！ヤーよ！」

と、彼女は愚図りだして僕の腕の中でジタバタと騒ぎ出した。

「ママと、一緒、いるの——！」

「お願いだから、ママの言う事を聞いて頂戴。今は手が離せないの。」

……いい子だから、ね。」

ポンポンと娘の背中を叩きながら言い宥めようとしたが、僕の願いに反して桜はブンブンと首を横に振った。

「ママという——！遊ぶ——！」

「ママは夕御飯を作らなければいけないから、今は桜と遊んであげる事は出来ないの。」

「や——だ——！！！」

困った……。誰に似たのだから、桜は頑固というか、これと決めたら強硬に押し通そうとして絶対に曲げようとしないう所があった。それが他人に流されず確固たる自分を持ち、初志貫徹するという彼女の長所にもなっていたが、事に就いて言えば、一度でもこう云う状況に陥ると中々素直に言う事を聞いてくれず、手を焼く事が結

構多かった。

親の威厳を示して一喝する等して黙らせればいい。場合によってはある程度の体罰というのも有りだろう。頭では理解している。だが、たとえ驕の為に叱ったり叩いたりした結果だとしても、子供が悲しむ顔を見なくなかったので、余程の事でもない限り僕は娘を叱る事が中々出来なかった。

だが、そんな桜でも、一つだけ容易に手懐けられる奥の手があった。

「分かったわ。そんなにママの言う事を聞けない悪い子はウチの子供じゃありません。だから出て行きなさい。」

なるべく毅然とした姿勢を心掛けて厳しい表情を作って僕がそう宣言した途端、

「ふえ？」

と奇声を上げると、桜はポカンとした顔で一瞬僕の顔を見つめた後、心細そうな表情にオロオロしながら泣き始めた。

「うえ——ん、え——ん！違うもん！違うもん！

桜、ママの子、だもん！」

「だったらママの言う事を聞く事が出来るわよね？」

と、ポカポカと僕の胸を叩いてくる娘を宥めながら念を押すと、

「む——っ！」

と膨れ面をしながらも、

「わかった……。」

と言って大人しくなったので、

「よしよし、いい子いい子。もう少ししたら御飯が出来るから、楽しみに待っていていなさい。」

と、僕は抱っこをしつつ娘の頭を右手で優しく撫でてやった。すると、気持ち良いのか、

「エへへ……。」

と幸せそうに微笑みながら、桜は頭を僕の胸元に押し当てて来た。

全くこの娘ったら。さつき怒られてしょんぼりしたばかりだと云うのに、もうすっかり立ち直って何時もの元気な桜に戻っている。まあ、そこがこの娘のしおらしい所なのだけれど……。

そんな事を思いながら、一旦桜を抱いてリビングへ向かおうとした時、

「ねえ、ママ。今日の御飯、何なの？」

と、桜が顔を上げて僕に尋ねてきた。

「なあに、もうお腹空いたの？」

「さつき、もうすぐ御飯、って言ったの、ママだよ。ねえ、なーに？ なーに？」

「それは出来てからのお楽しみ。」

そう言って、僕が歩き出そうとした刹那、

「ママの意地悪……。………によ？………わあ！何これ？何これ？」と、もそもそと僕の肩の上まで這い上がった桜が、台所の一角に置かれた皿の上に盛りつけられた出来立てのフライドチキンと、ユールログに視線を向けた途端、目の色を変えた。

「ねえ、ママ！これ、なあに？」

と、チョコレート色をして上から雪に見立てた粉砂糖が塗されたユールログを桜が指差したので、

「これはね。ユールログって云う、丸太を模ったケーキなのよ。」と、僕は娘に簡単に説明した。

またしても、桜の目がキラキラと輝いた。

「え？！ケーキ！」

そう言った娘の口元には、既に涎が垂れかけていた。1歳の誕生日の時に赤ちゃん用のショートケーキを食べさせた時に大層気に入って以来、見ただけで垂涎する程桜はケーキが大好きな子供なのである。

なにせ、和樹も帰って来たので皿をダイニングテーブルの上に並

べ、いざ夕飯が始まった時の母娘のやり取りが、

「ママ！ケーキは……？」

「夕御飯が食べ終わってからデザートにね。」

「む——っ。」

と、こんな感じだった位である。子供だからお菓子に目がないという事は理解出来なくもないが、御飯を差し置いてまで食べたがるというのはどうなのだろうか？僕は少しだけこの娘の将来が不安になった。

夜、桜が寝る時間が来た。

お気に入りの絵本を読み聞かせると、何時も通り直ぐに夢の中へ墜ちて行ったので、僕と和樹はそつと布団から起き上がると書斎に行き、書斎のクローゼットから和樹に頼んで用意しておいて貰った30cm位の高さがある結構大きなデイベアの縫いぐるみが入った包を例のクリスマスツリーの近くに静かに置いた。

そして、明日の朝桜が一体どういう顔をするのか楽しみにしながら忍び足で和室へ引き返すと、僕達はやっと床に就いた。

第八話：桜の初体験！～鉄道と田舎編

>>薫

2042年12月29日朝。

僕は朝食の後片付けを手早く済まし、夫を急かして自分もよそ行きの服に着替えて出掛ける準備をしながら、桜にも新しく買ってきたばかりの洋服を着せる。

「はい、桜。万歳して！」

「うん！バンザイ！」

娘の両手を持って天井にリビングの向かって高く上げさせる。そこに小さな女児用の黄色い長袖のワンピースを上から被せるように着せ、片腕ずつ袖を通させ、さらに上から濃い桃色の小さなダブルコートを羽織らせた。

「桜、おしっこは大丈夫？あと出掛ける用意は出来ている？持って行く物ちゃんと用意した？」

「うん、大丈夫！」

そう言うのと、お気に入りの毛糸の白い帽子を被って桜は僕の周りをちょこまかと歩き出した。

僕はリビングの真中に置いた自分の銀色のスニーカーとエルメスのハンドバッグの所に行き、スニーカーに自分と桜の着替えや桜のおむつパンツやおもちゃ等が、バッグに自分の化粧品等の小物類や財布といった貴重品がきちんと入っているかどうか確かめた。すると、クリスマスプレゼントとして桜に上げたデイベアの縫いぐるみが荷物の中に入っていない事に気が付いた。

「あら、桜。アーちゃんはどうしたの？」

「ママ……。アーちゃんなら、ここいるよ。」

僕の問いかけに答えるように、桜はソファアの所へ駆け寄ると、ソファアの上から薄茶色の大きめのデイベアの縫いぐるみを引っ張り出し、縫いぐるみを後ろから抱き着くように胸に抱き寄せた。

「そう、でもアーちゃんもトランクに入れてママが持って行つて上げるけれど……、どうする？」

桜が一人で縫いぐるみを持って行くのは大変だろう。そう思つて提案したのだが、桜はブンブンと首を横に振り、まるでデディベアを庇うように半歩後退つた。

「アーちゃんだけ、一人ぼっちなんて、可哀想。」

「そう、わかつたわ。それじゃあ、落とさない様にしっかりとアーちゃんを抱っこしておいてあげるのよ。」

「うん！」

恐らく、縫いぐるみをスーツケースに突っ込まれるのが嫌なのだろう。そう解釈した僕は桜に道中気を付けるように言い含めた。

その時、薄い空色のワイシャツにベージュのチノパンを穿き、茶色の革のベルトを締めてキャメル色のバーバリのジャケットを羽織つた和樹が彼の黒いスーツケースを押しながら書斎から現れた。

「あなた、荷物の忘れ物はない？一応必要な物はトランクの中に積めておいたけれど……。」

と、夫に声を掛けると、

「大丈夫だ。問題ない。」

と、和樹は答えた。そして、

「薫。お前こそ、列車の切符と飛行機の手ケット、ちゃんと持っているか？」

と、彼は逆に訊き返した。

僕は自分のハンドバッグの中を漁つて、切符や特急乗車券を仕舞つた財布や航空機の予約チケットが3人分ある事を今一度確かめた。

「大丈夫。ちゃんとありますわ。」

「そうか。それじゃ時間も差し迫つて来たし、そろそろ出掛けるか。」

「ええ……。ねえ、あなた。」

「何だ？」

「先に桜を連れて下に降りて待っていて下さいませんか？わたし、家の戸締りとかを確認してから最後に家を出ますから。」

「そうか。じゃあ、俺は先に出ているから。……おい、桜、行くぞ！」

そう和樹が呼び掛けると、縫いぐるみを抱っこしてこちらに背を向けていた桜が振り返った。

「ママ——、パパ——。行くの——？」

「ああ、出掛けるぞ。用意はいいな？」

「うん——！」

元気の良い声を上げると、桜は右腕に熊のアーちゃんを抱き、左手を和樹に引かれながら廊下を玄関の方へ歩き出した。が、すぐにまだリビングに居た僕の方へ振り向き、

「ねえ、パパ——……。ママは——？」

と尋ねてきたので、

「ママはお家の戸締りを確かめてから出るから、先にパパと一緒に外に出て待っていて頂戴。」

と返事をする、

「うん……。わかった……。」

と、何処か不満気な物を滲ませながらも、桜は素直に頷くと夫と共に玄関から外へ出て行った。

各部屋の窓が閉てられて施錠してある事を確認してからカーテンを閉め、各部屋の電気を消していき、最後にガス給湯器の元栓を閉じて水道の栓を確認してから僕はコートと羽織り、ハンドバッグを肩に掛けてスーツケースを持ち上げると玄関へ向かった。

玄関から協同廊下に出て来ると、目の前で和樹と桜が並んで待っていた。

「あら……。こんな所で待って居なくても、下のロビーで待っていてくれて良かったのに。」

玄関の扉を閉じて施錠し、ロックがきちんとされているかを確認

しつつ僕は2人に声を掛けた。

すると、和樹がやれやれとでも言うように肩を竦めながら、
「桜がママと一緒に行く！と言って動こうとしなくてさ。」

と答えて彼の足元に顔を向けた。

釣られて僕もその方向へ視線を落とすと、縫いぐるみを両手に抱いてうんこ座りでしゃがみ込み、プクーっと思えるしく頬を膨らませて顰め面をし、

「ママ！遅い——！」

と不満を口にしつつ僕の顔を見上げる桜の姿がそこにあった。

「ごめんね。待たせてしまつて。さあ、行きましようか……。」

そう言つて歩き出そうとした途端、桜が僕のスカートの裾をむんずと掴んだ。

「ママ！抱っこ！抱っこ——！」

「はいはい。ちよつと待っていてね。」

「早く！早く！抱っこ！抱っこ！」

僕はスニーカーを置いてその場にしゃがみ込むと、縫いぐるみごと桜を右腕で抱き上げて立ち上がり、左手でスニーカーの把手を手にとろうとした。その刹那、和樹の腕が伸びてきて僅差で僕のスニーカーの把手を掴んだ。

咄嗟の事に驚いて彼の方を見つめると、

「トランク持ちながら桜を抱くのは流石に無茶だろ。」

と言つて、彼はスタスタとエレベーターホールに向かって片手に1つずつ、計2つのスニーカーを引きながら歩き出し、僕は桜を抱きながらその後続いた。

エレベーターを降りてエントランスホールへ出ると、やや白っぽい濃灰色のスウェットとパーカーとパンツを着て黒色の野球帽を被り、首にタオルを巻いたランニングの帰りと思しき田宮さんの御主人と擦れ違つた。

田宮さんが此方に向かつて、

「あ！お早う御座います。」

と声を掛けてきたので、

「お早う御座います。」

と、僕と和樹は声を揃えて挨拶を返した。

「珍しいですね。ご家族揃って御旅行ですか？」

「旅行というか……、わたしの方の親戚の所に年末年始を過ごしに行くんです。」

僕が田山さんに向かってそう答えると、胸に抱いた桜が大人同士の会話に口を挟んできた。

「あのね！あのね！桜ね！初めてね、曾お祖父ちゃん、曾お祖母ちゃんの家に、行くんだよ。」

そんな桜の様子を見て、

「あつはつはつ……。」

と快活に笑うと、田山さんはそつと彼女の頭に手を載せて優しく撫でつつこう言った。

「そうか、そうか！それは良かったねえ……。楽しんでくるんだよ。」

「うん！」

僕は桜を抱き直すと、改めて田山さんに話し掛けた。

「それでは、わたし達はこれで……。」

「じゃあ、私もこれで……、道中恙無い事をお祈りします。良いお年を。」

「田山さんこそ良いお年を。奥様達にも宜しくお伝え下さい。……」

それでは。」

「行つてらっしゃい。」

「行つてきます！」

田山さんの御主人に見送られ、別れ際に元気よく挨拶した桜を連れながら、僕達はマンションを後にした。

マンションの正面口を出ると、左側に普段桜を遊ばせているマンションの敷地内の児童公園が、直ぐ右に伸びる道を進めば駐輪場と駐車場棟の通用口がある。真っ直ぐ行くとすぐそこにマンションの敷地に沿って正面と右側方向に「」字型に伸びる住宅地の路地が見えている。

マンションの敷地からアスファルトの舗装路に出ると、僕等はマンションの塀に沿って道路を右側に進み、更に直ぐに突き当たる十字路をそのまま敷地に沿って右折して表通りに出た。するとそこにたまたま此方に向かって東京無線のクラウンコンフォートのタクシーが走って来るのが見えたので、和樹はスーツケースから手を離して右手を上げ、そのタクシーを止めた。

タクシーの左後席の扉が独りでに開き、運転席から後部座席へ半身を乗り出しながら黒いスーツ姿の年配の男性運転手が僕等に向かってこう呼び掛けた。

「御利用有難うございます。荷物の方どうしましょうか？」

「トランクの方をお願いします。」

和樹がそう応答すると、

「畏まりました。」

と言って、運転手はシートベルトを外して降車すると、車の後部に回り込み、プロパンガスのボンベが奥に収まったトランクを開いた。僕と和樹は奥に収められた灰色のタンクにぶつけないように気を付けながら、2台のスーツケースを車のラゲッジルームに収納した。そして運転手がトランクリッドを閉めると、僕等は後席右側に和樹、左側に僕と桜という順番でタクシーの中に入り込んだ。

「どちらまで？」

「JRの吉祥寺駅まで。」

和樹が行き先を告げると、タクシーは静かに走りだした。

対して時間も掛からずに着ける程度の移動の筈だが、普段僕が運

転する車以外の車に乗る事が滅多にない上に、普段は買い物に行く時に助手席に乘せて移動する事が多いので、こうして僕の膝の上であやされながら車に乗ったり、車内の至る所にベタベタと広告やステッカーが貼られていたりする光景が珍しいのか、瞳をクリクリさせながらキャビン中に興味深げに視線を走らせていた。

タクシーが駅前に着して和樹が会計をし、スーツケースを地面に下ろすと、僕等は電車にのる為に改札に向かって歩き出した。

桜を一旦地面の上に立たせてバッグから財布を取り出し、『吉祥寺↓松江』と書かれた切符を3枚出し、内大人用の1枚を和樹に渡し、残りの子供用と大人用の切符を手にとると、最初に黒いスーツケースを持った和樹を自動改札の向こう側に通してから、自分も銀色のスーツケース持って桜を抱き、改札口の端に設けられている駅員が常駐している有人改札の方に向かい、そこに詰めていた壮年中肉中背の駅員に声を掛けた。

「すみません。」

「は？はい……、何でしょう。」

「すみません。この乗車券……この娘の分なのですけれど……。この娘、まだ一人で改札を潜って切符を取り出す、という事が出来ないで、この娘の分の切符だけ此方を通して頂けないでしょうか？」

「はあ、別に構いませんが……。お嬢さん位のお子様なら、態々切符を買わなくても、保護者との同伴という形で、無料でお乗せする事が出来ますよ？」

駅員は怪訝そうに僕の顔を窺っていた。

「いえ、その……。おむつを替える時とか、一人分余分に席を取っておいた方が都合が良い事が多いので……。」

「ああ、そういう事ですか！」

駅員は納得したようにそう言うと、

「ならついでにお客様の分も一緒にお通ししましょう。乗車券を見せてください。」

と、僕と桜の分の切符を一緒に改札して向こう側に通してくれた。

エスカレーターで高架の上に設けられたホームに上がると、さすがに年末年始で殆どの企業や役所が仕事納めを終えた所為か、ホームの上にはあまり通勤や通学の途中と見られる人は疎らで少なかった。が、その代り帰省や旅行へ行く途上と思われる、カジュアルな格好をしてスーツケース等を持った行楽客の団体やウチみたいな家族連れがホームの上を賑わしていた。

「わあ！凄いい！人がいっぱい！」

広い島式ホームを埋め尽くす程の人波を初めて目の当たりにした桜は、そう言つて目を丸くしながら興奮してはしゃいでいた。

やがて、ホーム全体に電車がやって来る事を知らせる電子チャイムが鳴り響いた。

『皆様、間もなく上り方向の電車が到着いたします。危険ですから黄色い線の内側で……。』

僕は咄嗟に胸に抱いている桜に話し掛けた。

「桜、見ていてご覧。電車が来るよ！」

「え？本当！電車！電車！」

僕の血を色濃く引いたのか、桜は女の子の癖に乗り物が大好きな一風変わった子供だった。車こそ、僕の助手席に座る機会が多いので乗り慣れていたが、電車に関して言えば、夫を見送る時に道路から高架の上を行き来る電車を見上げるか、テレビ等で観賞する位のものであったので、実際に電車を見て乗車するのは、彼女にとって初めての体験だった。

接近メロディーがホームに響き渡ると、ビ————……ファアアアアアアアアアアアアアアアアアン……とクラクシヨンとVVFFインバータの音を響かせながらガタンゴトンと銀色の車体に

緑とオレンジが重なった帯が真っ直ぐに水平に引かれた10両編成の東京行きの快速電車が勢い良く入線してきた。

「ほ——う！わあ！ママ！電車、電車！あれ、乗るの？」

「そうだよ。あれに乗るのよ。」

「わあい！電車！電車！」

「こら！気持ちわかるけれど、あまり騒ぐと他のお客さんの迷惑になるから静かにしなさい。」

「シュン……。」

急に大人しくなった桜の背中をポンポンと優しく叩くと、僕はスーツケースを持ち直して和樹と共に人波に続いて列車の中に乗り込んだ。

電車の中はそれなりに混んでいたものの、僕らは運よく入って来たドアの近くに立つことが出来、さらにその付近、進行方向右側の前から3番目の扉の前方のシートのこちら側の端に空いているスペースを見つけたので、僕はそこに桜をちょこんと座らせ、彼女が履いていた薄ピンク色のスニーカーを脱がすと、それを片手に持った。僕が靴を脱がすのを待っていたのか、早速桜は座席に膝をついて窓の方へ体を向け、縫いぐるみを抱いて窓枠に手を掛けながら、縫いぐるみと一緒に左から右へ流れて行く車窓の景色を一心に眺め始めた。

普段から見慣れている日常の景色を、娘が夢中になって見ている様が不思議なのか、

「何が面白いんだろうな……？」

と、隣に立っていた和樹が不思議そうにポツリと呟いた。

「仕方が無いですわ。わたし達にとっては見慣れた風景でも、この娘にとっては生まれて初めて見る物なの……。」

そう言って愛おしく見下ろしつつ、僕は気付かれないように桜の頭の上にそっと手を置いて優しく撫でた。

山手線の内回りに入り、間もなく東京駅に着くとう云う車掌の車内アナウンスが聞こえ、電車が徐々に速度を落とし始めたので、

「さあ桜、そろそろ降りるから準備しなさい。」

と言つて、僕は娘を促した。

「え——！もう？」

不満なのか、桜は口を尖らせて膨れっ面をした。

「そんな顔をしないの。すぐに新幹線に乗るから。ほら、お靴を履きましようね。」

僕は娘を宥めながら彼女の両足に靴を履かせると、

「よいしょ！」

と、縫いぐるみと一緒に彼女を胸に抱き上げた。

在来線から新幹線に乗り換え、ABCと3席並んだ指定席に僕達は腰掛けて一路西の方へ向かつて移動していた。

一番通路側に和樹、真ん中に僕、そして窓際に桜という配置で座っていた。1両だけしかないファミリー専用の車両の為か、全ての座席が小さな子供を連れた家族連れである為、子供の鳴き声や騒ぐ声、親の怒鳴り声など喧しくて仕方がないが、此方も2歳にもならない娘を連れているので、ある意味ではお互い様だと、御機嫌斜めになっている和樹を諭しながら僕等は我慢していた。はっきり言って、普通車に乗って肩身の狭い思いをするよりは自分達がある程度迷惑を被っている方が何倍にもマシに思えたのだ。

途中、東京駅で新幹線に乗り換える途上の売店で購入した駅弁を食べていると、車内メロディーが聞こえてきた。

『まもなく、京都、京都です。JR東海道線、山陰本線、奈良線、近鉄京都線、京都市営地下鉄烏丸線へはこちらでお乗換え下さい。本日も新幹線を御利用頂きまして誠に有難う御座いました。まもなく、京都です。』

そんな車内アナウンスを聞きながら、桜が僕に尋ねてきた。

「ねえ、ママ。京都って、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、住んでい

る所？」

「そう、桜のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが住んでいる所よ。」
そして、僕自身の故郷でもある。

「今日は、行かないんだよね？」

「ええ。今日は素通り。」

「行ってみたいな。」

窓枠に手を掛け、右から左へ流れて行く古都の景色を眺めながら桜はそんな無邪気な声を出している。そんな娘を愛おしく見つめつつ、

「そうね。いつか行ければいいわね。」

と、僕は独り言の如く呟いた。

京都を出て新大阪を越え、兵庫県に突入すると、一気に山の方へ向かっていくので車窓の中に灰色の建物の陰よりも緑の割合がグッと多くなってくる。そしてその内、窓ガラスに自分の顔が克明に映る程視界一面が真っ暗闇になる長いトンネルが続く区間に入る。

「ママ——！お耳、キ——ンってする——！気持ち悪いよ

——。え——ん、え——ん。」

トンネルに高速で進入した時に起こる、内耳の空気圧と外からの空気圧の差によって生じるあの耳鳴りを初めて経験した所為か、桜は僕にしがみついてわんわんと泣き始めた。

「大丈夫よ、桜。トンネルを抜ければ自然に収まるから。これでも舐めていなさい。」

と、桜をあやししながらハンドバッグの中を弄って鼈甲飴を1つ取り出すと、僕は娘の口にそれを放り込んだ。

「ほむほむ……。美味しい！」

泣き顔から急に満足気な笑顔に変わった小さな気まぐれ屋さんを、やはり可愛らしいな、と思いながら僕はそつと彼女を抱き寄せた。

減速をしながらトンネルから出ると、もうそこは新神戸駅のホー

ムである。よく見ると山の中に位置するだけあって、遠くの方に神戸市内と瀬戸内海の景色を一望する事が出来る。

そんな長閑な駅舎の風景をポケ——っと見入っていた桜がポツリと呟いた。

「何か変。この駅。」

確かに言われてみれば妙な駅である。トンネルに挟まれた山間にある新幹線の駅という事もあるが、他の駅と違ってホームが頑丈な鉄柵によって完全に二分され、電車が入線した時だけ柵の何箇所かに設けられた引き戸が一斉に開き、まるで放牧場にやって来た家畜の如く人がホームの上を移動する様は異様であるとしか言いようがない。

そんな事を考えていると、列車はまた静かに動き出し、暗いトンネルの中へ再び入って行った。

岡山駅に着くと、次の列車の乗り換えまで10分程しか無いので、僕等は急いで階段を下りると、新幹線と在来線とのホームを出てすぐ右側へ入った所にある伯備線のホームへ降りて行った。

そしてホームに停車していた特急やくもに乗車すると、指定席としてとっていた3席がある、進行方向右側にある2つの2列座席のウチの前の方にあるシートを回転させて向かい合わせると、僕等はやっと腰を落ち着かせた。

予想通り然程人が乗り込まないまま、列車はゆっくりと走り出し、徐々に速度を上げ始めた。

山陽本線を快走する倉敷まではもとより、伯備線に入っても備中高梁までは桜もウキウキで特急電車による鉄道の旅を満喫していたが、山越え区間に入って振り子式電車がその本領を発揮し始めた辺りから、徐々にどんよりと元気を失っていった。

確かに最近381系統の改造工事も進んで電子制御機構付きの自然振子が一般化したとはいえ、過剰に振り戻るお釣りが完全に解

消された訳ではない。自分達大人のように慣れている人間なら兎も角、感性が多感で敏感な、それも生まれて初めて振り子式電車に乗った小さな子供なら気持ち悪くもなるだろう。実際僕も車酔いはほとんどしない性質なのに、小学生の頃まではこの列車に乗る度に気分が優れなくなったものである。

「ママ——！気持ち悪いよ——！」

と言つてぐったりとした桜の背中を摩りながら、

「いいから、寝ていなさい。着いたら起こして上げるから。」

と、僕は彼女を寝かし付けようとしたが、

「窓の外、見られなくなるから、いやだ——！」

と喚いて、彼女は中々眠りに就こうとはしなかった。

それでも振り子式電車独特の気持ち悪さには耐え切れなかったのか、とうとう桜はギブアップして僕の膝の上に頭を乗つけて寝息を立て始めた。

そんな娘の寝顔を優しく愛撫しつつ、

「全く、一体誰に似たのかしら。」

と誰に言うでもなく独り言ちると、

「お前だろ。」

と、向かいの席の窓際に腰掛けている和樹から間髪を容れずに突っ込まれ、僕は少々気分を害されてムツとしたので、キリツと彼を睨みつけた。

根雨を越えて麓に降り、平野部を疾走する平坦な区間に入ると、

また桜が元気を取り戻した。

やがて真つ青に透き通る快晴の空の下、進行方向右側に頂きに真つ白な雪を被った青く輝く大きな山、中国地方が一の名山である伯耆大山がその雄姿を現したので、

「桜、見てごらん。大山が見えるよ。」

と、僕は桜を促した。

「あれ？」

と、桜が大山を指差したので、

「そうだよ。立派な山でしょう？」

と答えると、

「富士山みたい。でも富士山の方が立派だね。」

と、それを言つては元も子もない言葉を掛けられて、僕は思わず沈黙した。

伯備線から山陰本線へ合流して米子を過ぎ、松江を通過して宍道という駅に着いたので、僕らは荷物を纏めて列車から下車し、改札口へ向けて歩き出した。

無人駅の駅舎の入り口に設けられた切符回収口に使用済みの乗車券を投入してホームから建物の中に入ると、目の前に葵姉ちゃんと誠さんが並んで立つて僕等の到着を待っている姿が見えたので、僕は彼等に声を掛けた。

「葵お姉ちゃん！誠さん！」

「あ！クーちゃん、オーちゃん！こっち、こっち！」

「和樹君も薫ちゃんもお久しぶり。迎えに来たよ！」

僕の声に気が付いたのか、彼等も此方を向いて手を振った。すぐに僕等は彼等と落ち合い、手始めに互いに挨拶を交わした。

「葵さんも、誠さんもお久しぶりです。」

「伯母ちゃん、伯父ちゃん、こんにちわ！」

「お姉ちゃんも誠さんもごめんなさいね。態々迎えに来て頂いて。」

「いいのよ、クーちゃん。わたし達だって昨日来たばかりだし……。それよりクーちゃん達だって大変だったでしょ？オーちゃんを連れて……。」

それを言うなら、4歳児の棗と桜とほぼ同い年の1歳10ヶ月の翔を連れて横浜から遠路遙々車でやって来た葵姉ちゃんと誠さんの方が大変だったような気もしなくはないが、僕は黙って苦笑するしかなかった。

「さ、こんな所で立ち話もなんだから、車を停めているから向かお

う。」

と、誠さんに促されるまま、僕達は駅の出口へ向かって歩き出した。

そうは言っても、小さな駅の事である。駅員室と券売機が傍に併設されている待合室のホームと反対側にある扉を開けて一歩でも足を踏み出すと、そこはもう駅の外である。十台位しか車が止められない小さな駐車場と、住宅街を抜けてメインストリートの片道1車線のR9号線へ続く細い2車線道路しかない、如何にも田舎のローカルな駅らしい、風情のある小さなロータリーが眼前に広がっている。

その駐車場の一角に、客待ちをしているサニーやコンフォートのタクシーに混じって誠さんのシルバーマタリックのエルグランドが駐車されていた。

エルグランドの近くまで寄ると、誠さんは車を解錠して背面に付いているラゲッジルームのハッチバック扉を上に向かって引き開けた。

「さ、荷物は後ろに積めて、どうぞ乗って、乗って。」

誠さんに勧められるまま持っていたスーツケースを広いトランクスペースに収納すると、運転席に誠さん、助手席に和樹、後ろの二列目シートの右側に僕、真ん中に桜、そして最後に葵姉ちゃんが乗り込むと、誠さんはエンジンを掛けて車を発進させた。

車が動き出すや否や前の方で男達が男同士の会話で興じ始めた。

「そう言えば、棗ちゃんと翔くんはどうしたんですか？」

「棗と翔ね。今は家の方でお義父さんとお義母さんに、預かって貰っているんだよ。」

「ああ、そうなんですか。」

「棗も翔もね、桜ちゃんが来ると聞いて楽しみにしているんだよ。」

……ところで、和樹君達は何時まで此方にいる予定なの？」

「2日までですね。」

「そりゃあ、えらく急だね……。」

「俺の仕事の都合でどうしても3日までには向こうへ帰らないと行けなかったの……。」

「ああ、そりゃ仕方ないね。……おっと、青に変わったな。……ところで、和樹君ってこれ、いける口だよな?」

「え、ええ……。いけますが。」

「実はさ、お義父さんとお爺さんが、大吟醸のいい奴貰って来たらしいんだよ。今夜一緒に飲まないか、って言われているんだけど、和樹君も一緒にどう?」

「へ——、それは、それは……。」

後ろのほうでは後ろの方で僕等も女同士で話に花を咲かせていた。「叔母さんと叔父さんやコーちゃんが来る事が出来ないというのは残念だったけど、クーちゃん達が来てくれて良かったわ。ウチのソーちゃんやショーちゃんも、オーちゃんが来ると聞いて凄く楽しみにしててね……。」

ソーちゃんというのは、葵姉ちゃんの長女である棗の事。ショーちゃんとは同じく彼女の長男である翔の事である。二人とも本来は『なつめ』と『かける』というのが正しい呼び方なのだが、母親の葵姉ちゃんが『ソーちゃん』と『ショーちゃん』と呼ぶ所為で、親戚の間ではすっかりそっちの方のあだ名で呼ぶ事が定着していた。ちなみにオーちゃんというのは僕の娘の事である。

子供の頭の上を言葉が飛び交う形で、母親同士で盛り上がっていると、不意に葵姉ちゃんが縫いぐるみのアーちゃんを指さして桜に話し掛けた。

「ねえ、オーちゃん。さつきから気になっていたんだけど。そのクマさん、どうしたの?」

「サンタさんに、貰ったの。アーちゃんって、云うの!」

「そう、クリスマスプレゼントに貰ったのね。アーちゃんって云う

んだ。よろしくね、アーちゃん。」

そうにつこりと微笑みながら言うと、葵姉ちゃんは急に真顔になって僕の方へ振り向き、僕の耳元に口を近付けつつ桜に聞こえないように囁いた。

「クーちゃん、こう云うのもあれなんだけど。あのデイベア、此方にいる間はあまりオーちゃんに持たせずに、子供の目の届かない所に置いておいた方が良いわよ。」

「え？どうして?!」

驚きながらそう訊き返すと、葵姉ちゃんはこんな返事をした。

「だって、ウチのショーちゃんが最近やんちゃ盛りになって、ちよつと洒落にならない悪戯をするようになって手を焼いているのよ。わたし達も出来る限り目を離さないように気を付けるけども、何かの拍子に壊さないとも限らないから、悪いけれどクーちゃんの方でも気を付けてくれないかしら。」

葵姉ちゃんの様子を見る限り、本当に手を煩わされて困っているように感じたので、

「分かった。わたしの方でも気を付けるわ。」

と、僕は彼女に了承した。

R9号線から農道に逸れて暫く走った後、松江市の外れ、出雲市の市境に程近い所にある、周りを田畑で囲まれた長閑な田舎町の、家の周りに築地松と呼ばれる防風木が一行に植えられた、出雲地方では一般的な形態の大きな日本家屋、綾小路家の本家の前に車は到着した。

家の両側と裏側に築地松が植えられ、家の前に車が2台程止められる白砂が敷き詰められたスペースと趣のある日本庭園があり、家の敷地の両側には畑が、家の裏側と、向かって右側の畑の傍を走る道路を挟んで向かい側にも、この家の持ち物であるという大きくて立派な水田が広がっている。

目の前にそびえる二階建ての木造の日本家屋は、半世紀以上前に

増改築した時、家の南側、家を正面から見て右半分を一部洋風に改築したので、中央の玄関を挟んで左側は純和風、右側は若干近代風になっており、2つの建物を土間で繋いだような格好になっている。

玄関の引き戸を開けて敷居を跨いで家の中の土間に入る。左側には和風の方の70cm程高くなった上がり框があり、右側には靴置棚と壁を挟んで、玄関の隣の通用口へ出る為の通路がある。

さらに敷居を跨いで奥へ行くと、右隣にある、通用口と裏庭への出口と右側の建物の60cm位の高さの上り框を結ぶ小さな土間と共に、木で組んだ細長い簀子が敷かれた、左側にある先程と同じような左の建物へ入る為の上り框がある薄暗い三和土がある。

僕はし字を描くように敷居を2つ越えて右側の建物の方の渡し木の傍で靴を脱ぐと、娘の靴も脱がせて自分の靴の傍に置き、右側の建物の上がり框の上に立ち、さらに40cm程の段差を越えて明るい色調のフローリングの廊下に入り込んだ。何時も思うが、この家の床は無駄に高い所にあつて苦労する。

廊下の右側には祖父の仕事部屋と2階へ続く急な階段があり、左側には庭を見渡せる雨戸も兼ねた窓がある。そしてその窓の足元に都合良く古新聞紙と広告の切れ端が敷かれていたので、僕達はその上にスリッパを置かせて貰った。見るとすぐ隣にも、同様にして葵姉ちゃん達の物らしい荷物が置かれていた。

廊下を真っ直ぐ進むと、右手に階段下の物置と左手に3枚組ずつの硝子障子と普通の紙障子で仕切られた6畳の和室、突き当たりにトイレ、そのまま廊下を左に曲がると縁側を兼ねた廊下となっており、突き当たった所に10畳位のダイニングキッチンと洗面所と脱衣所と風呂場がある部屋があり、トイレの角を右に行くと、15畳程度のグレーの絨毯が敷き詰められ、黒い本革張りのソファなどの応接セットやシャンデリアが備え付けられた立派な応接間がある。洗面所に行つて桜と一緒に手を洗つて廊下の角まで戻つて来ると、

応接間の曇りガラスが何枚か埋め込まれた緋色の木製の重厚な引き戸が少しだけ開き、中から青い服を来た誠さんに雰囲気が良く似た小さな男の子と、小さい頃の葵姉ちゃんにそっくりの右側にサイドテールを作った幼稚園の年少さん位の可愛らしい女の子が仲良く顔を覗かせていた。葵姉ちゃんの息子の翔と娘の棗である。

子供達はすぐ互いの存在に気が付いたのか、声を掛け合い始めた。

「あ！オーちゃんとクー叔母ちゃんだ！」

「あ！ソーお姉ちゃんとシヨーちゃんだ！」

「オーちゃん、遊ぼう！」

「お姉ちゃんと一緒に遊ぼう！」

「うん、遊ぶ——！」

桜は僕の腕を解こうとモゾモゾ動き出したが、僕は敢えてそれを阻止した。そして申し訳なく思いつつ応接間にいる2人の子供達の方へ顔を向けると、

「ごめんね。叔母ちゃんと桜、御爺ちゃん達にまだ御挨拶を済ませていないから……。終わったら遊んであげてね。」

「うん、わかった！」

「じゃあ、また後でね。」

という言葉を残して、僕は娘を連れて祖父母に会う為にもう一つの建物の方へ向かった。

新館から土間の2枚の簀子の上を渡って古い方の家に入り込む、上り框から更に30cm程の段差を越えて畳の上に立つ。

この古い家は非常に大きい癖に、今自分の右側にある台所と洗濯機が置いてある部屋の前と縁側を除けば板張りの廊下と云うものが存在しない。2階も含めて殆どの部屋が襖と障子で仕切られた和室のみで構成されており、殆どの部屋は家具こそ置いてあれ、他の部屋へ向かう為の通路か物置のようになっていて。しかも電気を点けていない事が多いから、昼間でも暗くてかなり不気味だ。実際の所、

新館の方を専ら使っているの、少なくとも20部屋近くある事は分かつているが、この家に一体何部屋あるのか僕自身は把握出来ていない。入って直ぐの6畳間を進み、目の前の4枚組の紙障子を開けて次の部屋へ行くと、目の前に外枠に黒い漆が施された4枚組の襖、右側に壁と台所の前の廊下に続く1枚の硝子障子、左側の8畳間の今へ続く3枚組の、他の襖と同じ様に外枠に漆が塗られ、上半分が細かい木枠を組んだ紙障子になっている源氏襖に囲まれた6畳間が現れた。

僕は桜を抱いたまま、左側の源氏襖に手を掛けて開けると、和樹と共に部屋の中に足を踏み入れた。

部屋の正面奥には敷居にある4枚の障子で仕切られた縁側があり、左右にはそれぞれ同じ様に外枠が漆塗りの白い4枚組の襖で仕切られた和室である。左側には先程入ってきた時に見た玄関の側の上がり框に続く部屋が、右側には普通の家なら仏間に当たるような、欄間等に漆や黒檀を多用した立派な部屋が続いている。そして後ろを振り返れば、此方から見て源氏襖の左側に、御霊様と呼ばれる大社教特有の、出雲神話の神々を祭った神棚が安置されている。

部屋の真ん中には高価だと思われる細長い黒檀の机が置かれており、その机を取り囲むように縁側に誠さん、向かって右側に伯父夫婦と祖父と祖母が座布団の上に座って寛いでいた。

僕等が部屋に入った途端、部屋の中に居た5人全員が此方の方に顔を向けた。そして、

「おお、薫。久しぶりじゃねえ。元気にしとったかい？」
と、祖父が口を開いた。

「お久しぶりです。お祖父ちゃん。ごめんね、中々こっちに顔を出す事が出来なくて。」
と、僕も答えた。

「まあ、仕方ないわな。お前達ももう子供ではないのだから。……

ところで、それが……？」

「ええ、ここに居るのが夫の和樹です。」

「え——っと、その……、皆様お久しぶりです。」

和樹が挨拶をした途端、僕は祖父の表情が微妙に固まった気がした。

「うむ……。和樹君、君には孫が大分世話になつとるみたいだね。」
気のせいか、些か機嫌が悪くなっているようである。

「え……？……ええ、まあ……。きょ……恐縮です。」

一目見るだけで相当緊張していると判る程多量の冷や汗を額に掻きながら和樹は固まっていた。同時に場の空気が急速に冷えていくのが感じられて此方まで居心地が悪くなった。

そんな空気を和ませるように机の上の茶菓子をお勧めして座布団を2枚渡し、にこやかに微笑みながら祖母がこう言った。

「まあまあ、済んでしまった事を兎や角言つても仕方が無いでしょう。ほら！2人ともそんな所に何時までも突っ立っていないで早く座りなさい。」

土間の方の襖を背にし、和樹と並んで座布団の上に座ると、僕等は祖母が急須で注いだ煎茶が入ったお猪口のように小さな茶碗を受け取った。僕の膝に座った桜は、物珍しいのかその黒っぽい焦げ茶色の器をじつと見つめていたが、やがて興味が失せたのか、机の真ん中の方に置かれた菓子皿に載せられている袋詰めにした御饅頭を取ろうと小さな腕を精一杯伸ばし始めた。

「う~~~~ん……。取れないよ——。ママ——、取って！取って！お菓子取って！」

「はいはい、ちよつと待っていてね。」

腕を伸ばして饅頭を取り、食べ易いように袋の口を切ってから渡してやると、桜は歓声を上げた。

「わ——い！ママ、ありがとう！」

その遣り取りで気が付いたのだろう。僕は祖母と祖父が身を乗り出すようにして桜の顔を覗き込んでいる事に気が付いた。

「ほう……。これが……。ああ、そうかそうか。」

「ええ、この子が娘の桜です。」

僕はそう言っていると、桜の両脇を持ち上げて立ち上がって机の向こう側に移動し、祖父と祖母の間に挟むように彼女を座らせた。

「いい？桜。この人達がママのお祖父ちゃんとお祖母ちゃん、つまりあなたの曾お祖父ちゃんと曾お祖母ちゃんよ。」

「……………」

今一実感が湧かないのか、両手で御饅頭を持ったまま、桜は祖父と祖母の、そして僕の顔を交互に眺めながら愛らしく小首を傾げていた。その可憐な仕草が心を驚掴んだのか、祖父と祖母は凄く上機嫌になった。

「ほーら、曾お祖父ちゃんだよ。お——よしよし。」

「エヘヘ……。」

「あら、もう御饅頭取ったのね？美味しい？」

「うん、曾お祖母ちゃん。美味しい！」

「そうか——。美味しいか……。じゃあ、もう一つ食べるか？」

「うん、食べる——。」

良かった……。産まれて初めて顔を合わせたから、上手く馴染めるかどうか内心凄く不安だったのだが、杞憂に終わったようである。桜が祖父母と楽しく会話をしている間、隙を見て御霊様に挨拶しようとして神棚の前に正座し、僕は二拝四拍一拝して7年近くぶりに出雲大社教のお祈りをし、長い間挨拶に訪れる事が叶わなかった事を心の中で詫びた。

桜を祖父から受け取ってまた元の場所に座り直し、祖父母や伯父伯母夫婦との積もる話に夢中になっていると、突然ベリッという嫌な音が傍らから聞こえてきた。

驚いて右の方を振り返ると、なんと桜が、3枚組の内の向かつて一番右、先程部屋に入る時に開けた源氏襖の紙障子の部分に張られた紙の右下隅の箇所を人差し指で突いて目立つ程度に大きな穴を空けてしまっていた。僕は和樹と共に立ち上がって桜に飛び付くと、急いで彼女と襖を引き離れた。

「ああ、ああ、嗚呼！駄目じゃない、桜。こんなオイタをしちゃ……。ああ、もうこんなに大きな穴を空けちゃって……。」

「うわあ、こりゃあ、ちよつと酷いな……。」

もうすぐ正月だから障子の紙も真新しい綺麗な物に張り替えたのだろう。その分桜の開けた穴だけが異様に目立っているように感じ、祖父母にどう詫びれば良いのか判らず僕は狼狽した。肝心の桜は、どうして怒られているのか分かっていないのか、不思議そうな表情をして僕等の顔を見上げている。

そうこうしている内に、祖父と祖母も立ち上がって源氏襖の所にやって来た。桜の空けた大穴を眼鏡のレンズが接触する位顔を近付けて観察しながら、祖父がポツリと呟いた。

「ああ、こりゃあ。穴が大きくなってしまったなあ……。」

「……………」

大きくなつたって云う事は、元々穴が空いていたのか？と疑問に思いながら僕は祖父の顔を窺った。

「昨日は来て早々翔が穴を空けたけえ、紙を貼ろうか、と思ってそのまま忘れてたんが……。紙を貼らないで良かったみたいだなあ。」と、真顔で祖父はそう言った。どうやら、元々空いてあった穴に桜が気が付き、好奇心からその穴に指を突っ込んでしまっただけらしい。良かった、良かった。いや、全然良くない。結果的に被害を拡大させてしまっている。

そんな僕の葛藤を知っているのか知らないのか、祖父は感慨深くこう続けた。

「しかし、まあ。この襖も難儀物だなあ。今日は桜に突かれ、昨

日は翔に穴を空けられ、去年の盆には棗が襖の部分を蹴破つて建具屋に修理に出したし、お前達も子供の頃に一度は紙を破つたり壊したりしたし……。全く、ウチの子供等は必ずこれに危害を加えるのは何でかねえ？」

そう言われて、僕も小さい頃にこの襖の障子紙の、丁度桜が突いた所と同じ所を、指を立てて破つた事があつたのをぼんやりと回想しながら、僕は久々に祖父の小言を聞いていた。

第九話：桜、初めての夜

>>薫

入り口と反対方向、窓際の所に置かれて座面に羊の毛皮が敷かれた応接セットの二人掛けの黒革のソファの後ろ、窓との間に開いた広いスペースに、豪華な応接間にはとてもそぐわない、ブロック等の小さな子供向けの知育玩具やリバーシとか人生ゲームといったボードゲームがカーペットの上に散らばっている。極めつけには、トイレットペーパーの芯位の太さの強化プラスチックの赤いバーを黒いプラスチックの固定具で留めて組み立てただけの、1.5m程度の高さのある幼児用のジャングルジムまで置いてある。

そして今、葵姉ちゃんと輪番で子供達を見守るという名目で、僕はその傍らで座りつつ、ハラハラしながらそのジャングルジム上の方を見つめていた。

というのも、今まさにジャングルジムの頂上に、勿論両手を離れた状態で、

「えっへん！」

と胸を張りつつ翔が仁王立ちをしていたからである。

事の起こりは祖父母との挨拶を終え、居間に和樹だけ残して桜を抱いて新館の方へ移動し、応接間に入って夕飯が出来るまでの間との取り決めて葵姉ちゃんとバトンタッチしてから暫く経った頃だった。唐突に翔と桜の間でまたもや『どっちが凄い！対決』が勃発した。

経った39日間という僅差でこの世に生を受けた所為かどうかは定かではないが、まだ母乳しか飲めなかった乳児の頃から、既に二人は悪い意味で好敵手のような関係にあった。

ハイハイをしたり歩けるようになったりした時期がどれだけ早か

ったとか、離乳食の訓練期には何をどれだけ食べられるようになったかとか（お陰で二人とも好き嫌いをしない子に育って僕等母親としては非常に助かったが……。）、最近言葉をしゃべるようになったからは、どちらがどれだけ言葉を話せる事が出来るようになったか、どちらの母親がどれだけ自分達にやさしいか等、多岐に渡って張り合っては、自分の方が凄いと自慢合戦を繰り広げていた。

そして今回は、どちらがジャングルジムで上手く遊ぶ事が出来るのか？という物凄く下らない事で対立していた。

初め、ジャングルジムに手を掛けてするすると登り、上の方へ上がってから後ろを振り返ってバーの上に腰を下ろし、得意気に下の方を見下ろしている翔を見上げた桜が、自分もそこへ辿り着こうとジャングルジムに向かった。

ところが哀しいかな、我が家の立地上の制約と安全性の疑問視という親の僕等の勝手な判断の所為でこの手の据え置き型の簡易ジャングルジムというもので遊んだ事が無かった桜は、上の方まで行っでは見たものの、動く度にグラグラと揺れて傾き、横転しそうになるジャングルジムの挙動に恐怖し、ジャングルジムの中腹でバーにしがみついたまま顔を歪めて泣きそうになってしまった。

桜を助けに行こうか、と僕が立ち上がろうとした途端、翔が囃し立て始めた。

「オーちゃん、弱虫！」

そして、桜も止せばいいのに目尻に涙を溜めながら翔をキリッと睨んで反論した。

「弱虫じゃ、ないもん！」

「弱虫！弱虫！」

「違うもん！」

「シヨーちゃんもう止めてよ。オーちゃんが可哀想だよ。オーちゃんもほら、ジャングルジムから下りてお姉ちゃんと遊ぼう！」

と、見かねた棗が口論する二人の間に割って入ろうとしてジャングルジムの足元から声を掛けたが、二人は言い合いを止める気などさらさら無いようだった。

そうこうする内に調子に乗ったのか、翔はジャングルジムの、真ん中だけ一段高くなった所へ更に登ると、両手を離して立ち上がり、先述した通りジャングルジムの一番高い所で仁王立ちになった。

「ほら、見て！凄いだろ！」

本人はそう豪語して天狗になってジャングルジムをグラグラと揺らしているが、見ている此方は堪ったものではない。桜の顔も恐怖で引き攣っているし、僕も肝を冷やしつつジャングルジムの所へ駆けつけた。

「シヨーちゃん、お願いだからそんな危ない事は今すぐ止めなさい！怪我をするわよ！」

その時、グラッとジャングルジムが翔の後ろ、僕から見て奥の方向へ向かって大きく傾いた。

「うわ————っ！！！！！」

「キャ————！！！！！」

大声で喚いて手足をばたつかせ、ただ只管ジャングルジムにしがみつきながら、僕の眼前でジャングルジムと共に二人の子供達がゆっくりとスローモーションで倒れ込んで行く。

僕は必死でジャングルジムに飛び付くと、左手でジャングルジムのバーを掴み、右腕を伸ばして翔の左腕を引っ掴むと、グッと体を屈めて重心を後ろに移動させてギリギリの所で最悪な事態を回避した。

一先ず翔を抱き上げて床の上に下ろし、次に桜を捕まえてジャングルジムから引き離すと、僕は娘をギュッと抱き締めた。怖かったのだろう。桜は僕の腕の中でガクガクと震えつつさめざめと泣いて

いた。僕はそんな彼女の頭を優しく撫でながら、

「よしよし……。怖かったね、怖かったね……。もう大丈夫だから……ね。」

と囁いてギュッと強く抱き締めた。

その時、ガタンツともの凄い勢いで応接間の重たい引き戸が開き、肩で息をした誠さんと、その後が続いて涙で顔が真っ赤に腫れた棗ちゃんが応接間の中へ入って来た。

誠さんは血眼になって部屋の中を見回し、僕等の姿を見つけると、
「翔！桜ちゃん！大丈夫か？！」

と、叫びながら駆け寄って来た。

そして、エンエンと泣き声を上げつつ床の上に尻餅を着いてへたり込んでいる翔と、僕の胸の中で嗚咽を漏らしている桜の姿を認めると、安堵したのか、誠さんは紐が切れた操り人形のようにその場で座り込んで深く溜息を吐いた。

「よかった……。向こうの部屋でお義父さん達と話していたら、いきなり大泣きしながら棗が飛び込んで来て、ジャングルジムが倒れて翔と桜ちゃんが怪我をした、って聞いて……。本当、寿命が縮むかと思ったよ。」

「倒れかけたのですけれど、あわやという所で何とか二人を抱き寄せて……。幸い二人とも怪我なんかせずに済んで本当に良かったですわ。」

と、僕も改めて人心地が付いた。

突然、誠さんが徐ろに居住まいを正して翔と正面から向かい合った。目付きを鋭く尖らせてまるで鬼のような形相で彼の息子を睨みつけている。その雰囲気は、蛇に睨まれた蛙の如く萎縮している翔は固より、傍にいた他の子供達だけでなく大人の僕まで怖気づく程強烈な物だった。

「なあ……。翔。」

地の底から轟くように低く静かに怒りに震えた声で、泣きつ面
助けを請うように此方の方に視線を向けながらガクブルと震えてい
る翔に誠さんは語り掛けた。

「昨日お父さんと約束したばかりだよな？危ないからもう二度と手
放してジャングルジムの一番上に立たないって……。」

「ご……ごめんなさい……。」

「ごめんなさいで済むか！翔……。お前なあ、下手をすれば桜ちゃ
んにまで大怪我をする所だったんだぞ！」

そう怒鳴ると、誠さんはゆっくりと右腕を顔の所まで上げ、バシ
ッ！と小気味良い音を立てながら翔の左の頬をビンタした。

あまりの誠さんの気迫にその場に居た全員が圧倒されて言葉を失
う中、みるみるうちに翔の頬が赤く腫れていき、

「うえ——ん！うえ——ん！」

と痛さに耐えられずに阿鼻叫喚する翔の声だけが部屋中に響いてい
た。

ふと気付くと、誠さんがまた右手を口元に持ってきて来て、

「はあ……。」

と暖かい息を吹き掛けるのが見えたので、僕は慌てて誠さんに縋り
付いた。

「誠さん、いいです！もういいです！止めましょう！こんな事は！」

「しかし……、とてもじゃないが今回の事は洒落で済みませんよ。
今ここできつく言いつけて置かないと……。」

誠さんは渋る様に僕と桜の様子を見つめていたが、僕は構わず囁
みついた。

「もう宜しいじゃありませんか。幸いにも桜も翔君も怪我をせずに
済んだのですから……。これ以上手を上げたら虐待にもなりかねま
せんわ！」

誠さんは悩むように目を瞑って両腕を組んでいたが、やがて頷い

て臉を上げると、じつと翔の顔を見据えてこう言った。

「わかった。……翔、お前も今回の事でああ云う遊びが危ないという事がよく身に染みただろう。だから、もうああ云う事をするんじゃないぞ。」

そうして、そのままその場を立ち上がると、

「じゃあ、お父さん、向こうに戻るから、二人とも薫叔母さん云う事をよく聞いて良い子にしているんだぞ。それと、夕御飯になったらちゃんと来る事。わかったな。」

と言に残して応接間から出て行った。

小一時間後、

「子供達——！御飯だよ——！もうこっちに来なさい！」

と威勢良く叫びながら葵姉ちゃんの声が応接間の中まで聞こえて来た。

その途端、

「わーい！すき焼きだ——！」

「すき焼き！すき焼き！」

と叫びながら棗と翔が盆踊りの様に小さな円を描きながら踊り始めた。何故か桜まで、

「すきやき？すきやき？」

と小首を傾げながらその輪に参加していたが……。

踊り続ける二人に僕はこう尋ねた。

「ねえ、ソーちゃん、ショーちゃん。どうして今夜の晩御飯がすき焼きだって判るの？」

すると棗は、僕の顔を見上げて満面の笑みを浮かべると、こう言った。

「あのね……。お祖母ちゃんや曾お祖母ちゃんがね。みんなが揃った日には夕御飯にすき焼きにしようってね、言っていたの！」

成程ね……。と、僕は納得した。確かに祖母や伯母がやりそうな

事ではある。甘たらしい味付けになつてしまうのであまり作る機会が無い所為か、ここ数年すき焼きと云う物を食べていないし、最後に祖母が作るすき焼きを食べたのは10年近く前の事なので、久しぶりだなあ、と童心に返つたように内心わくわくと期待しつつ、呼びに来た葵姉さんと共にそれぞれのオチビ達を抱き上げると、スタスタと走りだした棗を先頭に僕等は離れから母屋の方へ移動した。

母屋の方、台所の前の廊下を突き当たつた所、洗濯機の傍にある洗面所で子供達に嗽と手洗いをさせると、僕達は居間の源氏襖を開けて中を覗き込んだ。

「あれ?! すき焼きじゃない!」

「すき焼き違う——!」

「違う——!」

部屋の中に入るや否や、ベソをかいた子供達の悲痛な叫び声が部屋中に虚しく轟いた。

机の上をよく見ると、確かにそこには携帯用のガスコンロもカセットボンベもすき焼きが入った黒光りした鉄鍋の姿など影も形もなく、代わりに50cm位の大きさの白木造りの舟形の器に盛り付けられた色とりどりの海鮮刺身の舟盛りが、御飯茶碗や取皿に囲まれながら机の中央に鎮座していた。

まあ、すき焼きでは無いのは少しだけ残念だったが、これだつて今日の為に馴染みの寿司屋とか魚屋に頼んで1万以上掛けて造らせて持つて来させたのだらう。豪勢な事には変りない。そう思う僕の足元で、棗と翔はまだぶつぶつ文句を口にしていた。

「あ——ん! お祖母ちゃん達の嘘つき——! みんなが揃つたらすき焼きだつて言つていたのに——!」

「言つていたのに——!」

「確かにそう言つたけれど、まだみんなが揃っていないから、すき焼きは明日の晩御飯にね。……それに、このお魚もその海で取れたばかりの、新鮮で美味しい魚なんだよ。」

そう言った祖母の言葉がふと引つ掛かった僕は、机の玄関側の一番襖に近い場所、葵姉ちゃんの右側に腰を下ろしつつ思わず聞き返してしまった。

「あら、お祖母ちゃん。まだ他に誰か来るの？」

僕の記憶が確かなら、祖父の兄妹やその子供達はこの家に寄る予定等無かった筈だし、ウチの両親と弟は元より、従妹の蘭ちゃんは大学の友人たちと海外旅行へ行ったらしいし、董ちゃんが帰って来るとも聞いてはいない。今回は今この場に居る者達で全員だろう、僕もそう考えていたから、祖母の言葉を聞いて不思議に思ったのだ。祖母の代わりに祖母の右隣りにいた祖父が代わりに答えた。

「董が明日こつちに来る予定じゃけん。董達が来たら、全員集合じやなあ。」

「へー、董ちゃんもこつちに来るの？久しぶりよね……。この前会った時がこの娘が産まれた時だから1年9ヶ月ぶりになるのかしら。

……って、達？」

祖父のいう意味が理解できず、またしても僕は尋ね返した。

「一緒になりたい男が居るから一緒に連れて帰るんだと。」

「へー、董ちゃんに彼氏がねえ……。ふ——ん。」

何処と無く苦虫を潰したような歯切れの悪い祖父の喋り方が少しだけ気になったものの、それ以上に生まれた頃から知っている小さな従妹が、結婚を決めた彼氏を持つまでになった事に、僕は少し年寄り臭い感慨に耽ってしまった。

だが良く考えてみれば、董ちゃんは僕の弟の孝と同年の25歳である。その年頃に既に僕は和樹と、葵姉ちゃんは誠さんと結婚生活を初めて数年を経過していた事を考えると、特にたいした事でもない事に思えてきた。寧ろ後2年もしない内に自分が三十路に突入する事実気付いてしまった事の方が地味にシヨックだった。

そんな事を考えていると、今度は祖父が僕に質問を投げ掛けてき

た。

「そう言えば、薫。孝君には……、こういう浮いた話は無いのかねえ？」

「さあ……。わたしもあの子とはもう随分長く連絡も取っていないし、会ってもいないから判りませんわ。お父さんとお母さんから孝にそういう人がいる、という話を聞かないし……。多分、あの子の性格からして、まだ結婚とかそう云うのは考えてはいないのではないかしら……。」

「そうか……。薫にこんな話が持ち上がったから孝君にもこういう話があったらなあ、と思ったんじゃが……。流石に都合良くそういう訳には行かないかのう。」

その時、新館の方の上がり框の付近、丁度祖父の部屋の前に置かれた電話台の上にある白い複合式電話機が、着信が来た事を告げる電子ベルをプルルルル、プルルルル……と鳴らし続ける音が此方まで響いて来た。

祖父は立ち上がると、電話に出る為に居間から出て行った。やがて、電話の着信音が途絶え、祖父の話し声だけが向こうから淡々と聞こえてくるだけになった。

「はい、もしもし綾小路です。……おや？薫ちゃん。……」

うん。……うん。……そうか、そうか。……

うん、わかった。気を付けて帰って来るんだよ……。」

どうやら電話の相手は薫ちゃんのようなのだな。そんな推測をしながら、膝の上にそっと座らせた桜に食べさせながら刺身を箸で突いていると、葵姉ちゃんの左隣にいる和樹の真向かいに座った伯父が、硝子が曇った一升瓶を手で翳しつつ、葵姉ちゃんを飛ばして僕に話し掛けてきた。

「薫ちゃん、お父さんもお酒が好きな人だから、多分いけるでしょう？どう？一杯。」

「はあ……。」

僕自身は他の女性陣とは違って一応飲める口ではあるものの、殆ど酒を嗜まない上に、桜という小さな子供が居る手前、出来れば遠慮したかった。しかしながら久々に互いに顔を見合わせて盛り上がっているのに、伯父達の酌を断る事で場の雰囲気面白くさせるというのも気が引けた。

「じゃあ、それなら1杯だけ……。」

僕は箸を置いて机の上空へ両腕を伸ばして伯父の方へ手を差し出すと、彼から水のように透明な清酒がなみなみと注がれた硝子のコップを恭しく受け取った。

特級品の美味しい酒だと誠さんが言っていたのを思い出し、どんな物だろうか、と思いながら僕はそれに一口だけ口を付けた。その瞬間口腔内にピリピリとした辛味ともジワツとくる渋い苦味とも、何とも言えない酒独特の味と香りが充満していくのを感じて、不覚にも僕はグラスを机の上に置いて源氏禊の方へ顔を背けると、他の人に判らないように少しだけしかめ面をした。

確かに良い酒だ。酒米特有の風味をしつかりと閉じ込めた辛味が芳ばしい上等な清酒である。酒好きには堪らない一品に違いない。

そうだけれども、やはり自分には合わないように僕には感じた。大学に通っていた時、何かのイベントの健康診断で受けたアルコールパッチテストの結果によると、体質的には『飲み過ぎによるアルコール依存症や他の生活習慣病を発症する可能性が高い』と指摘される位アルコール分解酵素の活性が高いALDH2活性型であると診断されたが、飲める口だと生物学的にお墨付きを貰っても、どうしても清酒やワインのような発酵酒の味を好きになれない。ただ、ウイスキーやブランデーのようなより芳香の強い軽めの蒸留酒ならストレートで相当量を一気に飲みする事が出来るから、やはりあの色々中途半端な所が嫌いなのだと思う。

電話を終えて戻ってきた祖父も交えて盛んに交わされる身内同士の喧騒に耳を澄ましつつ明後日の方を向いてこんな事を考えていると、視界の端で小さな手がふっと酒の入ったコップへ伸びて行くの

を捕えたので、僕は急に現実に取り戻された。

手元を見ると、何と桜が興味津々に見つめながらグラスを両手で抱えているではないか！

「あっ！桜！何しているの？！止めなさい！」

慌てて桜の手からお酒を引き剥がそうと手を伸ばしたが、僅差で桜が文字通りコップに口を付ける方が早かった。

「はむっ！………？……あれっ、苦い？！苦いよ——。ママ、ママ——！え——ん、え——ん！」

「だから止めなさい、って言ったでしょう……。ほうら、よしよし……。」

涙目になって胸に抱き着いて来た我が子の背中を摩って落ち着かせていると、祖父が中腰で立ち上がり、慌てたような調子で僕に声を掛けた。

「おやおや、桜ちゃん。急に泣き出してどうしたね？」

「ちよつと目を離れた隙にわたしのお酒を飲んでしまつて……。」

「あらそりゃあ薫。お前さんが悪いがね。母親なら子供から目を離さんようにせんといかんが……。それで、どの位飲んでしまったかね？」

「ほんのちよびつとだけ……。軽く舌に触れた程度だから大丈夫だとは思うのだけれど……。」

「お前さんに取ってほんのちよつとでも、こんな2つに満たない娘がアルコールを摂ったというだけで大事じゃけんね……。母さん、ちよつと水を桜ちゃんに持って来てくれんかね？」

僕はいくら小さな子供とは云え、この程度の量なら然程問題にする必要もないだろうと考えたのだが、祖父は祖母に頼んでコップ1個と2L入りのミネラルウォーターのペットボトルを持って来させると、体内のアルコール濃度を少しでも薄める為に何杯も桜の口に含ませた。

その様子を何も出来ずに手を拱きながら、ここ最近やっと一人の

子供の母親として板に付いてきたと思い始めていただけに、まだまだ至らない事が多々あった事を思い知らされて僕は少なからずショックを受けた。

まだまだ勉強しなければいけない。しみじみそう思った。

食事を終え、祖母と伯母を手伝う形で葵姉ちゃんと二人で運ばれて来る食器を洗って片付けている時、葵姉ちゃんが僕にこう言った。「オーちゃん、落ち着いた?」

「ええ、もう大丈夫だと思うわ。ごめんね、お姉ちゃん。何か場を白けさせてしまつて……。」

「気にしないでいいわよ。それよりわたしの方こそごめんね。お父さんがクーちゃんにお酒を勧めちゃつて……。後で注意しておくから……。」

思いの外、お姉ちゃんの様子が思いつめているように苦しいような物に感じたので、僕は慌てて首を振った。

「そんな事ないわ、お姉ちゃん! わたしだって桜がこう云う事をするかもしれないって思いもせずにお酌を受けたのだもの……。お姉ちゃんが気に病む必要は全然ないわ!」

その時、突然左手にある廊下の出入口から、

「お母さん!」

と呼ぶ小さな女の子の声が聞こえて来たので、僕とお姉ちゃんは揃って洗い物の手を止めて声がした方へ振り返った。

そこには、子供用の小さな皿とお茶碗とピンク色のプラスチックのキャラクター物の箸を重ねて両手で抱えた棗ちゃんが、台所の床より30cm程高い所にある廊下に立ち、僕等の方を急かすような瞳をして見つめていた。

「お母さん、お皿!」

「はいはい、ちょっと待ってね!」

そう言つてエプロンの裾で手を拭いつつ、僕の背後を通り抜けな

がら出入口まで行つて、彼女の娘の手から食器を受け取ると、葵姉ちゃんはシンクの傍、丁度僕の後ろの方にあるダイニングテーブルの上に、他の食器類と共に棗ちゃんが使っていた物を置いた。

その様子を見て感嘆したあまり、僕は葵姉ちゃんに声を掛けた。

「あら、棗ちゃん偉いわね。ちゃんと自分の使ったお皿を片付けに持つて来るなんて。」

「そうかしら？別にそんな事はないと思うけれど……。」

そう口にしつつも、葵姉ちゃんは何処か誇らしげに見えた。

「そうかもしれないけれど、やっぱり自分に出来る事は自分から進んで手伝おうとする事が出来るのは立派だと思つて。」

と、将来桜もああいう良い子に育ってくれたらいいなあ、と願いながら僕も相槌を打った。

片付けを終え、最初の祖父から順番に親族が入れ替り立ち替りする中、僕も桜と一緒に離れにある風呂に入った。

自分の身体や髪も洗いつつ桜のそれも綺麗に洗い流してやり、桜を膝元に引き寄せて湯船にどっかりと浸かる。

ふと、目の前を見上げると、液晶パネルが付いた風呂のコントローラーの上に設けられた棚の上に、スポンジやブラシと並んで、小型ボートの形をした黄色い水温計や水色の幼児用の拳銃型の水鉄砲が置いてあるのに目が付いた。

小さい頃にそれで遊んだ覚えもある、懐かしい水遊び用の玩具だった。が、何処か違和感を覚えた。妙に綺麗なのだ。少なくとも僕の記憶の範疇では、10年以上前の時点で何方も黴や錆や埃に塗れて灰色に変色し、この棚の上で放置されていた筈である。誰かが掃除をしたのだろうか？今や両方共、まるで新品同様であるかのように光を反射してピカピカに煌めいていた。

ふと目線を下げると、胸に抱いた桜も同じ様に棚の上を魅入られるようにじっと見つめていた。

そして、急に僕の方へ振り向くと開口一番こうせがんだ。

「ねえ、ママ。あのお船、取って！取って！」

「はいはい。」

僕は左の腕で押さえ付けるように桜を抱いて立ち上がると、棚に右手を伸ばして温度計を彼女に手渡し、再び腰を落ち着けた。

桜は黄色の船を受け取ると、

「出発しま——す。ブ——ン……。」

と口遊びながら、バシャバシャと水飛沫を上げて船を航行させ始めた。

暫くそうして遊ばせた後、湯だつてきたのと後の人が待っているだろうと思つたのとで、僕は娘の両脇に手を掛けるとすくつと持ち上げた。

すると、桜はブンブンツと頭を横に振つてささやかな抵抗をした。

「やーよ！やーよ！まだ遊ぶ——！」

「我俣を言わないの。パパや誠伯父さんとか、まだ入らずにお風呂を待っている人もいるし、明日もここのお風呂に入つてお船で遊べるのだから、今日は我慢しなさい。ほら、上がるわよ。」

「む————！」

不満そうに口を尖らせる桜から水温計を取り上げて元の位置に戻すと、湯船の蓋を閉め、彼女の手を引くように僕は風呂場から脱衣所の方へ出て行つた。

新館の方のダイニングキッチンのすぐ隣にある、トイレの角の所にある6畳間に、寝間着に着替えた僕と桜は、同じ様に寝る準備をしていた祖父母、伯母、葵姉ちゃんとその二人の子供達と共に、テレビとエアコンが点いた部屋で、部屋の真中に鎮座した遠赤外線ランプが掛布団の中で赤く輝く電気炬燵に包まれていた。

障子と炬燵の間の空間に、膝の上に頭を乗せる様に桜を仰向きに寝かせ、手に持った可愛いピンク色の小さな歯ブラシの穂先を

彼女の口元へ近付けた。

「はい、桜。あーん！」

「あ——ん！」

これでもかと大きく口を開けた桜の口内に歯ブラシのヘッドを突っ込み、歯肉を傷つけない様に注意しつつ、細かく擦るようにシヤカシヤカと娘の歯を磨いていく。何気なく顔を上げて向こう側、硝子障子とその傍にある掛軸が掛かった床の間の近くに目を向けると、葵姉ちゃんも棗を膝枕しながら歯磨きをさせているのが見えた。

一足先に歯磨きを終わると、僕は桜を連れて部屋を出て隣の台所にある洗面所の方へ向かった。

「はい、桜。ブクブクして。」

桜が口の中を漱いで水を吐き出すと、傍にあつた洗顔用のタオルで軽く口元を拭ってやり、トイレに行かせて用を足させ、また洗面所で手を洗わせる。そして、また炬燵の部屋に戻る前に、

「ねえ、ママ。寝る前に、絵本、読んで！読んで！」

と、娘に強請られるまま、トイレの傍の廊下の角の近く、応接間の反対側に置いてある本棚の中から適当に絵本を1冊選んで部屋の中に戻った。

絵本を読み始めた頃は辛うじて目が覚めていたみたいだが、生まれて初めて電車や新幹線、特急電車に乗って長距離を移動したり、田舎の家に来て目一杯遊んだりして流石に疲れが溜まって来ていたのだろう。読み進める度にだんだんと瞼が閉じるタイミングが狭まって行き、読み聞かせを終わる頃には、

「すぴ——。」

と寝息を立て、コテツと倒れ込むと僕の乳房に頭を擦り付ける様に船を漕ぎ始めた。

「あら、桜ちゃん。もう眠ってしまったかね？」

「ええ、だから上の部屋へ桜を寝かし付けてくるわ。」

その祖母と僕の遣り取りが契機になったのだろうか、それとも葵姉ちゃんも、

「はい、今日のお話はここまで。ほら、もう夜も遅いからあなた達も寝なさい。」

「え———！」

「まだ眠くない———！」

「寝なさい！」

と、子供達を床に就くように促し始めたからだだろうか、

「じゃあ、もうそろそろ寝ましょうか……。」

その場にいた全員がそれぞれの寝間に向かう為に腰を上げ、テレビとエアコンと炬燵の電源を切り、部屋の蛍光灯の紐を引っ張って真つ暗闇にすると、三三五五に散じて行つた。

離れの玄関付近で母屋の方へ引き上げて行く祖父母と伯母と別れた後、桜をお姫様抱っこするように抱き抱えた僕は葵姉ちゃん達と共に回れ右をすると、廊下の右側、祖父の部屋の前から真つ直ぐ上方へ伸びている真つ暗な階段を離れの2階に向かつて上り始めた。

2階へ上がるとそのまま階段から続く廊下が5m程行つた所で行き止まりになつており、その両側にそれぞれ2枚組の紙障子で仕切られた8畳間と6畳間の和室があり、事前の取り決めでは、広い方の左側の部屋を葵姉ちゃんの一家が、もう片方の6畳間を僕の家族が使う事になつていた。

「それじゃあ、クーちゃんもオーちゃんもお休みなさい。」

「お姉ちゃんも、ソーちゃんとショーちゃんもお休みなさい。また明日。」

「おやすみなさ———い！」

夜中なのに未だに元気な声を上げる二人の子供の背中 hands 当てながら障子の向こうへ去つて行つた葵姉ちゃんの背中を見送ると、僕も障子を開けて6畳間の中に入った。

電気を点けて部屋を明るく照らすと、部屋の真ん中に風呂に入る前に用意した、薄水色のカバーが付いた枕と青い掛布団がある布団と、それと対になるように薄桃色のカバーの枕と赤い掛布団の布団という、まるで夫婦のように横に並んだ2組の布団が、障子に平行になるように敷かれているのが見える。僕は手前の方にある赤い方の布団の傍にしゃがみ込むと、掛け布団を捲って桜を仰向けになるように寝かした。

そして、電灯を消してから自分もその布団に潜り込み、部屋に入ってくる何かから桜を守るように部屋の入り口から背を向け、南側に頭を向けて横になった。

暗闇の中、幽かではあるが万歳をするように枕に向かって両腕を伸ばし、口元に薄っすらと涎を光らせている、桜の無防備な寝顔が僕の視界いっぱいに入ってくる。

僕は自分のパジャマの裾で娘の口元に付着した唾液を拭い、彼女の頭を優しくそっと撫でると、

「おやすみ、桜。」

と我が子に向かって呟きながら目を閉じた。

第十話：董ちゃん達の合流

>> 薫

朝になった。

とは言っても、早朝の5時半だから僕の胸の谷間に顔を埋めている桜も、左隣で布団に包まっている和樹もまだ寝息を立てている。

僕は桜を起こさないように気を付けながら布団から這い出ると枕元に置いた銀縁の眼鏡を掛け、娘を仰向けにして布団を掛け直してやり、パジャマを脱いで黒いパンストと青いカシミアのロングスカートを穿き、茶色い皮のベルトを締めて深緑色の長袖の綿のタートルネックを着、淡黄色のニットのガーディガンを羽織ると足音を立てないように障子を開けて部屋の外へ出た。

廊下へ出ると、向かいの部屋から出てきた葵姉ちゃんとバツタリと出会った。彼女も既に普段着に着替えていた。

「お姉ちゃん、お早う。」

「お早う。クーちゃん。」

部屋でまだ寝ている人間を起こさないように小声で互いに挨拶を交わすと、僕と葵姉ちゃんの順で縦に並びながら階段を降りる。

「クーちゃんって、こんな朝早く起きるようになったのね。」

「お姉ちゃんこそ……。でも、主婦業を何年もやっていたら、流石に嫌でもこの時間に目が覚めるわ。」

「まあねえ……。」

「だけど……、上には上がいるのよねえ……。」

離れから簀子を渡って本館の上がり框の黒ずんだ杉の板を足で踏んだ折に、僕は上がり框の右側にあるガラス戸から、何やら水音や包丁がトントンとまな板に当たる音が聞こえて来る台所の方をちらりと覗き込んだ。

一度部屋の中を廊下の方へ回り込んで、台所に入ると、既に祖母

と伯母が並んでシンクで朝食の準備をしているのが目に入った。

「お早うございます。」

と、入る間際僕と葵姉ちゃんは揃って彼女等に挨拶し、台所のダイニングテーブルに6脚ある椅子の、向かって右手前の1脚の背凭れに掛けられた薄青色と薄桃色のエプロンをそれぞれ手に取ると、素早くそれを身に付けて手を洗い、そのまま朝食の調理に加わった。

祖母と伯母の指示に従う形で御飯や具沢山の味噌汁を作って器に盛り付けると、僕と葵姉ちゃんは夫や娘達を起こす為に離れに引き返した。

障子を開けて部屋の中に入り、娘の寝顔の傍に座り込んで二人に声を掛けた。

「あなた、桜。起きて下さい。御飯ですよ。」

「……ん……。ああ……。お早う。」

と、寝返りを打って俯せになり、腕立て伏せをするように手で布団を押し付けながらのっそりと和樹が起き上がった。

「お早うございます、あなた。トランクの中に着替えが入っているから適当に着替えて下さい。」

そう夫に促しつつ、僕は桜の身体を軽く揺すった。

「ほら、桜も。もう起きなさい。」

「うにゅ……。ん……。！」

桜は万歳をするように両手を挙げると、僕の太腿の上に頭を乗り上げるように寝返りを打ってきた。

「こらこら、いい加減にしなさい……。！」

呆れながらも僕は娘の身体を胸元に抱き抱えた。

和樹や葵姉ちゃん達と一緒に桜を抱いて離れから母屋の居間へ移動し、朝食を摂っている時、思い出したかのようにいきなり祖父が口を開いた。

「え——と、皆も知っている通り、今日は董達がこの家にやつ

て来ます。」

「……………」

「それで、誠君……………」

「はい？」

「12時25分に到着するようだから。お願い出来かね？」

「車ですか？」

祖父は、そうだ、と言わんばかりに誠さんの方を向いて深く頷いた。

「構いませんよ。」

「じゃあ、わたしも一緒に付いて行くわ。」

と、誠さんが同意する声に重なるように葵姉ちゃんも口を挟んだ。

「そうか……。それじゃあ、12時10分位に葵達に空港へ行つて貰つて、皆が帰つて来てからお昼にするとしましょうか……。ねえ？母さん。」

祖父が声を掛けると、祖母はニコニコと笑いながら、

「そうですねえ、そうしましょうか。」

と答えた。

朝食が終わつて片付けて、桜を薄桃色のパジャマから綿製で水色の長袖のタートルネックと白色のスカートに着替えさせて淡黄色のソックスを履かせると、僕は娘を連れて離れの2階の部屋から階段を下りて応接間まで行き、2人の子供達が遊ぶ様子を見ていた誠さんと並んで二人掛けのソファに座り、スティーブン・キングの文庫本を読んでいた和樹の膝の上に娘を座らせた。

予告なしにいきなり乗せたので、相当驚いたのだろう。

「……………？！ちよつ！おま……………！いきなり何するんだよ？」

と、和樹は酷く狼狽しながらも僕の顔を睨みつけた。

「何するんだよ？ではありませんわ。あなたも父親なのだから、誠さんを見習つてたまには桜の面倒を見てくれないかしら？」

「え————つ……………」

和樹は渋るような声を出して顔を顰めた。

「そんな事を仰らないで。わたしが向こうで家事を手伝っている一
時だけで構いませんから……。桜だってたまにはパパと一緒に遊び
たいわよね？」

「……………にゅ？」

状況がよく理解出来ていないのか、首を傾げて僕を見上げつつ僕の
顔を見上げ、ちょこんと座る桜を夫に押し付けて僕は応接間を後
にした。

2階に登って桜と僕と和樹のパジャマを回収すると、僕は下に降
りて母屋の方へ移動し、全自動洗濯機の前に立って操作しようとし
ていた葵姉ちゃんの傍に積まれた洗濯待ちの衣服の山の上にドカッ
と置いた。

「お姉ちゃん、これも一緒をお願いしても良いかしら？」

「あ、うん！いいよ！一緒に洗っておくから置いといて！」

そして洗濯機が洗濯を終えるまでの間に、子守をしている男達以
外、祖父母、伯父伯母、葵姉ちゃんと僕で手分けして家の中を掃除
する。

請け負った他の場所の掃除を済ませ、掃除機を持って葵姉ちゃん
と応接間の中に入ると、部屋の中に居た全員が僕とお姉ちゃんの方
へ振り向いた。

「あ、お母さんだ！」

「お母さんだ！」

「ママ——！」

「お母さん遊ぼ！」

「ママ、抱っこ——！」

「駄目だよ、シヨーちゃん、オーちゃん。お母さん達は今お掃除を
している最中だから、お手伝いしても邪魔しちゃう駄目。」

流石棗ちゃん、一番年上なだけはある。それぞれの母親の足元に

ヨチヨチと纏わり付こうとするチビ二人をお姉ちゃんらしく諫めると、そのまま床にしゃがんで足元に散らばっている玩具を片付け始めた。おチビ達二人もそんなお姉ちゃんの姿に感化されたのか、見よう見まねで遊具を掻き集めている。感心、感心。

次に驚いたのは、

「手伝おうか。」

と言いながら唐突に誠さんが立ち上がり、戸棚や書棚の上に置いてある物を適当に持ち上げ、はたきを片手に煤を払っていた葵姉ちゃんを大変上手く補助していた事だった。きっと普段から積極的に家事に手を貸しているのだろう。本当に二人の息がぴったりだった。

それに比べて愕然としたのは、同じ部屋の中にいる他の面々が立って何らかの形で掃除に携わっているにも関わらず、ソファから一歩でも動くどころか立ち上がろうとする素振りすら見せず、下らない小説を平然と読み続けていた和樹の姿をまざまざと見せつけられた事だった。皆が動いているのに一人だけ寛いでいるなよ。手伝う気は無くても空気を読んで、せめて立ち上がって手伝っている振り位はしろ。頼むから親戚の手前、僕に恥を掻かせるな！

僕は夫のこんな姿を酷く恥ずかしく思った。

掃除を終えて家の仕事が一段落すると、祖母が茶や茶菓子を置いて運ぶ盆を用意しながら、

「そろそろお茶の時間にしましょうか……。」

と口にした。すると、

「賛成！」

と葵姉ちゃんが賛同し、

「それじゃあ皆を呼びに行きましょう。」

と伯母も同調したので、

「それでは、わたし、応接間に行って主人や子供達を呼んできますわ。」

と、僕も離れのキッチンを出て応接間の方へ廊下を真っ直ぐ歩き出

した。

田舎ではよくある事だろうと思うが、この家では朝食と昼食の間、仕事が一区切り着いた午前10時から11時位の時間帯にも、午後と同じ様に間食の時間を設け、茶菓子を手にお茶を楽しむという習慣があつた。

僕は応接間の引き戸に手を掛けると部屋の中の人間に向かってこう呼び掛けた。

「あなた！誠さん！それと子供達！そろそろお茶の時間にしますから此方に来て下さい。」

「はい！わかりました——！」

「やほーい！」

「あれれ？もう、おやつ？」

既に勝手が知れている上の二人と異なり、勝手が判らない上に普段は3時のおやつしか与えられていない桜は、朝方にもお茶の時間をするという聞いて怪訝そうに僕の顔を見上げていた。

応接間の向かいの、廊下の角にある六畳間の炬燵の所に皆が集合すると、祖母が番茶の入った湯呑み茶碗と和菓子を配り、お茶の時間が始まった。

炬燵蒲団に半分潜り込み、正座をした僕の太腿の上で三角座りをし、爛々と目を輝かせて机上の菓子を桜は見つめているが、時折思い出したかのように後ろを振り向いて僕の顔を上目遣いで見上げた。やれやれ、別に勝手に取って食べても叱りつけたりはしないのに……、と思つて、

「食べていいわよ。」

と、苦笑を漏らしつつ僕が声を掛けると、ぱあつと明るい笑顔になり、丁度手の届く範疇にあつた目の前の若鮎を引っ掴み、桜はそれを僕にグイッと無言で差し出した。別にそれを僕に食べさせようと

している訳ではない。自分の力ではビニールの袋が上手く開けられなくてこのままだと食べられないから、母親である僕にビニール袋から魚型の菓子を取り出させて食べさせて貰おうという魂胆なのである。

僕は、

「はいはい。」

と言いながら娘から若鮎の入った透明な袋を受け取って切り破ると中に入っている和菓子をとり出した。そして、どら焼きと同じ様な生地の中にモチモチとした白い牛皮が包まれているので、頬張った桜が誤って喉を詰まらせる事が無いようにそれを一口大に千切ると愛娘の口内へ一つずつ放り込んだ。そして、はむはむと頬張って満面の笑みを浮かべた桜の顔を観ている内に思わず僕の方も笑みが溢れてしまった。

午前のお茶を済ませて暫く経ち、そろそろお昼にしようかと台所で祖母や伯母と共に昼食の狐鰐鮓を器に盛り付けていた頃、董ちゃん達を出雲空港まで迎えに行く為に車で出掛けた葵姉ちゃんと誠さんが戻って来た。

僕や葵姉ちゃんと違い、董ちゃんは女学院へ行かされる事も無くまた蘭ちゃんと異なり自ら女子高へ行こうと志願もせず、小学校から大学までずっと男女共学の環境で過ごして来て、職場も男女半々の所に就職したようだから、それこそ若い（今もまだ25歳の若さだが）頃から何人も異性交遊をして彼女なりに様々な経験を積んできたらしい。お陰で長期休暇の度に頻繁に此方へ帰郷していた頃は毎度毎度恋人との惚気話や愚痴を聞かされたものだった。だから、その彼女が一体どんな殿方を生涯の伴侶として選択したのか、少なからず興味が有ったので、僕も伯母達と共に玄関まで出迎えた。

玄関の硝子戸がガラガラと騒々しい音を立てて開くと、どうい

訳か妙に気まずそうな顔をした葵姉ちゃんと誠さんに続いて、ジーンズ生地 of 長ズボンに濁った青と白の少し幅の広い横縞のストライプのモツコリとした分厚いウールのタートルネックのようなセーターを着て、明るいマゼンダ色で襟のフードの所にキツネ色のファーが付いたダウンジャケットを羽織り、肩まである長いストレートヘアーを頭の後ろで団子を作るように結んだ董ちゃんが家の中へ入って来た。

「ただ今戻りました。」

「おお、誠君も葵も御苦労様。」

「お姉ちゃん、誠さん、おかえりなさい。それとお久しぶりね、董ちゃん。」

「こんにちは。お祖父ちゃんから話は聞いていたけど董ちゃん達も来ていたんだね。」

等と話していると、

「お邪魔します。」

と言うバリトンが良く効いた静穏とした声と共に、また引き戸が開いて見知らぬ男性が僕等の前に現れた。恐らく董の婚約者という男性だろうと容易に推測出来たが、その風貌に僕は思わず息を呑んで凝視してしまった。

身長は僕より頭一つ分高い位には見受けられたから170後半そこそこといったところだろうか……。如何にも鍛えていますと言わんばかりにしっかりと筋肉が付いたがっしりとした体格に、少し灰色掛かった落ち着いた感じの洒落たスーツの下にしっかりとアイロンが掛けられた白いワイシャツを着て、少し面長で日に焼けて若干褐色掛かった、頬から顎にかけてよく手入れのされた形の良い髭まで蓄えた雄々しい面構えをした精悍な男性だ。元男の僕ですら、見た瞬間格好良いと思って旦那と天秤に掛けかけた程だから、董ちゃんがぞっこんになるのも無理はなかるうとは思えた。ただ、外見上からしてどう頑張っても35歳以下に見えないのが非常に気になった。

僕はまだいいが、問題は葵姉ちゃんと誠さん達だろう。自分達の妹の婿になるかも知れない人……つまり義弟になってこれから長い時間を付き合う事になるであろう人が自分達よりも10歳近く年上だなんて、正直言つて困惑ものだろう。僕はどうして彼女等がんな腑に落ちない表情をしていたのか理由を察すると共に、僕自身も董ちゃんの彼氏を見て、どういつ応対をすれば良かるうか、と内心苦慮していた。

そんな僕達、と言つても僕と葵姉ちゃんとは誠さんだけであるが……、の戸惑いを余所にその男性はきつちりと45度付近まで背中を曲げた姿勢が良く丁寧なお辞儀をすると、框の上に僕と一緒に立っている伯父と伯母に向かつて静かに口を開いた。

「はじめまして。私、お嬢さんと結婚を前提としたお付き合いをさせて頂いている斉藤 由伸と申します。」

そして斉藤さんはスーツの裾から黒っぽい色をした革製の名刺入れを取り出すと、中から白い紙片を2枚出して祖父と伯父に差し出した。

その時、突如離れの方からトトトと子供が廊下を走る足音のよな音が聞こえたと思ったら、

「ママ——！ママ——！どこ——？」

と母親を探して歩く桜の鳴き声が聞こえて来て、思わず僕は動揺した。

そうして目の前に立っている相手に対して失礼である事を承知して、

「すみません。子供が呼んでいますので、席を外させて頂きます。」と詫びを述べてそそくさとその場を離れると、僕は一直線に娘の所へ小走りで駆けつけた。

母屋と離れを結ぶ簀子から離れの上がり框へ上がったすぐの所で、桜は不安げな表情をしながら呆然と立ち尽くすように僕の顔を黙って見つめていた。

「どうしたの？」

と僕が訊ねると、彼女は今にも泣きそうな顔をし、必死に何かを伝えるような感じでこう捲し立てた。

「ママ。あのね……、あのね……、桜ね。シーシー（おしっこの事）、行きたいの。」

「はいはい。わかったわ。今連れて行つて上げるからね。」

「ママ、早く、早く——！漏れちゃう——！」

僕は桜を持ち上げて胸に抱くと、トイレに向かって歩き出した。

おむつパンツを脱がした桜を便座の上に座らせて用を済ませると、トイレを出てから僕は彼女を離れのキッチンへ連れて行き、腰を持つて娘の背中を自分の乳房に押し当てるように抱き上げながら併設してある洗面所で手を洗わせた。

そして、お昼を食べる為に桜を抱いて廊下を移動する途中、応接間に入ろうとした時、本館の方から此方に向かって来た葵姉ちゃんと遭遇した。どうやら彼女も自分の子供達を母屋の方へ連れて来ようと思っていたようであつた。

「ごめんね、お姉ちゃん。大丈夫だった？」

僕は出来るだけ低く声を潜めると、母屋の様子について葵姉ちゃんに問い掛けた。

すると葵姉ちゃんはクスリと微笑んだ。

「そこまで心配しなくても大丈夫よ。公の席じゃないんだから。それにお母さんなら子供が呼んでいたら一番に駆けつけたくなるのは仕方がない事だし。それに斉藤さんという人も子供好きみたいで、そう云う事にも理解がある良い方みたいだし……。」

「そう……。それなら良かったわ……。」

そう聞いて僕は少し安堵した。

「ところで。」

「何？お姉ちゃん。」

「桜ちゃんのトイレは大丈夫だったの？」

「……………！」

大げさかも知れないが、僕は心臓が飛び上がりそうな程驚いた。
「此方まで丸聞こえだったもの。……棗！翔！そろそろお昼ご飯にするからお母さんの所へいらっしやい！」

よく考えたら葵姉ちゃんや斉藤さん達が立っていた母屋の玄関の所の三和土と桜が立っていた離れの入り口は直線距離で10mもない滅茶苦茶近い場所にある。聞こえないと思う方がどうかしているだろう。不覚にも顔を赤らめた僕に向かってにつこりと囁くと、葵姉ちゃんは子供達の名を呼びながら応接間の中に入って行った。

葵姉ちゃん達に着いて行くように家族揃って母屋の居間に入ると僕はその場で正座をして改めて斎藤氏と対面した。

「先程はご挨拶を申し上げず、失礼を致しました。改めて初めまして。わたくし、そちらに居る董さんと葵さんの母方の従妹で、富士之宮 薫と申します。こちらに居るのが主人の和樹、ここに居るのが娘の桜です。ほら、桜。こんにちは、は？」

「こんにちは——。」

「ええと、初めまして。家内から紹介を受けましたが富士宮 和樹と申します。」

「ああ、御丁寧にどうも……。私、斉藤 由伸と言います。宜しく願います。」

「いえ、こちらこそ……。」

と、挨拶もそこそこに男達は互いの名刺を交換していた。

「おや、富士宮じゃなくて富士『之』宮というんですか？変わった苗字をされていますね。」

「ええ、まあ……。元は普通に地名の富士宮だったらいいのですが、明治の苗字許可例の頃に、当時の当主が普通の書き方ではつまらない、と言って屋号ごと取り替えたそうで……。」

「ああ、そうなのですか……。しかし本当に変わったお名前をされていますね……。」

最初こそ斎藤氏のあまりの年上加減に和樹も面食らったようであったが、流石会社に働きに出て一家を支える社会人。こういう場面にも慣れているのか、挨拶もそこそこに手慣れた感じで世間話を交わしていた。

そんな夫の様子を久々に感心しつつ眺めていると、薫ちゃんが此方にやってくるのが僕の視界に入ってきた。

「さっきも声が聞こえて来ていたけど……、これが桜ちゃん？ ちよつと見ない間に大きくなつたわねえ……！ もう喋る事が出来るの？」

「ええ、まだまだ発音も話し方も拙いけれどね……。」

「そうなんだ……。でも本当、久しぶりね、桜ちゃん。お姉ちゃんの事覚えているかな——？」

そう言つてニコニコしながら腰を屈めると、薫ちゃんは顔を近づけてまじまじと桜を見下ろしていたが、当の桜の方は困つたような迷つたような表情をして小首を傾げ、彼女の顔を見上げていた。

「生まれてすぐの頃だったから流石に覚えていないわよ。……桜、

この人は薫叔母さん。お母さんの従妹で、棗ちゃんと翔くんのお祖母ちゃんの娘さんで、葵伯母さんの妹に当たる人よ。あなたが生まれたばかりの頃に、一度家の方に訪ねて来てくれた事があるの。」

「ふ——ん。」

従妹に向かつて笑い掛けつつ桜に目の前にいるのがどういう人なのか説明していると、突然当の従妹が素頓狂な声を上げた。

「もうやだなあ、薫ちゃん。『おばさん』じゃなくて『お姉さん』でしょう？ わたし、まだ25だよ。」

「後5年もすれば30でしょう。それにもう既に棗ちゃんと翔くんという姪子と甥子がいるし、この娘だってあなたから見たら姪子のような者なのだから、叔母さんでも別段問題ないでしょう？」

「分かつてないなあ、薫ちゃんは。気分だけでも若く居たいじゃない。プンプン！」

そう言つと、薫ちゃんは両手の拳の人差し指を立て、頭の上に乗

せて鬼の角のように天に向けると、怒ったように軽く興奮した調子で態とらしくそんなぶりっ子のような仕草をした。そしてまたにこりと微笑むと、桜と相對した。

「でも、本当、可愛いわねえ。頬ぺたもぷにぷにしている……。」「モフモフというか、ふつくらとした赤味が差した頬を指で摘まれて少し不快に思ったのか、

「む——っ。」

と言って桜は嫌そうに顔を顰めた。だが、親馬鹿だと言われたそれまでのものかも知れないが、そんな表情すら可愛いと僕は感じた。一方、董ちゃんの方は気が付いていないのか、それとも分かった上で楽しんでいるのか、僕は彼女から面と向かってこんなお願いをされた。

「ねえ、董ちゃん。わたしにも抱っこさせてくれない？」

「……？別に構わないけれど……。そこにシヨーちゃんも居るじゃない。」

董の左側、丁度彼女を挟んで反対側に座っている葵姉ちゃんと棗ちゃんと一緒に饅頭を齧っていた翔の方を僕が冗談めかして指差すと、間髪も入れずに彼女は首を横に振り、そして憂えるように軽い溜息を吐いた。

「だって、あの子ったら全然抱っこさせてくれないんだもの。すぐにどこかへ行こうとしちゃうし。」

拗ねたように顔を右に向け、肘を机に突いて掌を空に向け、その上に顎を載せて口を尖らせている董ちゃんの様子を見て、耐え切れず無意識の内に笑みを零してしまい、

「まあ、男の子だもの。じっとしてられないのは仕方が無いわ。」

……わかった。じゃあ、ちょっとだけ桜を抱っこさせて上げる。」と、眉を八の字にして不安気に僕の顔を見上げている桜を持ち上げ、僕は彼女の膝の上にそつと娘を座らせた。

桜の小さな尻が太腿の上に着地するや否や、

「きゃ——、凄くもふもふしてる——！可愛い——！」

と嬌声を上げて董ちゃんは僕の娘をギュツと抱きしめた。相当力が強いのか、何かから逃げるようにべそを掻いて僕の方に手を伸ばしている。やはり愛おしい。親として娘を助けたいという気持ちも勿論あったが、それ以上に困っている娘の動作をもっと見ていたいという、少し意地悪な気持ちの方が勝った。それに、自慢の子供を褒められてちよつとだけ鼻が高くなった、という事もあった。不満気に口を尖らせて僕の顔を睨めつける桜を宥めるように、僕は董ちゃんの腕の中に居る彼女の髪を優しく撫でた。

積もる話や、部署は違えども同じ会社であるという董ちゃんと由伸さんの馴れ初めなど、雑談で盛り上がっている内にあつという間に時間が過ぎ、夕飯の時刻になった。

祖母達の宣言通り、子供達が楽しみにしているであろう今夜のメインディッシュを祖母と伯母と葵姉ちゃんと共に造り終えると、僕はガスコンロの火を消してエプロンを脱ぎ、近くにあつた椅子の背もたれに掛けて台所を後にした。そしてぐるりと回って旧館から新館へ渡るとそのまま廊下を応接間に向かつて……、ではなくその向かいの廊下の角にある台所横の六畳間の前で立ち止まり、白い蛍光灯の光が燦々と漏れるガラス障子をガラガラと音を立てて開けた。

部屋の中では、笑顔をつくりつつも何処か居心地の悪そうな顔をして胡座を掻く由伸さんと正座してニコニコと脳天気 to 笑いながら何処か一点を見つめる董ちゃんと共に、彼女の視線の先で仲良く此方に背を向けて三角座りをし、離れに置いてあるテレビの中で一番大きな液晶テレビに映るNHK教育の夕方の子供番組を一心不乱に視聴しているちびっ子3人組の姿が僕の目に入った。

この部屋は今夜から当分の間、董ちゃんと由伸さんが寝泊まりする部屋となる筈なのだが、恐らくアニメ等を見たくて応接間から子供達が押し掛けたのだらう。全く仕方がない事である。

此方の気配に気付いたのだらうか、振り向いた由伸さんと目が合った。僕は申し訳なさから苦笑しながら一礼した。

「すみません。何かウチの子供達がお邪魔してしまったみたいで……。」

「いえいえ、そんな事はないですよ。僕も子供は好きな方ですし……それにみんな良い子達ですからね……。」

「そんな滅相もないですわ。御迷惑でしたでしょう?……本当しゅうがないんだから……。」

すると今度は董ちゃんが振り返った。

「そんな事ないわ。わたしが呼び寄せたようなものだもの。」

「ごめんなさいね。何かわたし達の代わりに子供達の世話を押し付けてしまったみたいで……。」

「そんな気にしないで。……ところで薫ちゃんこそどうしたの? 御飯?」

「ええ、少し早いけれど夕御飯が出来たから来て頂戴。由伸さんも一緒に……。それに子供達も! もう御飯だからテレビを消して此方へ来なさい。テレビなら向こうでも見られるでしょう?」

「はい!」

合唱のように元気よく声を揃えると、そうは言っても名残惜しうに渋々と子供達は立ち上がった。

「ほら、早くしなさい。でないとすき焼きが食べられなくなってしまうわよ!」

そう僕が声を掛けた途端、棗と翔の方がピクツと震えた。そして

……、

「すき焼き!」

「すき焼き!」

「焼き——!」

「すき焼きだ——!」

「すつき焼つきだ——!」

「だ——!」

と、またもや桜までも交えて子供達は変な踊りを踊り始めた。

「はいはい、分かったから。ほら、早くしなさい。」

「は——い！」

「ところで、棗ちゃん。お父さん達が何処に居るか知らない？」

僕は男達の姿が見えないので、何処に居るのかと最年長で一番言動がしっかりしている棗ちゃんに問い質した。すると彼女はキョトンとしつつもこう返事をした。

「お父さん達？応接間にいるよ——。」

「分かったわ。ありがとう。」

硝子障子をピシャツと閉めてその足で応接間に向かう。

ソファーにゆったりと腰を下ろして手足を伸ばし、完全に心身共にリラックスしている、という感じの、テーブル越しに向かい合った和樹と誠さんの姿が僕の目に飛び込んで来た。

「あなた……。誠さん……。二人揃って何をやっているのですか……。」

呆れながら溜め息混じりに僕が口を開くと、兩人共、特に誠さんの方は、ばつが悪そうに俯き、後ろ髪を搔いていた。

「いや、悪いとは思ったんだけどさ……。桜の奴がどうしても見たいて聞かなくて、ねえ……？」

「董ちゃんが、どうぞどうぞ、って言うからついつい言葉に甘えちゃって……。」

「……………」

僕はその意気地がないというか、はきはきしないというか……、何とも情けない男共の様子に思わず目を細め、また大きく息を吐いてしまった。

「まあ、兎に角、もう晩御飯にしますから二人ともさっさと此方に来て下さい。……あ！それと誠さん。棗ちゃんと翔くんの事なのですけれど……………」

「分かっています。ちゃんと連れて行きますから。」

「では、お願いしますね。」

3人で応接間の中を片付けて電灯を消し、部屋を後にすると、そのまま母屋へ去っていく和樹と別れて僕と誠さんは向かいの部屋の障子をガタンと開けた。そうして未だにすき焼きダンスを踊ってルンルンと燥ぐ桜を捕まえ、しっかりと胸に抱き抱えた。

生まれて初めて見たすき焼きの鍋を目の当たりにして、想像していた物と大分異なっていたのか、半ば呆然と桜は僕の膝の上で、クツクツと煮えた黒い鉄鍋の中でもうもうと湯気を上げる中身を見つめていた。

「ママ……。これが、すき焼き？」

「ええ、そうよ。」

「……………おいしいの？」

「凄く美味しいわよ。」

「………本当？」

「本当よ。さあ、そろそろ食べ始めるみたいだから、いただきます、の準備をしなさい。」

「うん！」

そして祖父の号令と共に娘と一緒に手を合わせ、

「頂きます！」

と言うと、僕は卵を各人へ回していた祖母からそれを受け取ると、普段し慣れたやり方でテーブルの甲板の上で殻を割って、手元の小皿の中に中身を投入し、黄身や白身を切るようにグチャグチャに掻き混ぜると半身を乗り出し、とり箸を用いて鍋の中から肉や白菜等を適当にピックアップした。

「ほら、桜。ア——ンってして。」

「ア——ン。」

親鳥に餌を求める雛鳥の様に、大きく口を開けて僕を見つめる桜の口元へ、

「はい、お肉よ——。」

と、ゆらゆらと高そうな牛肉の切れ端を見せながら近付けていき、その口内へ放り込む。肉を啜えるや否や咄嗟にパクっと口を閉じ、味を噛み締めるようにもぐもぐと頬を膨らませる娘の仕草を見下ろし、

「美味しい？」

と、僕は彼女に声を掛けた。

すると、桜は元気よくこう答えた。

「うん、美味しい。」

「そう、良かった。」

始終ご機嫌な桜の頭を優しく撫で撫でしている内に、いつしか夜も更けていた。

第十一話：大晦日とお正月

>> 薫

大晦日の朝が来た。

気のせいだろうか？翌日からの正月の準備の忙しさとは別に、何となく家の一角、特に子供達が固まっている辺りの空気だけがやけにフワフワと浮っているような、不思議な感覚がして僕は頗る気になった。

だが、そのウキウキとした雰囲気を纏う発生源が判ると何とでもない。ただ単に至極ご機嫌な棗ちゃんが楽しそうに歌を歌っているだけである。

「もー一日寝ると、お正月〜、明日は楽しいお正月〜」

黒豆を煮たてる間、珍しく母屋の居間で集まっている子供達のそんな愛らしい様子を源氏禊の陰から見守って悦に浸っていると、

「そうか〜、もう今年もお終いか……。」

と、突然顔のすぐ右後から息を吹きかけられて、僕は驚いて振り返った。が、目の前にあった董ちゃんの顔を確認した途端、拍子抜けしてしまった。

「もう何よ？薫ちゃん、そんな顔なんかして。わたしの顔に何か付いている？」

「いえ、何でもないわ。少し吃驚しただけだから……。」

「ふ——ん？」

咄嗟に誤魔化してみたものの、怪訝そうに董ちゃんは僕の顔を凝視した。

「でも、そんなところで何していたの？」

「ちよつとね……。お豆さんを煮ている間に、少しだけ子供達の様子を見に行こうと思ってね。」

その時突然、董ちゃんが僕から目を逸らしクスリと笑った、よう

な気がした。

「……………」

思わず彼女の顔をじっと見つめると、今度は微かにクスクスと笑い声を上げた。

「どうしたのよ？急に。」

不審に思つて訊ねると、董ちゃんは僕にこう答えた。

「ううん。……本当に桜ちゃんの事が大好きなんだなあ……つて。」

「当たり前でしょう！自分のお腹を痛めて産んだ、掛け替えもない大切な娘なのだから。今のわたしにとって一番の宝物よ。」

「フフフ……」

「なあに？また……」

「いやね。わたしにも桜ちゃんとか棗ちゃんみたいな可愛い女の子が出来たら良いな……。つて思つて。」

そう呟いた董ちゃんの、幸せそうな横顔を見て、どういつ訳か僕はとてつもなく羨ましく思った。外面だけは幸せそうな家庭……、恐らく彼女が想像して羨んでいるであろう物を既に手にしているのにも関わらず、である。

急に沈黙したからだろうか、

「どうしたの？」

と董ちゃんに声を掛けられて、やっと僕は我に返った。

「いいえ！何でもないわ。少し考え事をしちゃっていただけ。ごめんね。何か心配掛けちゃって……」

「ううん、大丈夫なら良いの。」

「そう。……あ、そうだ。そろそろお鍋の様子を見に行かなくちゃ。董ちゃん、悪いけれど手伝ってくれない？」

「良いわ。何をしたらいいの？」

僕達は立ち上がると、揃って台所へ引き返した。

今年最後の晩御飯。

本来なら、皆で相互的に今年の勤労を労い、時の過ぎ去る速さに感慨深い物を感じつつ来年へと想いを馳せる、楽しくも儼かな時間が流れるこの時でさえ、子供達の無邪気な叫び声が反響する。

「あ！ドラえもん！」

「ピーン！」

「ガッツ！」

年末特番の内、どれを見ようか、とリモコンを手中に収めた葵姉ちゃんがパラパラとチャンネルを変えていた最中、一瞬だけ画面に写ったドラえもんのアニメを見逃さなかった翔が大声を出した瞬間、変な奇声を上げて桜と棗が勢い良く立ち上がってテレビ画面を睨み付けた。

「お母さん。わたし、ドラえもん、見たい！」

「僕も——！」

「は——い、は——い！桜も——！」

案の定、チビ達はチャンネルの全権を握る葵姉ちゃんにしがみついた。

こうして目出度く子供らの要望が通り、画面が子供向けアニメに変わった途端、今度は和樹や誠さんが渋い顔をして愚痴をこぼし始めた。

「アニメかあ……。」

辛気臭い声を出す夫達の視線の先にある新聞のテレビ欄の文字列を覗き込む。

『年末最強王座決定戦！プライド祭り！』

どうやら裏番組として放送している年末恒例の総合格闘技を観戦したいらしい。そんな事言ったら僕だって紅白歌合戦とかN響の第九とかを聞いてみたいが、桜たちがアニメを見たいというから、自分が見たい物は我慢しているのに……。かなり深刻な頭痛を感じ、僕は無言で頭を抑えて溜息を吐いた。

「ママ……。ねえ、ママ！どうしたの？」

急に可愛らしい声が聞こえてきたので、額に当てた左手の所為で視界を塞ぐ左腕を少しだけずらすと、酷く怯えた様子の桜が垣間見えた。どうやら僕の体の具合が悪いのか？とこの娘なりに気を遣っているようだった。

僕は茶碗と箸を机の上に置くと、膝の上で座っている桜をぎゅっと抱きしめた。

「大丈夫よ。少し目眩がしただけだから、心配させてしまつてごめんね。」

「本当……？」

まだ疑っているのか、桜は僕の瞳の中を覗き込んでいる。

「本当よ。……ほら、ドラえもんが始まつたわよ。」

ドラえものの『ど』が出るや否や、桜はもうテレビの方へ顔を向けていた。僕はそんな娘の様子を面白可笑しく思いつつ、彼女と同じ様にテレビの方へちらりと視線を向けた。

何気なく時計を見ると、もう深夜23時半を過ぎていた。宴が終わり、夕食も片付け終わった母屋の居間では、全員がNHKを映したテレビの画面をぼんやりと眺めながら、新しい年に向けて思いを馳せている。

そして、そんな僕の膝の上には、棗ちゃんや翔くんを膝枕している葵姉ちゃんや誠さんと同じ様に、パジャマに着替えた桜が、僕の方に頭を向けて仰向けになり、大の字になって沈没していた。

僕は、僕自身も少しうとうとしつつも、桜の頬を不規則に撫でながらその寝顔をぼんやりと見つめていた。

やがて、遙か遠くの方から、ゴ——ン……ゴ——

——ン……と、耳を澄まさないで聞こえない程微かだが、厳かで重みのある音が聞こえて来た。除夜の鐘である。

「おお、鳴ったなあ……。」

そう感慨深く呟いた祖父の一言を合図にするように、誰ともなく、

「明けましておめでとう御座います。」

「此方こそ。今年も宜しく願いますよ。」

と新年の挨拶を交わした。

「それじゃあ、子供達も寝潰れてしまった事だし、もうそろそろ我々大人も休みましょうか……。」

「賛成！じゃあ、わたしがショーちゃんを運ぶから、セイちゃんはソーちゃんをお願い。」

「よし、分かった。……よいしょっ！」

「よっこらしょ……。そうだ、クーちゃんは大丈夫？オーちゃんも眠っちゃったみたいだけれど……。」

「大丈夫よ、お姉ちゃん。心配しないで。……よいしょっ！」

そう葵姉ちゃんに返事をする、僕は桜を抱き上げた。すると事件反射だろうか、

「にゅう……。」

と寝言を喋りつつ両手で僕の胸に抱きついてきた。

僕は自分の乳房に顔を埋めている幸せそうな娘の寝顔を見つめ、ポンポンと彼女の背中を優しく叩いた。

「よしよし。良い子良い子……。さあ、お布団の中に入りましょうね。……それでは、わたし達は一足早く休ませて頂きますわ。……行きましょう、あなた。」

「お、おう。」

和樹を促して立ち上がると、僕は改めて祖父母達の方へ振り向いた。

「じゃあ、お休みなさい。」

「わたしもお休みなさい。」

「お先に失礼します。」

「お休みなさい。」

「ああ、お休み！」

「また、朝に……。」

そして、ぼく等4人は居間から退出した。

2043年、元旦。

いつもの様に僕の布団に潜り込んでいた桜に声を掛けると、眠気眼を擦りながら彼女はのっそりと起き上がった。

「むにゅ……ん……。あ、ママ、おはよ……。」

「おはよう。さあ……。曾お祖父ちゃん達に御挨拶をしなければいけないから、お着替えしましょうね。」

「……………」

もうこの娘の癖となっているのだろうか？桜は疑問をたつぷりと含んだ視線を上目遣いで投げ掛けていた。

「今日は、お正月と云って、古い年が開けて新しい一年が始まる大切な日だから、曾お祖父ちゃん達にお会いしたら、いつもの『おはようございます』ではなくて、『あけましておめでとうございます』って言わないと駄目よ。」

桜に万歳をさせ、パジャマを脱がしながらそう言っていると、彼女は僕の顔を眺めたまま愛らしく首を傾げた。

「あけ……。お……。？」

まだお正月がどういう物なのか理解していないのか。それとも、流石にまだ長いフレーズを流暢に話す事はこんな小さな子供にとっては難しかったか……。桜は上手く言う事は出来ない様だった。本人も臍げに自覚しているのか、何となく目元を潤わせてように僕には感じられた。

「う——ん、桜にはちょっと難しかったかな……。」

「む——っ！」

「じゃあ、ママがフォローしてあげるから、おめでとう、だけははつきりと言いなさいね。」

僕がそう言っていると、ムツとしていた桜はニカツと笑い、

「うん！わかった！」

と、元氣よく答えた。

家族揃って母屋の居間へ行くと、すでに御節料理の入った、金時絵が施された黒い漆塗りの五段の重箱が机の上に並び、家の住人が皆揃っていた。

入り際に、祖父に声を掛ける。

「ごめんなさい、遅くなりました。」

「やっと来たか、待っていたよ。ほれ、薫も桜も和樹君も早く座りなさい。」

祖父に促されるままいつもの様に葵姉ちゃんの隣、祖父母の前に、桜を膝の上に乗せて座ると、娘は彼等に向かってこう言った。

「曾お祖父ちゃん、曾お祖母ちゃん、おめでとう、ございます！」

急に曾孫が叫んだ所為か、祖父母は少しの間呆然と桜の顔を見つめていたが、

「ほら、お正月だから年始の挨拶をさせようと思ったのだけれど……

……。まだ上手には話せないから……。」

と、僕が気持ち控えめに注釈を加えると、やっと納得したような表情をし、

「ああ！……桜ちゃん、明けましておめでとう。今年も宜しくね。」

「はい、明けましておめでとう御座います。今年も宜しく。」

と、朗らかな顔を向けながら曾孫に返した。

さて、これから皆でお節を啄む事になったのだが、桜の好奇心に満ちた視線は見なれない重箱に一心に注がれているようだった。ワクワクとした瞳を爛々と輝かせてそれを覗いている。

まあ、無理もないだろう。まず、恥ずかしながら我が家には重箱なんて大層な物は置いていないし、昨年お姉様の所で皆と集まった時にも、食卓の上には7段もあるような立派な輪島塗の大きな重箱が幾つか並んでいたと思うが、その頃の桜はやっとハイハイをし始めたばかりの、まだ僕の母乳を吸っている位本当に赤ちゃんだったので、恐らく彼女の記憶には一切残っていないだろう。

だから、好奇心旺盛な所があるこの娘が、殆ど初めて見る物に異常に興味を示すのも、親として何となく理解する事が出来た。

やがて、桜の興味はお重から、祖父が机の上に並べた重箱と同様に綺麗な白砂青松の金蒔絵の黒い漆器の膳の上に並べられた、きらとした銀粉と金粉が全体に塗された漆塗りの盃と盃台、そしてやや黄色掛かった銀色に輝く錫製の銚子に移ったようだった。今まで見た事もない煌びやかで趣のある和食器に暫し魅了されているように僕には思えた。

あの銚子の中には、味醂の中に屠蘇散を混ぜたお屠蘇がたっぷりと入っているのだろう。

僕等が見守る中、盃が載った盃台と銚子を両手に手にした祖父は、皆を見回してこう言った。

「それでは、皆さん。今年も皆の息災を願って、お屠蘇を戴きましよう。」

その場に居た大人全員がシャキッと居住いを正す。

「じゃあ、まずは年少のものから……。」

そう口にすると、祖父は首を左右にゆっくりと振って周りを見渡し、僕と葵姉ちゃん、もといそれぞれの膝の上に座って、状況がよく理解出来ていないのか小首を傾げつつ事の成り行きを見守っていた桜と翔の方へ視線を向けた。

「葵、薫。」

「はい？」

祖父に名を呼ばれ、僕と葵姉ちゃんは異口同音に返事をする。

「翔と桜は……、どっちが先に生まれたんじゃないけのお？」

「ウチの子です。」

すかさず返答したのは葵姉ちゃんだった。その声に翔がピクリと頬を震わせて反応し、何か期待に満ちた目で彼の母親の方を窺っている。

「そうか……。」

葵姉ちゃんの返答を聞いてそう呟いた祖父は、こう続けた。

「じゃあ、一番目は桜ちゃんか！」

その言葉を待っていたかのように、僕の太腿の上で、尻を着いて座ったままぴょんつと桜が飛び上がった。

「やった——！桜が一番——！」

一方、同じように葵姉ちゃんの胸の中で、

「え——ん！」

と泣きながら翔はジタバタと地団駄を踏んでいた。

そんな又従兄の無様な様を横目で眺めつつ、祖父、僕の経由で受け取った屠蘇酒が微量に入った盃を僕の介添えで手に取ると、その小さな手にはあまりにも大きすぎる杯を口元にやり、桜はお屠蘇を一気に飲み干した。

そして案の定、泣いた。

「びえ——ん！ママ——！ママ——！うわ——ん

！」

泣きべそを掻いて胸にしがみついた娘を、

「はいはい。」

とあやしなから僕はぎゅっと抱きしめた。

後日、葵姉ちゃんから聞いた話だが、お屠蘇を吞んで号泣したウチの娘を見て戦慄を覚えたのか、母親である彼女の膝の上で青い顔をしてガクブルと震えていたそうである。

苦くもないが旨くもなく、生薬の香りがプンプンと漂う黄色い屠蘇酒が入った盃を年少者から年配者まで順番に口を付けると、いよいよメインの御節料理に手を付ける事になった。

お重いっぱいに詰められた色取り取りの縁起物の中から、自分の

取り皿へ適当にピックアップしていく。

細かく角切りした蒟蒻が入った黒豆の煮物、田作り、数の子、海老を茹でたもの、だし巻き卵、伊達巻、蒲鉾、筑前煮……。そういった物を皿に取って自分でも食べつつ、桜の口の中にも放り込んでやる。箸で掴んだ食べ物を、

「あ~~~~ん！」

と、待ち構えるように大きく開けた娘の口元へ持つていつているとまるで自分が雛鳥に餌を与える親鳥にでもなったかのような気分になつてきた。

中でも、祖母手製の黒豆の煮物を桜は大層気に入ったらしく、

「お豆さん！お豆さん！」

としきりに連呼し、食べさせると頬を落として喜んだ。

自分もこの黒い煮豆が好きで思い入れが人一倍あるので、こういう娘の仕草を観察すると、やっぱり親子なのだなあと、しみじみと実感した。

1月2日、昼過ぎ。

僕達家族3人は、葵姉ちゃんと誠さんと共に、行きしと同じように誠さんの車に乗り込み、左側の前後の窓を全開にして、家の前へ見送りに出た祖母達と向かい合った。

「お祖父ちゃん、お祖母ちゃん。それに伯父さん伯母さん達も、お世話になりました。」

「それじゃあ、薫も和樹君も桜ちゃんも、気を付けて帰るんだよ。」

「また機会があつたら、春休みにでも遊びに来なさい。」

「はい、行けたら行かせて頂きます。」

「桜ちゃんも元気だね！」

「バイバ——イ！」

「ソーちゃん、ショーちゃん、曾お祖父ちゃん達もバイバイ！」

「はい、バイバイ！」

「京都の方にも宜しくな。」

「はい、伝えておきます。」

「それでは。」

ひと通り思い思いに惜別の情を述べると、誠さんは車を発進させた。

前庭にバックで止まっていた車が、動き出して門前の小道へ左折したのに合わせたように、親戚が門の外まで出て、此方に向かって手を振っているのがリアウインドウ越しに見える。僕は桜の手を取り、後ろに向かって手を振らせながら、今度は何時来られるだろうか、としんみりと感慨に耽った。

約10分で出雲縁結び空港へ到着して荷物を下ろすと、僕達は誠さんと別れ、受付カウンターのチケットの搭乗とスーツケースの搬入の手続きを済ませると、葵姉ちゃんと2階の出発口の前までやって来た。

「それじゃあ、お姉ちゃん。わたし達、一足先に東京へ帰るね。」

「ええ、クーちゃん。無事到着したら、此方に電話して頂戴。」

「分かっているわ。じゃあ、そろそろ……。」

「それでは葵さん、さようなら。皆さんに宜しく。」

「葵伯母ちゃん、バイバーイー！」

「はい、バイバイ。さようなら！気を付けてね！」

そしてとうとう葵姉ちゃんにも別れを告げ、僕等は搭乗口へ向かう事にした。

「はい、いらつしやいませ。御利用有難う御座います。御面倒をお掛けしますが、セキュリティの為、手荷物と身体の検査をさせて頂いています！」

金属探知の検査をする係員の声がする。小さな空港だから、出発ゲートから入ってすぐの所に検査をする機械とスタッフが待機している。

僕は桜を床の上に下ろすと、先に行った和樹に従って係員にハン

ドバッグと手持ちの電子機器を預けた後、桜を先に検査ゲートの向こうへ通そうとした。

だが、慌てた様子の係の男性にむんずと引き留められた。

「ああ、お嬢ちゃん！ちょっと待って、ストップ、ストップ！」

男性の声とほぼタイミングを同じにして、傍にいた若い女性スタッフが緑色の編み籠を手にして桜の傍へやって来た。桜は怪訝そうな顔で空港の制服を着たお姉さんを見上げている。

その女性は桜の目線と同じ位置になるまでしゃがみ込むと、優しくそんな口調でこう言った。

「ねえ、お嬢ちゃん。すぐに返して上げるから、その熊さん、お姉ちゃんに預けてくれないかな？」

「……………！」

すっかり忘れていた。縫いぐるみだって立派な手荷物だ。うつかりしていたとは云え、何かを隠すには絶好な物である以上、しっかりと検査に掛けなければならぬのは自明な事だろう。

「すみません、うつかりしていて……………！」

僕は桜からアーちゃんを取り上げて係員の女性へ渡そうとした。その途端、桜は大声で泣き出し、デディベアに掴みかかった。

「うえ——ん！やだ——！ヤダヤダ——！」

「我が儘を言わないの……………。心配しなくてもすぐに戻って来るから……………ね？」

「大丈夫。この機械にスウって通るだけだから。本当にすぐに戻ってくるからね。」

いつの間にか僕に加勢するように青い仕切りベルトの向こう側、機械の傍に居た男性スタッフも桜に向かって声を掛けた。

更には、桜の泣き声が聞こえたのか、

「何かあったの？」

と葵姉ちゃんが大声を上げたり、

「どうかしたのか？」

と、先に行った筈の和樹まで引き返してきたりした。

「大丈夫！大丈夫！大丈夫だから！」

もうどうにでもなれ！半分そう思いつつ僕は叫んだ。

搭乗口の検札機の前、大画面テレビがある場所、その沢山の並んだ椅子の一つに腰掛けると、先程の顛末を右隣で聞いていた和樹が人目も憚らず大声で笑い出した。僕の膝の上では、まだムスツとした表情をした桜が、大事そうに熊の縫いぐるみをぎゅっと抱きしめている。

どうにか桜を宥めて検査を無事に終えた後、和樹と合流した僕と桜は、いよいよ飛行機に搭乗する為に、他の数人の乗客と共に搭乗口の手前までやって来た。

眼の前に広がる大きな窓の向こうのパノラマには、これから乗るであろうJALの中型ジェット機が、今か今かその時を待っているようだった。

やがて時間が訪れると、僕等は搭乗口の奥の通路、飛行機の入りに向かって進んでいった。

CAにチケットを見せ、指示された席に無事に着席する。左舷側のエンジンと主翼がよく見える場所で、僕は桜を窓際に座らせた。向かいの通路側では、和樹が腰掛けている。

『皆様、本日はJAL1666便、出雲発、東京羽田行に御搭乗頂きまして有難うございます……。』

キャビンアテンダントが、そろそろ出発する事を案内し、緊急時の装備と行動について簡単に説明する。

僕は自分と、そして桜にシートベルトを締めつつ、

「そろそろ出発するわよ。」

と、桜に囁いた。

「ママ、本当に、お空、飛ぶの？」

「ええ……。でも、他のお客さんもいるから、静かにしなきゃ駄目よ？」

「うん！」

「それと、行きしの新幹線みたいに、お耳がキーンってなると思うから、もしそうになったらすぐにママに言いなさい。飴ちゃんを上げるから。」

「うん！！」

そうこうしている内に、管制塔から離陸の許可が降りたのだろう。貴重の機内アナウンスと共に、銀翼の巨大な鳥はゆつくりと、だが徐々にスピードを上げながら滑走路に向かって動き出した。

1時間半弱もすれば、東京に到着である。

急加速をして滑走路から飛び出した飛行機の窓から、どんどん遠ざかっていく下界の景色を食い入るように見つめる桜の横顔を眺めつつ、掃除や買い物など、帰ってからすべき事を僕はぼんやりと考えていた。

第十二話：お姉様、第二子の懷妊

>>薫

2043年、初春。

3月になつて、陽が射す時間も長くなり、寒さの中にも暖かさを感じるようになった頃、麗子お姉様に第二子のご懷妊が発覚したという事を聞いてお祝いに駆けつける為、桜を後部座席右側に乗せ、共に行く事になった杏子様の家の門前に、スーパーチャージャーを装着した190後期のレクサス・GS350を横付けた。

「じゃあ、ママ。杏子小母さんと圭一お兄ちゃんを呼びに行ってくるから、そこで良い子にして待っていてね!」

そう、シートベルトを外しながら後ろに向かつて声を掛けると、肩ベルトを背中の方に回し、まるで腰ベルトのみの2点式シートベルトの如く3点式ベルトで締め留められた桜は、

「うん!」

と、両手を上げて元氣の良い返事をした。

頭の中では解っている。6歳未満の幼児を乗車させる時はしっかりと固定されたチャイルドシートに座らせなければいけない、と法律で決まっている事くらい……。だけれども、面倒臭いのだ。セダンのような背の低い車に取り付ける為に背を屈めるのも、シートベルトを通して固く留めるのも、好奇心旺盛な我が娘を抑える為に一々神経を削るのも、チャイルドシートのバックルを嫌がって桜が留め具を外すのを、ミラー越しに気が付く度に叱りつけるのも!

だから、市から借りたチャイルドシートは旦那のアルファードの2列目シートの左側に固着したままにして、家族揃ってミニバンで出掛ける時にこそ使用するものの、普段の買い物などで自分の車を使って移動する時は、僕はシートベルトに直接桜を括り付けている。

子供と車と云えば、こんな事を思い出した。

この前の正月休みに京都の両親が此方に遊びに来た事があった。それで吉祥寺駅へ100系後期のマーク?で迎えに行つて父母と合流し、母を助手席へ、父を後ろの席に乗せて帰途についた後、マンシヨンの駐車場へ車を停めた時だった。突然後席左側から車外へ出ようとドアノブに手を掛けた父が突然素頓狂な声を上げた。

「ど……ドアが開かない!」

え?と思つて母と共に振り返ると、確かにドアが解錠されているにも関わらず、父が何度もドアノブを引張つても、扉は開く気配が一切ないようで、うんともすんとも言わなかった。

「あら?おかしいわ。ちよつと待つて!」

恐らくドアロックの不調だろうか?そう考えた僕は父を静止し、運転席のドアの内鍵に手を伸ばすと、一旦集中ドアロックを掛け、再びアンロックさせた。

「お父さん、どう?」

「駄目だ。開かない。」

そつと背後の様子を窺うと、父は苦虫を潰した様な顔で僕の方を見上げ、ぶんぶんと大げさに首を振つてみせた。

「じゃあ、ちよつと待つて。外から開けるから。」

そつ父に答えて車から降り、車体の左側に回つてドアノブに手を掛けた時、自分が後ろの2枚のドアにチャイルドロックをし、中から絶対に開かないように細工をしていた事を僕は今更ながら思い出した。

「何だ……。チャイルドロックを掛けてあつたのか、この車。」

僕が外からドアを開けたお陰でやつと車外へ出る事が叶つた父は、降車際にチラリとドアの金具が付いた側面を覗うや否や、流石運転歴40年のベテランドライバーと言う所だろうか、納得したように呟いた。

「手が届かないから、走行中に扉を開けようとするような仕草はまだした事が無いけれど、一応対策を取って置いた方が良かな、って思ってた……。」

「そりゃそうだ。……ところで、そう言えば桜はどうしたんだ？てつきり一緒に迎えに来るものだと思ったんだが……。」

「和樹さんが休みだから、少しの間だけ娘の面倒を見て貰っているの。二人ともお父さんとお母さんの到着を待っているから、さあ、早く上へ行きましょう。」

話を戻す。

「じゃあ、ママ。杏子小母さんと圭一お兄ちゃんを呼びに行ってくるから、そこで良い子にして待っていてね！」

「うん！」

桜の返事を耳にしつつ、僕は体を少し屈めると、充電ユニットからレクサスのエンブレムが描かれた黒くて四角い電子キーを抜き取り、それを手に降車すると、ドアノブに軽く手を触れて車を施錠した。

スマートキーって本当に便利な物だと思う。

大昔の車では、車を施錠しようとする、構造上必ずエンジンを切らなければならなかったが、キーレスエントリーカーのエンジンスターターはただの押しボタン型のスイッチだから、エンジンを掛けっぱなしにした状態でロックを掛けられ、運転者が車を離れる事が出来るので、子供だけを車内に残す時に非常に便利だ。空調が効いてようが効いてまいが犯罪行為には違いないが、少なくとも罪悪感は軽減する。

まあ、そう云いつつも万が一の時に備え、時々後ろを向いて車内の様子を窺ってはいるのだけれど……。やはり世間一般から見れば咎められることはあれ、あまり褒められる行為では決して無いだろう。

でも、今回は単に杏子様達を出迎える為にホンのちょっとだけ車から離れるだけだし、5分も経たない間の事だから、良いよね？…と自分に言い聞かせつつ運転席側から車体後部を回って八重樫邸の門前に立った。

進さんと杏子様と圭一君が暮らす家は、田園調布という場所柄を考慮すればかなり贅沢な造りなのだろうが、1階にリビング・キッチン・バス・トイレを除いて4部屋と2階に3部屋あり、建坪約50坪で7LDKの立派な庭付き一戸建てだった。

やや大きいと云う点さえ除外すれば、積水ハウスやミサワホーム等の住宅会社が建設販売しているような、外壁が少し灰色掛かったベージュで塗られた、シックで落ち着いた感じがする普通の住宅である。しかも青色の平べったい直方体のタイルが一面に敷かれた寄棟型の屋根の上には、それと判らないように小型の藍色の太陽光発電の電池パネルと黒い太陽光温水器タイルが何枚も仕込まれている。きっと、電気代だけでなく光熱費も格別に安く済んでいる事だろう。羨ましい事だ。

橙掛かった薄い赤色の花崗岩の、車の車輪の位置に合わせて設置された細い2本の石畳と白いコンクリートで拵えられた駐車スペースのすぐ傍から、建物を囲むように庭全体に芝生が生え、キラキラと爽やかに映える緑の輝きを瞬かせているのが、外から窺っても瞬時に知る事が出来た。それと、杏子様の趣味だろう、今はまだ冬が終わったばかりで何も育ってないが、ガーデニング用の土が入った色取りどりの植木鉢がスコップや如雨露と共に軒先に置かれている。きっと、暖かくなった時はこの庭を様々な色の花々が華麗に彩るのだろう。

軽く深呼吸をし、ウチのマンションの各戸の扉の前に設置されている物とよく似た、黒っぽい青銅色のメタルチックに鈍い輝きを放つインターフォンのボタンを押した。

ピンポ——ン……。

軽やかに鳴ったチャイム音から少しして、

「はい？」

という杏子様の声が小さなスピーカーから聞こえてきた。

「お久しぶりです、薫です。お迎えに上がりました。」

「ああ！薫ちゃん。……ちょっと待ってて。今、そっちへ行くから。」

ガチャリ……、と徐に黒い鉄製の玄関の扉が開くと、その向こうからややベージュ掛かったクリーム色のスカートタイプのスーツ姿の杏子様と、彼女の手につかれ、青い半袖のポロシャツとカーキ色の半ズボンの上から黄色いダウンジャケットを羽織り、任天堂の携帯ゲーム機を大事そうに抱きしめた圭一君が僕の目の前に現れた。

杏子様は一度後ろを振り返り、玄関の開き戸の鍵を施錠すると、愛息と手を結んだまま僕の眼前へとゆっくりと歩み寄って来た。

表の路地との境を分かつ門扉を押し開け、閉めると、杏子様は僕が開けた車の後部の左側のドアの開口部へ近付き、まずは圭一君を抱き上げて車内へ入れ、そして自分も乗り込んだ。僕は彼女達が乗り込んだ事を確認するとそっとドアを閉め、自分も運転席の方へ回り込んだ。

運転席に座り込んでシートベルトを締め、ハザードを消して右ウインカーを点滅させ、前後左右を確認してからギアをDに入れると、僕はハンドルをやや右へ切りながらサイドブレーキを解除した。

じわつと、されど力強くタイヤで地面を踏み込みつつ徐に大きな鉄の箱が動き出す。ふとルームミラーへ目をやると、一番左側に座って右にいる子供達の様子をそっと見守る杏子様と、新しく買って貰ったものなのか、圭一君が持ち込んできた携帯ゲーム機を巡って、

真ん中に座った彼と右側の席に据え付けられた桜が一緒にはしゃいでいる様が視界の中に入ってきた。

「そう言えば、薫ちゃん……。」

突然、杏子様が僕に向かって声を掛けた。

「はい？」

運転に集中しなければならぬので、僕は顔を前に向けたまま、目線だけミラー越しにチラリと彼女の方へ走らせた。

そこから有栖川邸へ向かうまでの道中、キャツキヤと楽しく騒いでいる子供達を脇目に見つつ、僕と杏子様は大人同士のお喋りに興じた。

有栖川邸に到着し、お互いに子供を傍らに座らせ、ダイニングルームのテーブルの上で杏子様と共にお姉様と小母様と対峙してからも、僕達はカップに入れられた温かい紅茶を飲みながら取り留めのない雑談を続けた。

「お姉様、二人目の御懐妊、御目出度う御座います。」

「御目出度う、麗子。」

「有難う、薫。そしてお姉様も。」

そんな感じで、近況について報告し合う。どうやらとうとうこの春に、杏子様の方では圭一君が聖リリカル女学院の付属の初等部（幼稚舎と初等部までは共学、中等部から大学までが女学）に、お姉様の方では麗奈ちゃんは同じく幼稚舎へ入学する事が決まったらしい。

そういう話の流れの最中、不意に杏子様から、

「そう言えば、薫ちゃん。桜ちゃんの就学前教育はどうする心算なの？」

と話を振られ、まさかこの手の話題が自分にも及ぶまい、と考えていただけに尻込みしてしまい、

「え？ええ——っ？」

と、僕は思わず返答に窮した。

勿論、母親として娘の将来や教育について全然考慮していなかった訳では決して無い。寧ろ、口に出した事はまだ無かったものの、内心ではかつての幼い頃の自分と同様に、桜には何処かの幼稚園で3年保育を受けさせよう、と考えていた。

でも、最近は仕事が忙しいようで余裕が無いのか、それ以上に心が無いのか、和樹の方は娘の教育に対して真面目に相談にのってくれない。それに幼稚園の就学年齢は満3歳から5歳程度まで、一方桜は先の木曜日にやっと2歳の誕生日を迎えたばかり……。具体的な話を始めなければならないと頭では理解していても、まだ1年近くも猶予があるし大丈夫だろう、と高を括って胡坐をかいているような有様だったから、いざこうして具体的に突っ込まれると困惑してしまっただ。

しかしながら、今現在娘を幼稚園に通わせている、かつて通わせて今息子を小学校へ進級させようとしている、という頼り甲斐がある先輩ママが2人と、お姉様という一人娘を立派に育て上げ、自分にとってもある種母親のような親しみを感じ得ないお祖母ちゃんが目の前に揃っているのである。普段、夫にも両親にも、ましてや義実家には絶対に持ち掛けられないこの手の相談をするには絶好の機会かもしれない。

おずおずとだが、ダイニングテーブルの傍の床に敷かれた絨毯の上で小さなお兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に無邪気に飯事を楽しむ桜をそつと横目で窺いつつ、僕はお姉様と杏子様と聡子小母様に打ち明けた。

「何処の幼稚園に入れるか、そういった事は殆ど未定なんですけど、桜には3年教育の就学前教育を受けさせようと思っっているんです……」

「でも、薫ちゃん。そう言って、もう既に幾つか願書を押さえているでしょう。」

「いえ、そんな事は全然！だって和樹さんともまだちゃんと話し合っていないもん！」

まるで、今の時点から願書を取得してある程度の準備をしていて当たり前だ、というような雰囲気纏って杏子様がさりと話したので、僕は慌てて否定した。実際、願書を取り寄せて戦略を練るところか、一体何処の幼稚園がどういう教育理念でどのような教育を実施しているのか？学費等の諸経費はどの位掛かるのか？そんな簡単な事すら判断出来ず、全く足元の覚束ない状況なのである。そもそも近隣にどれだけ幼児教育を行う学校法人があるのかさえ僕はよく知らない。桜に幼児教育を受けさせる、この事だって今時点では漠然と夢想しているに過ぎない。

ところが、というか尤もだというべきか、杏子様は文字通り目を点にして口をぽかんと開けながら僕の顔を見つめていた。

「ま……、まだ何処の願書も押さえていないの？！」

「え……ええ、まあ……。」

「ええつと……、薫ちゃんは桜ちゃんに3年幼児教育を受けさせたのよね？まずはその点を確認させて。」

「はい、杏子様、そうです。」

「だったら、早く志望園を決めて願書をゲットして受験をする手続きを取らないと！3年保育と云う事は、桜ちゃんの場合は多分来年でしよう？いくら桜ちゃんが早生まれの子だからって、男の子みたいに7歳から就学させる気は勿論無いでしょう？それとも、2年幼稚も候補に入れているの？」

杏子様は立石に水、それも怒涛な勢いを持つ土石流のように一気に捲し立てた。あまりの彼女らしからぬ早口に頭がついていけず一瞬目眩がしたが、僕は何とか食らいついた。

「いいえ、そんな事は……！杏子様が仰る通り、私も桜を6歳で小

学校に入れる心算ですわ。その為には来年には桜を幼稚園に入園させる心算です。」

「だったら……。」

「でも、まだ入園まで1年。入園試験が10月にあるなら、それでも相当な余裕がありますわ。それに杏子様、大概の幼稚園では要項を配るのは9月になってからの所が多いと思いますし。まだ慌てる時期ではないではありません？」

自分にも言い聞かせるように内心必死で反論すると、お姉様と杏子様、小母様まで三者三様に厳しい表情になった。心中不安を抱いている所為か、まるで焦燥感を煽られているように感じ、僕は思わず固唾を飲んで彼女等の顔を交互に逡巡した。

「薰ちゃん、甘いわ。」

杏子様はそう断言した。

「そ……、そうですか？」

僕はまたしてもたじろいってしまった。が、そんな事にはお構いなく、杏子様は話を続ける。

「願書が配布される9月まで悠長に待っていたら、他の人に全部取られて入園試験を受ける事自体が出来なくなってしまうわよ。こういう物は、先の入学手続きが終わった時点から向こうに掛けあって願書を予約して押さえておくものなの。」

何というんでも発言だ！そんな事をして許される、というかそこまでする必要があるの？と疑問を呈すると共に、まさか杏子様の口からそんな言葉が飛び出して来るとは予想だにしていなかった僕は、正直開いた口が塞がらなかった。

「そ……そこまでしなくても……。」

反論しようとして言葉を口から出したものの、よくよく周りを見渡せば、お姉様と小母様も、さも杏子様の意見に賛同しているが如く尤もらしい顔をしてうんうんと首を縦に振っていた。精一杯平静

を装ったが、僕は半端なく大きな衝撃を受け、心中穏やかでなかった。

杏子様の話は終わらない。

「そこまでしなくちゃ駄目なのよ。」

と言つて、彼女は鬱屈そうに溜息を吐いた。

「いい？ 薫ちゃん。何処でもそうだけれど、幼稚園や保育園には定員というものがあるの。そして、その人数は精々7、80人程度。規模が小さな所なら4、5人なんて場合もあるわ。」

「はあ……………」

「一方……、薫ちゃんもよく知っている事だとは思うけれども、幼児教育を子供に受けさせたいと言う親の数は年々増加しているわ。」

「……………」

「幼児教育を提供する側の席の数は決まっている。勿論、幼稚園やこども園の数も増えているから実際は増えているけれど、それだけで微々たるものよ。」

「……………」

「それに比べて、特に首都圏では、あなたのように子供に幼児教育を受けさせたいと希望している親の数が定員に比べて圧倒的に多いわ。そうした軋轢の中で、薫ちゃん、あなたはその人達と数の少ないパイを奪わなければいけないのよ。」

「それは……解りますけれど……。でも杏子様、願書なんて予約なんかしなくても、正式に配布された後から何時でも取りにいける物でしょう？」

「だから、甘い！ って言っているでしょう！」

少し興奮しているのか、杏子様の声が急に荒っぽくなった。

「薫ちゃん、幼稚園がそんな無尽蔵に願書を用意している訳がないでしょう？ 願書の数だって限られているのよ！ だからこそ、出来るだけ早い内に願書を押さえて自分の分を確保しておく必要があるの

！

杏子様の発言を受けて僕は吃驚仰天し、思わずその場で飛び上がりそうになった。

「まさか?! だって願書でしょう?」

僕が声を荒げると、杏子様は少々顔を顰めて再び溜息を吐き、右の頬に右の掌を添えて首を左右に振った。

「幼稚園の入園試験なんて、小学校や中学校の受験と違ってペーパーテストも体力測定もない、簡単な面接があるだけよ。それも親の財力と熱意、そして子供も挨拶程度が出来る位の躰をきちんと受けていれば誰でも入れるレベルのね。だから、願書の数と期間を限定する事で受験者の数が定員の数よりも多くなり過ぎないようにしているのよ。」

「はあ……。」

相槌を打ちながらも、なるほどな、と僕は思った。しかし同時にそんな卑怯な手段を講じて良い物だろうか? と実行に移すのはやや躊躇われた。

「でも、今からそんな真似をするのは如何かとも思いますわ。杏子様。」

「あら、そんな事もないわよ。」

と、不安を覚えて躊躇している僕と対照的に、杏子様は実にあっけらかんとしていた。

「だって、今から願書を押さえておくと言う事は、向こうに自分の熱意をストレートに伝える最適な手段なのよ。」

「……………」

「薫ちゃん、あなたが取捨選択する立場の人として、ずっと前から予約していて準備万端で来た人と、ギリギリになってから滑り込んできた人、どっちの方が好感を持てる?」

「それは……。」

圧倒的に前者だろう。事前に用意周到に手を回し、いざ満を持して事を行おうとしている人間と、突然思いついたように締め切りの直前で名乗りでた人間とでは、信用とかその人の本気の度合いとかを推し量る上で印象が大分異なってしまう。

だがしかし、である。仮に椅子取りゲーム宜しく早い者勝ちだったとしても、実際問題として今の時分から願書を予約しておくなどという芸当が果たして可能なのだろうか？

そんな素朴な疑問を僕が投げると、杏子様は悪戯っ子のような含みのある笑みを浮かべてこう答えた。

「国立や公立なら難しいかもしれないけれど、私学なら出来ない事もないわよ。……そうねえ、例えばリリカルとか……。」

目が点になった。が、同時に何故かしつくりと納得してしまっている自分がそこにいた。成る程、ウチの学院ならそういう事も平気でやりかねない。……というより事実やっているのだろう。杏子様の話し方やお姉様と小母様の反応を窺うに、そういう事であるらしかった。

その時、今まで黙って僕と杏子様の会話を聞いていたお姉様が、唐突にこんな事を提言し始めた。

「そうだわ！リリカル！……薫、あなたも桜ちゃんを聖リリカル女学院の幼稚舎へ入れて上げればいいのよ！」

「え？ええ——？！」

余程自分のアイディアがお気に召したのか、胸の前で掌を合わせてお姉様はニコニコと愛くるしい微笑みをその顔に浮かべていたが、反対に僕の方は突然の提案にどう反応すれば良いか判らず、ただ戸惑いのみを覚えていた。

更にそこへ杏子様が、

「まあ、それ良いわね！聡子小母様もそう思いませんか？」

と中腰になる位乗り気になり、彼女から同意を求められた小母様まで、

「そうね、とても素敵な事だと思うわ。」

と賛同したから大変な事になった。あれよあれよという間に、僕の意見は眼中にも入らず、桜は聖リリカル女学院の幼稚舎へ、という流れがほぼ確定してしまったからである。

安易に流れるのも抵抗があつたが、確かにお姉様の提案と杏子様の助言は僕にとって魅力的に思えた。

まず、桜のような女の子は男の子とは違い、入舎すれば幼稚園から大学まで一貫した上等教育を受ける事が出来る。しかも勉強以外でも家事等の花嫁修業から華道や茶道や楽器といった趣向性の高い教養まで一通りの事を身につける事も出来る。おまけに周りは基本的に良い所の令息令嬢ばかりである。自分の娘を純粹培養のお嬢様に仕立てる心算は毛頭も無いが、変な奴に絡まれる、悪行に染まるといった確率がぐんと低くなると云う意味では安心感がある。勿論エレベーター制の負の側面をもろに受けて学力的に残念な娘になりかねないという危険性も併せ持っているが、それを差し引いても通わず価値はあるだろう。偏差値的には三流校とは云え、腐つても『お嬢様学校』として極一部では知られた存在である。

次に、主に僕に様々な伝手があるという事が大きい。桜が入舎の面接を受ける頃にはお姉様は幼稚舎、杏子様は初等部に現役で通う子弟の保護者である。両人の言う所では、その子の兄や姉が園児だったり、園児の親が知り合いでその人から推薦があつたりした場合、学院側からかなり融通を図って貰えるらしい。加えて杏子様は高等部を、お姉様は初等部から大学まで首席で卒業し、二人共に高等部では学生会の会長だった。そして、二人の妹分であつた僕もそれを引き継いだ。決して縁故が深くないという訳では決してない。

更に僕の場合、曾祖母が学院の中核である高等部の理事長を務めていた。そういう意味で、学費等の出費に於いては目を瞑る事にし

て仮に桜を聖リリカル女学院幼稚舎に入れるとすると、他の子供達の父兄と比べて幾分か優位に立つ事が可能なのだ。はっきり言ってこれを利用しない手はない。それに娘にした所で、圭一君や麗奈ちゃんと一緒にの学校に行けるのであれば喜んでくれるだろう。いや、喜ぶに違いない。

ただ、お姉様や杏子様の話によると、幼稚舎の学費は年間200万円程掛かるらしい。まあ、定員を50人しか取っていないのだから仕方が無いのだろう。この上入学金や寄付金や雑費等が嵩むものだから、締めた出費は相当な額になる。我が家は夫の収入だけに頼っている以上、決断を下すには和樹とよく話し合わなければいけない。

結局、前向きに検討はするが一先ず夫と相談したい、という旨を杏子様やお姉様に告げ、杏子様と圭一君を田園調布の家に送っていった際、彼女等に協力してもらった約束を取り付けた後、僕は桜と共に帰宅の途に着いた。

赤く輝く夕陽に向かって首都高速を車で走行している時、ふと僕はルームミラーに視線を向け、

「ねえ、桜……。」

と真後ろにいる桜に呼び掛けた。

シートベルトに固定されつつも、窓の縁に両手を乗せて身を乗り出し、白い息が掛かる程顔を硝子に当てるように近付けて無邪気に対向車線側の車窓の景色を眺めていた桜は、僕の声に反応し、

「なあに？ママ。」

と応えながら僕の方を振り向いた。

「麗奈ちゃんと同じ幼稚園に桜も行きたい？」

「お姉ちゃまと……。」

「そう……。」

僕は鏡に映る桜から目を離すと、再び前方へ視線を向けステアリングホイールを握り直した。返事は……ない。

痺れを切らしてもう一度バックミラーへ目を遣ると、小首を傾げて鏡越しに此方を見つめ返す桜と目が合った。どうやら、僕の言った事がいまいち理解出来ていないらしい。

「何でもないわ。ごめんね。」

「……………」

桜は右に傾げていた首を反対側に傾け、なおも不思議そうな顔で僕の方を見上げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2898s/>

とある専業主婦の憂鬱

2011年10月8日03時25分発行